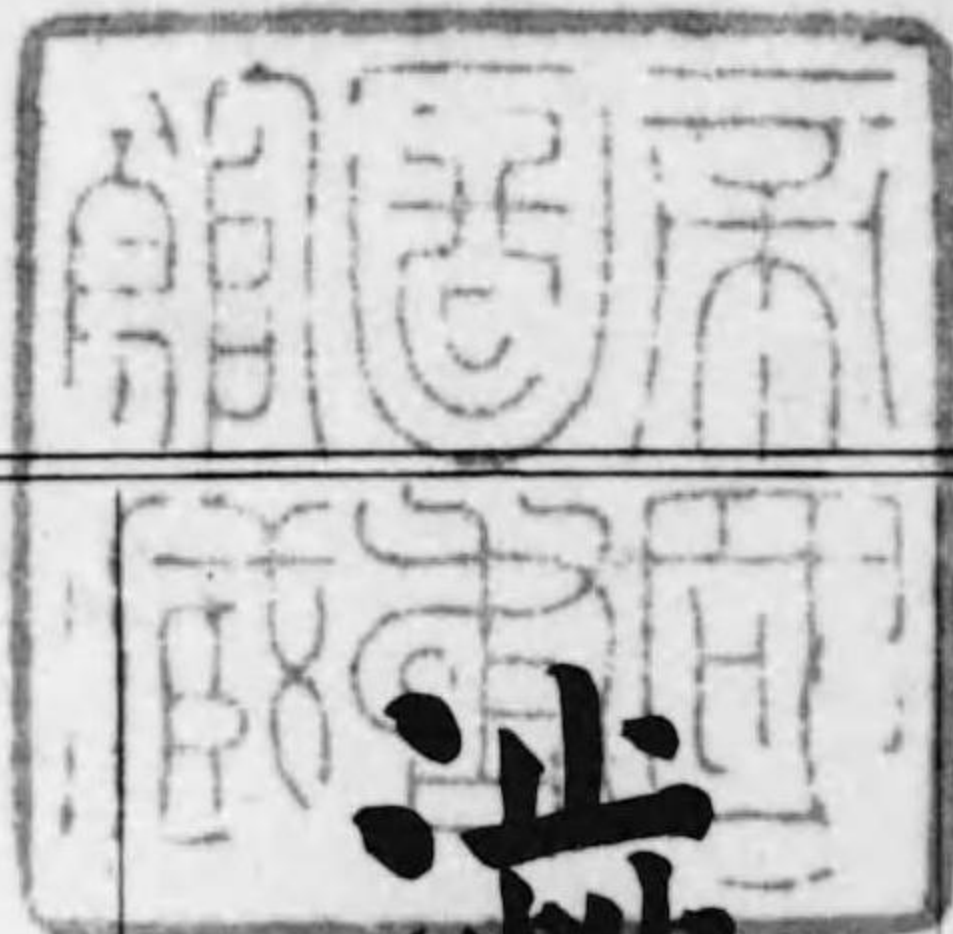




始



特233
522



澁澤榮一述

澁澤榮一自叙傳

澁澤翁頌德會

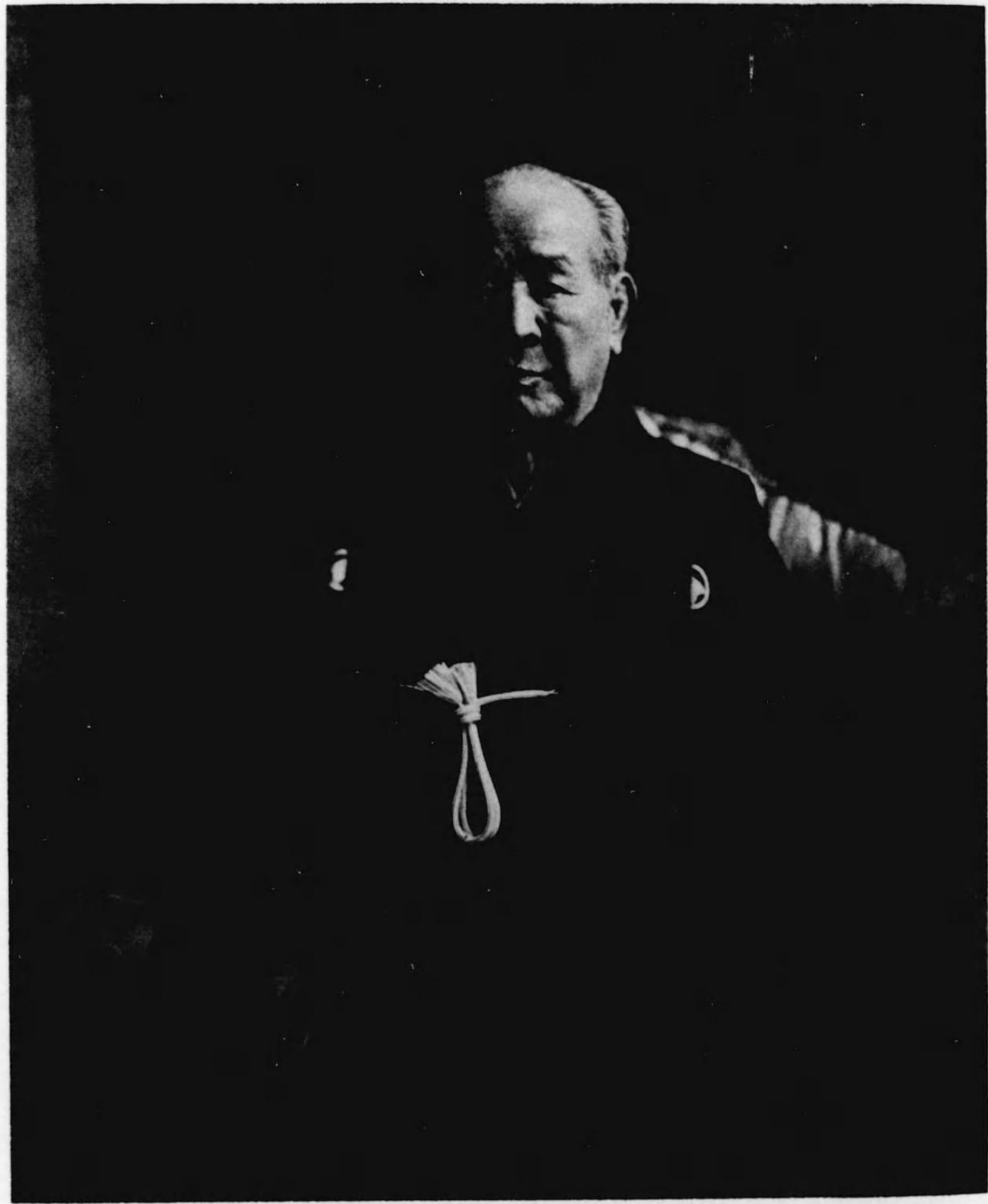


李光顯



師錄有

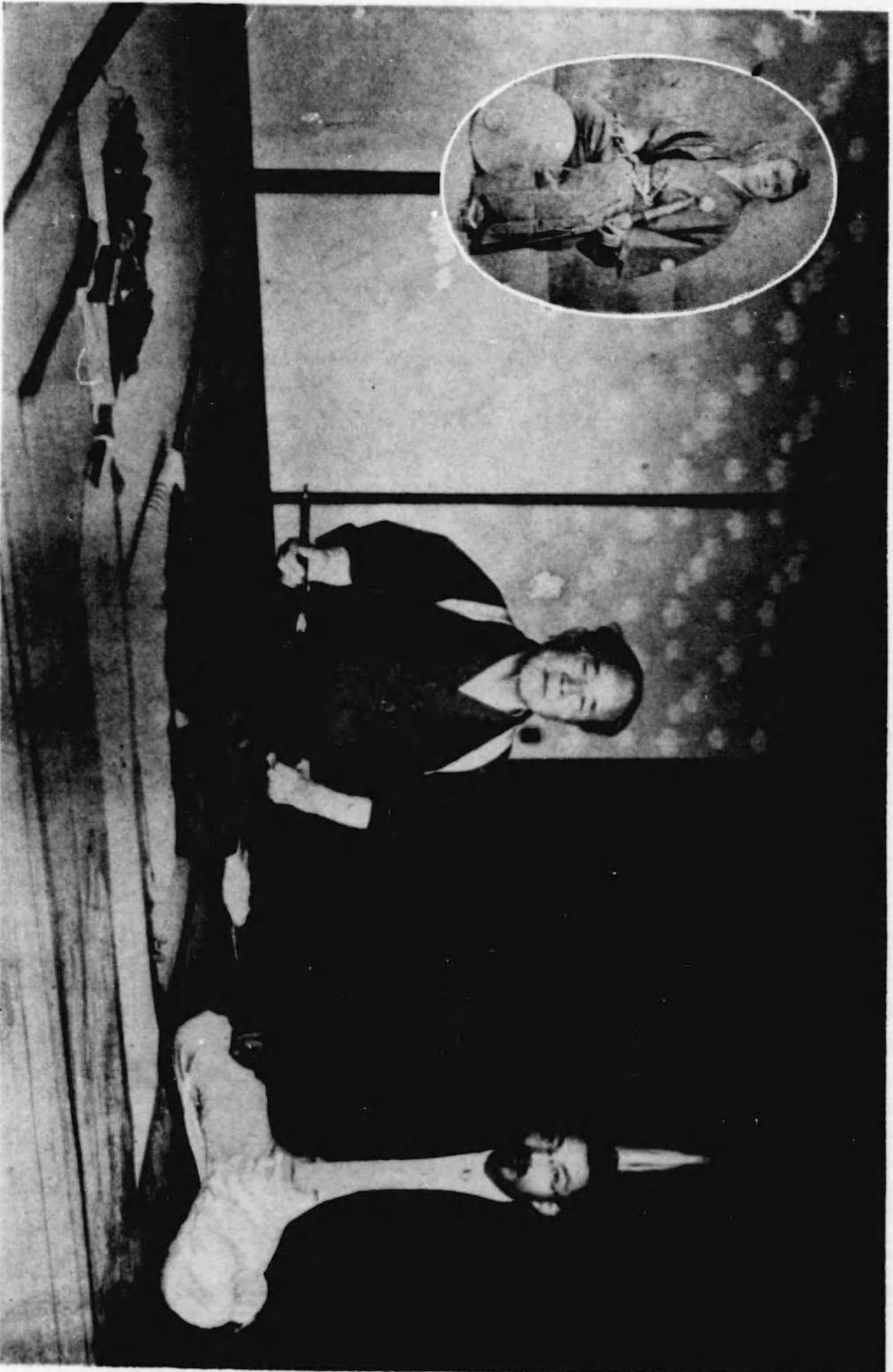




(月八年六和昭)像肖一榮澤澁爵子等一勳位二正



子澤誰の時當歳七ト二は圖上。君郎一修貫小者筆と爵子老澤誰の毫押御



第一則 處世接物ノ綱領

- 一 常ニ忠君愛國ノ意ヲ厚クシテ公ニ奉スル事ヲ疎外スヘカラス
- 一 言忠信ヲ主トシ行篤敬ヲ重シ事ヲ處シ人ニ接スル必ス其意ヲ誠ニスヘシ
- 一 益友ヲ近ク損友ヲ遠ク苟モ己ニ諂フ者ヲ友トスヘカラス
- 一 人ニ接スルニハ必ス敬意ヲ主トスヘシ安樂進興ノ時ト雖モ敬禮ヲ失フコトアルヘカラス
- 一 凡ソ一事ヲ為シ一物ニ接スルニモ必ス滿身ノ精神ヲ以テスヘシ積事タリトモ之ヲ苟且ニ付スヘカラス
- 一 富貴ニ驕ルヘカラス貧賤ヲ患フヘカラス唯知識ヲ磨キ德行ヲ脩メテ真成ノ幸福ヲ期スヘシ
- 一 口舌ハ禍福ノ因テ生スル所ノ門ナリ故ニ斥言隻語必ス之ヲ妄ニスヘカラス



序にかへて

公爵 徳川 家 達

澁澤翁の大人格、大人物を的確に評すべく、私は私の知る限りの形容詞を以てするも克く之を云ひ盡し得るものではない。翁は爾く偉大であり、宏遠なるところがある。

翁は一橋家に極めて深い縁故のある人で、その昔私財を投じて慶喜の傳記を編纂し、之れを汎く頒布して慶喜の國家に對する忠誠を世に擴められたことは、翁の性情の發露として、また國家的觀念の現はれとして、寔に微笑ましいほど奥床しい事實である。

維新前、翁は時の將軍の弟徳川昭武に隨伴して渡佛されたが、當時佛國皇帝はルイス・ナポレオン、即ち奈翁三世であり、我が國賓を迎へて大いに喜ばれ、深厚なる好意を表されたものである。昭武亦弱冠の身にして克く公務に任じ、日佛親善の爲めに幾多の功績を残して恙なく任を果たしたが、是れ澁澤翁が到れり盡せりの心遣ひに因る處多きは勿論である。引續き昭武が留學するに及び、澁澤翁は日夜、其の身邊を離れず、恰も慈父の如き眞實と熱誠とを以て何くれとなく心を煩

はされたものである。亞いで翁は實業界に身を投じ、自ら其の先驅者となつて本邦殖産興業の爲めに、畢生の努力と不斷の眞摯とを以て献身的に活躍され、著名なる銀行會社にして翁を煩はさぬもの殆んどなく、一時は其の關係する會社實に五十有餘の多きを算へ、業界千古不朽の一大功勞は竟に天聽に達し、特旨を以つて男爵を授けられ、更に子爵に陞爵されたのは、寧ろ當然以上の當然である。

私個人としても、また徳川家としても、澁澤翁とは離るべからざる關係に繋がれてゐることは人も知る通りである。乃ち私は色々の會に關係してゐるが、先づ私が會長に推されると、澁澤翁は形に影の添ふごとく必ず副會長となり、相談役或ひは顧問役として恒に私の至らぬ處を補つて呉れ、お蔭で淺學菲才の私も大過なく會長の任務を果すといふわけである。東京慈善會、協調會、或ひは臨時に設けられた大震災災善後會等一つとして翁の援助に俟たぬものはない。

翁は犠牲的大精神を遵奉し、温容、自ら徳を具へ、誠意克く人を導いて師父の如く社會から崇敬されてゐる事は今更言ふまでもないが、特に弱きを扶け、貧しきを恵み、極めて世話好きの人である。之れは純情神の如き崇高なる精神の現はれであつて、眞に私どもの推賞措かざる『徳の人』である。如何なる事にも『アンビション』と云ふもの、毫末も之れを持たぬ玲瓏玉の如き大人格者である。

あり、何事に依らず人に語れば先づ其の正邪を判じ、正しき事柄に對しては自己の利害關係を超越し、老軀を厭はず之れを一身に引受け、誠意と眞情を遺憾なく吐露して最後まで働くといふ至純至誠の人である。聞くところに依れば、翁は毎日數人の訪問客に押しかけられるが、如何なる場合にも忙中一閑を割いて一々面會し、鄭重に客を遇しよく其の語る處を傾聴して、それに誠意ある意見を述べて懇談を交し、決して玄關拂ひを喰はせる事が無いと云ふ。此の一事に於いて既に常人の及び易からざる大人格の閃めきを見ることが出来やう。英國では有名なる政治家グラッドストーン氏の人格を賞してグラッド・オールド・マンと言つた程であるが、澁澤翁も亦實に日本のグラッド・オールド・マンであると思ふ。

翁は身を持つるに謹嚴質實、眞に聖人の俦がある。其の過去は徹頭徹尾、公共博愛心の流露であり、救世済民の發揮である。殊に質素なる點に於いては寧ろ驚くべきものがあり、例へば服装の如きも平素恒に白き折襟に黒の蝶形襟飾を結び、夏冬寒暑を問はず黒の山高帽子を頂いて平然たるあたり、正に人生の哲理を極むる靈智の人を想はせ、或ひは順逆二境に超越せる天下の傑人を偲ばせるものがある。

近來富豪階級を見るに何れも贅澤極まる裝身具を身に佩し、中には男子の身も願みず、金剛石入

りの指環を指間に輝かして得々然たるあり、奢侈の風上下を通じて滔々たる今日、我が濫澤翁のみは専ら節約主義を標榜し、而も社會公共の爲めには百萬の財を惜まず、以て邦家興隆の爲め、人類福祉の爲め、名利を超越して献身的努力を續くる崇高なる態度は之れを神の行爲と見るも敢て濫美の言ではあるまい。

翁が七十歳の折であつたか、それとも七十七の時であつたらうか、記憶は瞭かでないが、兎に角古稀か喜字祝の催しが飛鳥山邸に行はれた時、翁は『これからまだ十數年生きて國家の爲めに働きたい』と言はれたものである。其際私は『翁の如き人格の士は今後十數年生きる位ではいけない。希くば數十年も生きて國の爲めに働いていただきたい。』と演説したが、あの時が七十歳とすれば今日まで既に十七年、七十七歳の時としても十一年、即ち九十歳に垂んとするの長壽を保たれてゐるのである。而も老軀を惜まず、或ひは講演會に、或ひは財界の爲めに又は冠婚葬祭の席上其他種々なる會合の席には必ず出席し、そして翁の好む論語や孟子を引用して大演説を試みられる。最近翁と合つたが八十八歳の高齢とは思へぬ程艶やかに肥り、其の精力の絶倫なる眞に驚異に値するものがある。私は五年程たてば七十歳であるが、九十歳近くして尙強烈なる奮闘彈力を其の胸宇に藏する濫澤翁の頑健振りに比べて内心太だ忸怩たらざるを得ないものがある。今後大いに翁の意氣に倣

ひ、老いて益々壯んならしむべく努めるつもりである。

翁は斯く健康に輝いて居られるが、記憶力の旺盛なる事も亦驚くべきものあり、徳川民部の留學に際し、之れに随伴して佛國に航した當時の事を時々話されるが、既に夢のやうに遠い過去の事柄を恰も昨今の出來事の如く一人の姓名から月日まで明瞭に記憶して居られるのは、私どもの常に感服してゐるところである。そればかりではなく、維新前留學された當時修めた佛語を今も尙記憶し、過ぐる日、佛蘭西大使の歡迎會席上、同席の人々に驚異の眼を睜らせられた事がある。其夜翁は冗談半分に『佛國人でもナポレオン三世にお目にかつた人は此席に居られなからう。勿論大使初め東洋に居られる人々の中にナポレオン三世と會つた人は恐らく私以外にはないかも知れない。』などと言はれた趣きである。實際ナポレオン三世と面識のある人が今尙世にあるかと思ふと若い人たちは不思議な位に感ずるであらう。

翁は小日向にある徳川公爵家の顧問であつて後見役的に公爵家の爲めに萬事抜かりなく勤め、當主未だ弱年なるに家政克く整然たるは偏に翁の努力に負ふものであり、此點に就いては吾々一族擧つて滿腔の感謝を捧げてゐる次第である。

近來、賣名の爲め、或ひは自己一身の利慾の爲めに自説を枉げ節を屈する者多く、精神界の墮落

慨嘆に堪へざるものがあるが、單り我が澁澤翁のみは神ながらの聖き心を以て翁本來の必然的欲求より國家の爲め、人の爲めに百年一日の如く至誠至純の努力を続け眞に救世主の觀あるは、其の大人格賞するに殆んど言葉なく、唯々日本は愚か、世界にも稀なる偉人と云ふべきであり、寧ろ全世界に斯かる偉大なる人格者は恐らく再び在るべからずとさへ思はれるのである。要するに翁は實業界の大成功者であると同時に精神界の大成功者でなくてはならない。國家の爲めにも亦翁自身の爲めにも吾々は百歳の長壽を祈念して止まざる次第である。

本書刊行に當りて

「澁澤の前に澁澤なく、澁澤の後に澁澤なし」と言はれる。實に青淵澁澤榮一翁こそは、近代日本の生んだ最も傑出せる人傑であり、大人格者であり、特に金融、産業、貿易を始めとして我が實業界の凡ゆる部門に亘りて今日の隆盛を招來せしむるに至つた産みの親であり、育ての親であり、其の偉大なる功績はその盛名と共に青史に燦として不朽に傳へられるであらう。

顧るに澁澤翁の傳記の世に公にせられたるもの既に十指に餘り、中には故翁の眞骨頂を髣髴せしむるに足るものも無いではないが、然かも尙ほ遺憾を感ずる點が尠くない。編者は望外にも澁澤翁の生前、その知遇を辱ふし、十餘年に亘つて翁自身の口述を筆記するの光榮を得たのであるが、去る昭和二年澁澤翁の米壽を迎へらるゝに當り、之を編纂して公刊し、幸にも絶大なる好評をもつて迎へられたのであつた。

今や我國は未曾有の重大時局に直面し、且つ複雑至難なる今後の國際情勢に對應して産業日本の興隆に資せんとする目的をもつて、故翁の七週忌を記念する爲め「澁澤翁頌徳會」が設立され、故翁の信條として唱道せられたる「經濟と道德の合一主義」を遵奉し、最も意義ある活動をなすに當

り、その事業の一として「澁澤榮一自叙傳」を刊行する事となつた。仍て澁澤翁がその後口述せられたる筆記に基いて増補改訂を行ひ、全然面目を一新して本書を刊行するに至つたのであるが、從來世に行はれてゐる傳記類と異り、澁澤翁がその生前に於て直接口述されたものであるだけに、本書こそは唯一無二の「自叙傳」であり、偉人澁澤榮一翁の眞面目の全貌を遺憾なく傳ふるものであることを固く信じて疑はない。

尙本書の内容に就ては別項はしがきにもある如く、翁の生前原稿全部の校閲を経る暇なく、従つて文責の一切は編纂者にあることを明かにしに置く。

昭和十三年一月

編著者 小貫修一郎識

は し が き

青淵澁澤榮一翁が、明治大正を通じての我國實業界に於ける第一人者であることは、餘りに有名な事實であるから、茲に屋上屋を架するの愚を敢てする必要を認めぬが、本書を編纂した経路を簡単に一言したいと思ふが、それよりも本書を昭和二年に初めて公にした時の編著者小貫修一郎君の言葉を借りて述べた方が讀者に便利だと思ふ。「抑も不肖が澁澤老子爵に親近する様になつたのは漸く大正六年以來の事であるが、本書は此の間に於ける老子爵の談話筆記を骨子として編纂したものである。

老子爵は非常に御多忙であるに拘らず、常に不肖を引見せられて懇切に御教示下さつた。多くは飛鳥山邸に於て講述せられたが、時には事務所に於て話され、或時は伊香保に於て、或時は湯河原に於て或る時は大磯に於て御話された事もあり、又或時には病床に、或は御多忙の爲め事務所へ御出かけの自動車中に於て話されたこともある。大正十年ワシントン會議に際して渡米せられる直前には、深夜十二時過ぎまで講述せられた事もあつた。又本書を初めて出版するに際しては「老子爵は之れを快よく承諾され、背文字や題字等を御揮毫下されたが、御多忙の爲到底原稿

に目を通す餘暇なく、若し強ひて校閲するとせば、三年かゝるか、五年かゝるか分らず、且つ澁澤事務所の人の目を通させるとしても、自分自身でなければ分らぬ點が多く、随つて校閲の効果が無い故文責は編纂者にあることを明かにしてくれ、さうすれば、原稿を校閲しなくとも差支ないと云ふ話であつた。斯ういふ経路で本書上梓の運びとなつたのである」であるから今回増補改訂して再び公刊するに際しても文責は一切編纂者にあることを茲に明記する次第である。

昭和十二年十一月

文 隆 學 人 識

「澁澤翁頌德會」趣意書

明治維新以來、我國に於ける産業の向上進歩は實に目醒しきものあり、その異常なる長足の發達は近世史上に燦たる光彩を放ち、世界の驚異の的となつて居るが、今日の超非常時を克服し、皇國の前途をして彌々光輝あらしむるには、之を産業の隆興に俟たなければならぬ。即ち國際情勢の變化に伴ひ國防の充實強化を期することは刻下焦眉の急務とする處であるが、之に伴ふて飛躍的に膨脹すべき國費を支辨し、國家財政の基礎を確立するには、産業貿易の隆盛を助長し國富の増進を圖るより外に途がないことは全く議論の餘地なき明白なる事實である。

更に我國の人口密度は世界第一であり、然かも人口増殖率も亦世界無比であつて、現状の儘にて推移するに於ては、將來我が國民の生存權は重大なる危険に直面しなければならぬ。従つて之が解決策としては種々の對策に俟たなければならぬのであつて、今回の支那事變の如きも此の意味に於て最も重大なる意義を有するものであるが、特に産業を振興し貿易の進展を計り、生産と人口との調節を實現することによつて人口問題並に失業問題の解決に努むることが、我が國情に適し且つ最も實行可能な對策であることは、是又識者の等しく認むる處である。

斯くて我が金融産業、貿易の持つ重要性は今日の超非常時に當つて特に倍加し、層一層國民の熱烈なる努力精進を要求するに至つた。今日の此の情勢を正しく認識し、時代に適應して金融産業、貿易の堅實なる發達を期することは、正に我が國民に與へられたる重大責務であらねばならぬ。而して此際特に痛感されることは其の指導精神を何處に求むべきかといふ事である。

故子爵青淵澁澤榮一翁は「經濟と道德の合一主義」を信條とされ、終生之を唱道せられたが、之こそは國家觀念に立脚せる故翁の偉大なる指導精神であり、此の精神を發揚することによつて産業日本の興隆は眞に期待せられるであらう。茲に翁の七週忌を迎へるに當り生前故翁の薫化を受けたる有志相諮り官民各方面の賛同を得て本會を設立し、故翁の遺徳を躰してその高邁なる不朽の眞精神を普及宣傳して産業の隆興に資し、併せて不世出の巨人澁澤榮一翁の徳を永く後世に傳へんと欲するものである。

幸に本會の趣旨を諒せられ御賛同を賜はらんことを。

昭和十二年十一月

澁澤翁頌徳會

澁澤榮一自叙傳目次

| | | |
|---|-----------|---|
| 序文 | 公爵 徳川家達閣下 | 一 |
| 題字 | 伯爵 清浦奎吾閣下 | 一 |
| 家訓 | | |
| 一、生立のころ | | 一 |
| 一、黒船來る——二、井伊掃部頭の人物と櫻田事變——三、兩親の性格と勉學當時の模様—— | | 一 |
| 四、十四歳で藍の買入に従事す——五、加治祈禱の修驗者を凹ます—— | | 一 |
| 二、修養時代 | | 三 |
| 一、舊幕時代の惡政——二、野心を押へて家業に精勵す——三、江戸出遊と志士との交際—— | | 三 |
| 四、再度の江戸出遊と尊王攘夷論—— | | 三 |
| 三、血氣憂國の志士となる | | 六 |
| 一、倒幕の大計畫——二、父晩香に他所ながらの訣別——三、旗揚げの準備着々として進む—— | | 六 |

四、東寧の極諫と暴擧の中止——五、親の情けに涙にむせぶ——六、郷里を脱れて京都に赴く——
四、幕府の祿を食む…………… 四

一、平岡四郎氏の説教——二、節を屈して一橋侯に仕ふ——三、恩人平岡氏の凶變と其後——
四、將軍繼嗣問題と豪族政治豫想——五、飯炊きもやり澤庵買ひもする——
五、慶喜公の長州征伐…………… 六

一、志願兵取立に成功す——二、歩兵隊の編成と篤行者の表彰——三、一橋家の財政革新を
圖る——四、近藤勇と壬生浪人——
六、遣佛使節隨行の準備…………… 六

一、陸軍奉行支配調役となる——二、巴里留學の恩命と其事情——三、滑稽至極な洋行の諸準
備——四、一行の顔觸と郷里の評判——
七、其頃の國內事情…………… 二二

一、薩長の内状を探る——二、三島通庸蠻勇を揮ふ——三、堂々と岡部の陣屋前を通行——
四、蛤門事變と天狗組の騒動——五、毎晩の宴會取持役に惱まざる——
八、西歐各國巡遊の首途…………… 三〇

一、遺憾なく赤毛布式——二、上海及び香港の初印象——三、眼に映るもの悉く珍奇の世界——
四、スエズ運河の開鑿を見る——五、馬塞上陸と驚異すべき新文明——
九、巴里大博覽會と狙撃事件…………… 三五

一、ナポレオン三世——二、平和の夢を驚かした歴山帝狙撃事件——三、狙撃刹那の光景と兇
漢の素性——四、巴里大博覽會と日本品の評判——
一〇、佛國首都巴里觀…………… 三七

一、銀行家フロリヘラルド氏——二、經濟組織の發達を痛感す——三、ナポレオン三世の氣焰
——四、歐洲各國を視察見學す——五、レオポルド二世の印象——
一一、初めて觀る西歐各國…………… 四五

一、巴里を發し瑞西に入る——二、和蘭の歡待と其國情——三、産業の盛んなる白耳義——
四、國情騒然たる伊太利——五、英領マルタ島の視察——六、大英王國瞥見の感想——
一二、王世復古と歸朝…………… 三五

一、新聞にて政權返上を知る——二、有爲轉變に感慨無量——三、歸朝後慶喜公との對面——
四、慶喜公の深慮と静岡藩出仕——五、合本組織の商法會所を經營——
——日 次——

一三、新政府大藏省の役人……………三〇

一、伊達宗城侯と郷純造氏——二、大隅侯の快辯に説伏さる——三、大藏省改正局の主任となる——四、廢藩置縣の斷行と大西郷——五、廢藩の跡始末と新法の實施——

一四、父晩香の死と當時の政界……………三七

一、覇氣なき當時の實業界——二、諮問會議で大久保卿に反對す——三、父晩香遂ひに病歿す——四、井上馨侯と共に挂冠す——五、井上侯と連署の建白書——六、依願免官の附令下る——

一五、幕末の偉人私(一)……………三四

一、七卿の一人三條公——二、智略に富める岩倉具視公——三、勝海舟伯の印象と逸話——

一六、幕末の偉人私(二)……………三八

一、京都にて大西郷と初對面——二、器ならざりし木戸孝允公——三、才略の優れた大久保利通公——四、自我の強かつた江藤新平——五、副島種臣と激論を闘はす——

一七、政治を斷念實業に専心……………三七

一、銀行業者となるまで——二、第一國立銀行の創立——三、意外の大打撃と其後の變遷——四、古河市兵衛の男泣き——

一八、銀行の經營運用機關……………四一

一、銀行條例の改正建議——二、東京銀行集會所成る——三、手形交換所及興信所の設立——四、不換紙幣の整理問題——

一九、商工業發達の機關……………四六

一、東京營繕會議所——二、東京商法會議所時代——三、再度更正して基礎定まる——

二〇、東京商科大学の由來……………四九

一、官尊民卑の因——二、商法講習所の設立と廢校決議——三、官立移管と初代校長矢野二郎氏——四、大學昇格運動の回顧——

二一、社會事業に就て……………四九

一、窮民と授産事業——二、育兒上の一發見——三、無情な府會と養育院の獨立——四、養育院の基礎確立す——五、慈善に對する意見——

二二、私と株式取引所……………四七

一、在官時代より可否の大議論——二、取引所の變遷と私の立場——

二三、岩崎彌太郎と西南の役……………四八三

一、我海運事業の今昔——二、白熱的の兩汽船會社の競争——三、外國航路開始の事情とター
ター問題——四、海運界に一新紀元を劃す——

二四、化學工業の創始……………五〇五

一、高峯博士と私——二、創業苦の悩みと高峯氏の渡米——三、難關を突破して遂に成功——
四、高峯博士と理化學研究所——

二五、誤解から兇漢に襲はる……………五三五

一、拔刀せる二名の兇漢——二、遭難の原因と市水道鐵管問題の真相——三、俄然忌はしき疑
獄事件起る——

二六、電燈及瓦斯事業の創設……………五四五

一、官營より民營へ——二、民間經營と其後の發達——三、一基の電燈が衆目を驚かす——

二七、王子製紙の今昔……………五六一

一、大體の骨組みを計畫す——二、經營の苦心と研究生の洋行——三、美事難局に堪へて社礎
確立す——四、最近の王子製紙の盛觀——

二八、交通運輸事業と損害保險……………五七九

一、蜂須賀侯に奨めらる——二、日本鐵道の創立と其後の發達——三、我國海上保險の第一聲
——四、火災保險の創始時代——

二九、貿易の發達と機業……………五八六

一、木棉物の輸入激増す——二、紡績事業發達の起點——

三〇、實業界の種蒔役……………五八八

一、洋風建築と材料の研究——二、事業の頓座と會社の窮乏——三、苦境を脱して目的を到達
す——四、セメント事業の沿革——

三一、拓地殖民と官業……………五九六

一、北海道開拓使と事業家——二、北海道炭礦鐵道會社の誕生——三、炭礦の沿革と事業の變
遷——四、麥酒釀造業發達の経路——

三二、明治中年の財界恐慌時代……………六〇三

一、財界の混亂と善後策——二、戦後經營に就いて警告——三、幣制改革尙早論を主張す——

三三、事多歲月促……………六〇七

一、野崎廣太氏の祝辭——

三四、還曆に男爵を授けらる.....六七三

銀行集會所に於ける豊川良平氏の祝辭——東京商業會議所の祝文——答辭——府下商工業者代表の祝辭——

三五、世界各國を視察して.....六八五

一、舶來萬能主義排除の決心——二、活氣溢るゝ新興米國——三、落ち着いた氣分の英國——

四、模範的工業國の獨逸——五、思出深いフランス——六、歸朝しての感想——

三六、私の大患.....七二二

ベルツ教授——阪谷男の講演——

三七、演劇の改良と音樂.....七四

三八、韓國に第一銀行支店を開く.....七三七

一、支那將軍に貸金して立案——二、實際上の中央銀行となる——

三九、京仁京釜鐵道.....七三七

一、京仁鐵道創設の經過——二、京釜鐵道會社の創業難——

四〇、政界人と財界.....七五一

一、實業界と政界——二、歐化主義の失敗と紙幣兌換の實施——三、日清戦争と金本位制の確立——四、海運の奨励と朝鮮鐵道問題——五、日露戦後の我が財政の膨脹——六、積極主義の大隈侯と保守的の寺内伯——七、不言實行主義の原敬氏——

四一、私と政黨の發生.....七六五

一、新歸朝の伊藤博文公——二、政治家の伊藤公と實業家の私——三、思出深き政黨組織當時の文書——

四二、大藏省役人時代の回顧.....七七七

一、大隈重信侯と井上馨侯——二、井上内閣流産に終る——三、對外問題に對する私の態度——

の文書——

四三、明治大正の大政治家.....七六九

一、「善處即大丈夫也」の原敬氏——二、逝ける大隈重信侯を偲ぶ——三、山縣有朋公の思ひ出——

四四、我國財政々策確立の緒口.....八〇三

一、松方正義公の偉業——二、不景氣の招來と松方公の苦心——三、日本銀行創立の勇斷——

四、斷乎として金本位制を採用す——五、老公に就いて思ひ出す事ども——

四五、中外商業新報の創刊……………八二九

一、創立者福地櫻痴居士——二、新事業に慧眼な益田孝男——三、經濟新聞の主眼點——

四六、私の良き補行役……………八三三

一、佐々木勇之助氏の人となり——二、先輩に抽んで課長となる——三、佐々木氏の隠れたる功績——四、誠意努力の圓滿な人物——

四七、八十餘種の關係事業と絶縁……………八四一

一、新舊人の改造——二、何故に多數の會社に關係したか——三、一切責任ある地位を去る——

四八、華府會議に國民使節……………八五三

一、訪米第四回の動機——二、渡歐實業視察團と予の渡米——三、二重大問題の圓滿解決——
四、各地視察と意見の交換——五、ハワイを視察して歸朝す——

四九、米財界の重要人物……………八七三

一、ナショナル・シチー・バンクの首腦者——二、ハリマン氏とブレイジー氏——三、親日家ク
ラーク氏——四、鐵道界の大立物ゼームス・ヒル氏——五、日本最負のハインツ氏——六、異
彩あるワナメーカー氏——七、ロツクフェラー氏其他の人々——

五〇、私の親愛する米國の友人……………八七七

一、ルーズヴェルト氏——二、記憶の好いタフト氏——三、平和論者ジョルダン博士——四、
エリオット博士の平和論——五、バンククロフト氏の追憶——

五一、國民外交の必要……………八九四

一、世界戦争と米大統領——二、經濟の發達を希ひ道德の合一を思ふ——三、戦争防止と國際
聯盟協會——

五二、大正十二年の大震災……………九一五

一、突如起つた大震災火災——二、國民を誠める爲めの天譴か——三、復興に直面した震災善後
策——四、震災の影響を受けた關係事業——五、物質文明の弊と精神的復興——

五三、米國移民問題と私の立場……………九三二

一、日露役の調停とルーズヴェルト——二、日米關係委員會の意義——三、排日法案の通過と
經濟的影響——四、眞の親善は國民外交に俟つ——

五四、先帝陛下の東宮時代を偲ぶ……………九四六

一。我帝室と西洋の皇室——二、經濟界の事に就き御下問——

五五、大都市の計畫……………五五

一、體育と徳育の修養——二、田園都市の創設と都市集中の弊害——三、田園都市及目蒲電鐵の業績——

五六、過ぎし昔を顧みて……………六九

一、優渥なる皇恩を思ふ——二、働く舞臺は商業——三、世の變遷と經濟と道徳の合一——
四、百歳不老の説と暗合した私の生命觀——

五七、聖恩を感佩長命を喜ぶ……………六三

世界的米壽祝賀會——祝賀會に於ける賀詞及祝詞——獨逸大使の乾杯辭——今上陛下より單獨御陪食を賜はる——皇太后陛下に賜調豫防に就て言上す——

附録 青淵翁年譜……………一〇三

澁澤榮一自叙傳

子爵 澁澤榮一述

一、生立のところ

一、黒船来る



東京高崎間の深谷驛を下車して北へ一里、今は埼玉縣大里郡八基村に屬するが、昔は武藏國榛澤郡血洗島と云つた片田舎の農家に、天保十一年庚子二月十三日生聲を上げた私は幼名を榮二郎と名付けられた。家は代々農を本業とし農閑期は藍玉の賣買をして村中でも二三番目位の稍々有福な農家であつた。父は家付の母の許に養子に來た人で、非常に嚴正な勤勉家で、平常多く書物を読んだ人ではないが四書や五經位は充分に読み、傍ら俳諧に趣味を有する風流氣もあり、自然に氣品も出來てゐた。随つて私も少年の頃から漢籍を父や親戚の人に教へられ、殊に論語をよく讀んだ關係上幾らか世の中に貢獻したいと云ふやうな考へが生じたのである。此の當時の國內の状態は、所謂幕末の物情騒然たる時代で、私も自然的に時勢の感化を受けたのであつた。

史を按ずるに、天保十二三年には、清國に鴉片戦争があり、弘化四年には、北米合衆國がメキシコと戦争を開いて大捷を博し、嘉永六年には佛國に政變があつて、ナポレオン三世が皇帝の位に即位した。翌安政元年には有名なるクリミア戦争があり、同四年には印度にセボイの亂が起り、更に同六年には、支那と英佛兩國との間に戦端を開き兩國同盟軍は北京を陥れて城下の誓ひをなさしめ、文久元年には、北米合衆國に於ける奴隸問題が遂に破裂して、彼の南北戦争となつた。約二十年計りの間に於ける、世界の大きな出来事は、斯くの如く眼まぐるしい程であつた。

日本に於ては、文政四年に幕府が異國船打拂ひの布令を發した程であるが、世界の形勢は到底我が國のみを埒外に置く事を許さぬ様になつたので、天保十三年に至つて外國船撃攘の令を弛めた。處が、其後に至り外國船が屢々我が國に來航する様になつたので、漸やく國防の不備を悟り、少しく迷夢を醒すに至つたが、嘉永六年六月——西曆一八五三年七月——に至り、ペルリ提督の率ゐる米國艦隊が突如浦賀に來り、和親通商を求むるに及んで、我が國は上下を舉げて晴天の霹靂の如く吃驚し、狼狽殆んど爲す處を知らず、國論沸騰して歸する處なき有様であつた。此年ロシアの使節も來朝したが、幕府は自から決する事が出來ず、責任を避けんがため、從來の獨斷專行の例を破つて朝廷に奏聞し、其の裁斷を仰いだれども、朝議も亦容易に決しなかつた。翌安政元年家定將軍

が薨去し、紀州藩より家茂が入つて將軍職を繼いだが、此年ペルリは前年の約に従つて再來し、強硬なる談判を試みた結果、幕府は遂に神奈川條約を結んで一時を糊塗した。安政五年、彦根藩主井伊掃部頭直弼が幕府の大老職に擧げられたが、井伊大老は勅許を待たずして英米露佛蘭の五箇國と通商條約を結び、長崎、函館、神奈川、兵庫、新潟の五港を開く事を承諾した。而して井伊大老は今言葉で云へばクーデターとも稱すべき強硬政策をとり、水戸藩主齊昭、尾張藩主慶怒、越前藩主慶永等の親藩の諸侯を蟄居せしめ、土佐藩主山之内内容堂、宇和島藩主伊達宗城を致仕せしめ、又奏聞して青蓮宮を幽閉し奉り、近衛、鷹司、三條等の公卿を罷免し、吉田松蔭を初め幕政を非議する志士四十餘人を捕へて、或は死刑流罪に處し、或は禁錮に處した。世に所謂安政の大獄と稱するものが即ち之れである。併しながら其の反動として、井伊大老は水戸藩の志士其他の怨嗟の的となり萬延元年三月、登城の途中を櫻田門外に要撃せられて、水戸浪士其他のために暗殺せられた。之れが私の出生以來約二十年間に於ける日本の主なる出来事である。

ペルリ來朝當時の事情については、吉田鐵太郎氏が米國遊學中調査をなし、之れを國家學會雜誌に掲載したものが最も詳かであるから、其の要点を左に摘録する。之れによれば我が國の危きこと

累卵の如き有様であつた事を推察するに餘りある。(編者)

——ペルリは米國に於て最も有名なる海軍士官であつて、當時米國海軍には將官がなく、大佐の上位の者はコンモードルの名を帯びて居つたが、ペルリは即ち其のコンモードルであつて、メキシコの戦争には海軍指揮官として勇名を轟かした武斷派の錚々たる人物であつた。通商條約締



大藏省出身の時代の澤榮一

結の使節に特に斯くの如き人物を選び、然かもペルリ傳に『從來米國に於て艦隊を構成せしもの中、最も大なる艦隊はメキシコ戦争の時日本に使節を送りし時なり』と明記してある程の盛大なる艦隊を率ゐしめた事は、實に穩當を缺く仕打ちであつて、何等かの野心を懷いて居つたものとの疑ひを禁じ得ない。グッツフイスのペルリ傳によれば

日本派遣艦隊の編成は、當時の米國海軍大佐オーリックが一八五一年五月九日、當時有名なる政治家にして國務卿たりしウェブスターに建議して決定したもので、其の際日本君主に宛て、認めたる國書は、實に不遜極まる辭句を用ひ、外交文書としては嘗て見ざる程の無禮なものであつたとほへられてゐる。而してオーリック大佐は、日本と條約を結ぶ全權を帯び、同年六月八日精銳

なる艦隊を率ゐてノルフオークを拔錨し、途中各地に寄港して十月頃香港に着したが、同地にあつて種々準備中、突然海軍卿グラハムより司令官を免ぜられ、同時に使節の任を解かれて歸國を命ぜられた。其の原因は詳かでないが、複雑なる事情があつたらしい。而して其の後任を命ぜられたのが即ちペルリである。ペルリは前にも述べた如く米國海軍有数の英物で、當時管船局長の如き地位にあつたが、海軍卿より米國東洋艦隊の司令官に任じ、併せて日本との條約締結の全權を命ずるとの指令に對し、十二月三日、ニューヨークより長文の書面を海軍卿に提出し、『予に對し、日本と條約を締結するの權力を帯び、在東洋米國艦隊の司令官たるべしとの御話があつたが、之れは實に失望の至りである。第一此度の内命以前に、海軍當局より予を米國軍人の花とも申すべき、地中海艦隊の司令官として派遣するとの内約があつた。第二に予は、前東洋艦隊司令官オーリック大佐より故參の士官であるに拘らず、後進者の後を繼いで東洋に赴くは少しく貶黜の感あるを免れない』と不平を並べ立てた。之れに對して海軍卿は極力慰撫し、ペルリも遂ひに納得し、翌一八五二年三月に管船局長を免ぜられて愈々東洋艦隊司令官に任ぜられた。當時アメリカ合衆國は奴隸解放問題について議論沸騰し、動もすれば南北破裂せんとする危機に臨んで居つたので、老猾なるウェブスターは、國內の人心を外國に向けんとし、それにはオーリ

ツクの率ひきある小艦隊にては目的を達するに足らざるを以て、特に艦隊を増加すると同時に、英名高きベルリを日本派遣艦隊の司令長官に任命したもらしい。尙ほ當時發刊の米國新聞紙を見るに、往々過激の論文を載せ、『印度は既に英國の征服する所となり、支那も亦同轍を踏まうとしてゐる。我が米國は既に共和政體が確立し、國勢益々盛んである。されば速かに太平洋中の諸島を征略し、就中、人口稠密、物産豊かなる日本國を野蠻的鎖國より文明世界に導き、米國の版圖に加へなければならぬ』といふが如き露骨なる説も行はれた。勿論之れは國民の一部に行はれた説であり、大統領を初めとして政府部内に於ても、何處までも戦争をしなければならぬといふ程の強い考へはなかつた様であるけれども、ベルリの如きは頗る此の説に共鳴して居つた事は争はれない。然るにウエプスターは大統領選挙に失敗し、且つ老齡病軀に堪へず、國務卿の現職には止つて居つたがポストンに静養をなし、加ふるに海軍卿グラハムが職を退いてケネジーが就任するに至つた等の關係から、日本遠征軍は一時頓挫を來したが、ベルリは大に之れを遺憾とし、熱心に新海軍卿ケネジーに迫つた結果、漸やく其の諒解を得、更にポストンに静養中の國務卿ウエプスターを訪問し、『日本遠征軍司令長官は如何なる處置をなし得べし』といふ意味の訓令を得て、同年の暮近くに本國を出發した。詰りベルリの熱心によつて頓挫した日本使節が復活したの

である。然かもそれは平和の使節に非ずして、其の裏面には異圖を含んで居つた事は十分に察する事が出来る。

現にベルリが日本へ來る途中、即ち一八五二年十二月十四日マデイラより發したる書簡によれば、其の熱心に國家のために盡さんとするの意氣を想見すべく、文中には、頻りに英國が近年手足を東洋に伸ばし、東洋に於て一人舞台の勢ひに至らん事を憂へ、新嘉坡、香港諸要地は既に英國の占領に歸し、此の方面に於ける海上權は英國の掌中にあるが、幸ひに日本其他太平洋諸島は未だ歐洲列國の着手する處とならざるを以て、是等諸島にアメリカ合衆國が先鞭を着くることは、國家將來のために非常に必要である事を説き、従つて今回の自分の使命は頗る重大であるといふ意味を力説して居る。

而して國書は最初は頗る不遜極まるものであつたが、ウエプスターは十月下旬に遂に死去したるを以て、更に國書を改め、十分尊敬を表する外交文書となし、ベルリが之れを携へて米國を出發したのは十一月二十四日であつて、マデイラより喜望峰を廻りて、翌一八五三年四月六日香港に着し、同地に於て十分の準備をなしたる上、それより琉球或は小笠原島等に貯炭所を設け、七月八日、威風堂々と星條旗を翻へして浦賀に來り、通商條約を求めたのである。一。〔國家學會雜誌〕

二、井伊掃部頭の人物と櫻田事變

安政の大獄並に井伊大老暗殺の話が出たから、序でに井伊掃部頭の人物と暗殺の動機について少

しくお話をしやう。



埼玉縣大里郡八木村
（昔は武藏國榛原郡八木村）
洗家生（島）

幕府の首班として幕政一切を獨斷專行し、權勢並ぶ者のなかつた當時の大老職井伊掃部頭直弼が櫻田門外に於て水戸浪士の一味のために刺殺されたのは、萬延元年三月三日、上巳の節句の當日であつた。此の事變は管に世人の耳目を聳動せしめた計りでなく、惹ては幕府の威信を全く失墜せしむる素因となつた。井伊大老に對しては毀譽相半ばするけれども、是非の論は暫らく措き、兎も角も一個の傑物であつた事だけ

は否まれないと思ふ。井伊掃部頭は平常餘り出進張らず、至つて口數の少ない人であつたらしく、従つて大老職に擧げられるまでは世間では餘り掃部頭を重要視しなかつたらしい。處が松平伊豆守の推薦により、安政五年四月二十三日、掃部頭が突然閣老筆頭の大老職に擧げられたのであるから、

世人は其の意外に驚き、幕府要路の人々の中にさへ、國事多端の時に際し、果して此の難關に當り得るか否かを危ぶむ者が少くなかつたさうだ。然るに愈々大老の職に就き幕府の實權を握るや、無能どころか果斷敢行、疾風迅雷的にクーデターを斷行し、幕府の親藩であり、然かも副將軍の家柄である水戸齊昭侯を初め、尾張大納言、越前慶永侯等を幽居せしめ、公卿を罷免し、國主大名を致仕せしめ、幾多の勤王志士を風潰しにして憤死驚倒せしめ、勅許を待たずして英米露佛蘭の五國と通商條約を結び、五港を開く等殆んど專制君主の觀があつた。世間では井伊掃部頭を目して、開國進取の人物の如く思惟し、我が開國の恩人の如く稱する人もあるが、果して掃部頭にそれだけの進んだ考へがあり、其の信念に基いて斷行したのかどうか、此の点は甚だ疑はしい。私の考によれば、掃部頭が幕府當面の責任者たる地位に起用せられた際は、恰かも外國と朝廷との板挟みの苦しい立場にあつたので、到底外國の要求を斥ける事が不可能である事を悟り、止むを得ず通商條約を結ぶに至つたものであると見るのが正鵠に近からう。而して國論の沸騰して遂ひには收拾すべからざるに至るべきを察し、一舉に反對派を一掃すべく非常手段を採つたものであるらしく察せられる。

井伊大老は、斯くの如く政治上に於て果斷專行を擅にして、絶倫の勇氣を示したるのみならず、一面に於ては和學を修めて歌道にも長じ、茶道や繪畫などの素養もあり、又佛典をも修め、頗る博

識の人であつた。それにも拘らず、外見は恰かも無能者の如くであつたと云ふから、彼の大石良雄が年少時代に晝行燈の譏りを受けて、世間の人から馬鹿にせられて居つたのと似た處があり、兎に角、餘程傑出せる人物であつたに相違ない。従つて大老職になつてからは殆んど別人の如き態度を以て其の眞手腕を發揮し、國家の大事に當つて爲す處を知らぬ幕府の全責任を双肩に荷ひ、眼中殆んど人なきが如く、意氣軒昂の態度を示し、親藩であらうが、國主大名であらうが、自分の意志に反する者は遠慮も會釋もなく壓迫を加へて憚からず、殊に京都の公卿などに何が出来るものかと云つた意氣込みで事を處したので、反對派の連中も慄へ上つて恐れをなしたが、餘り調子に乗り過ぎた結果、遂ひには朝廷をも輕んずるに至つたものらしい。時の勢ひとは言ふものゝ、其の遣り方が餘りに深刻であり、徹底的であつた爲め、志士の恨みを買ひ、在職足掛け三年にして、櫻田門外に不慮の横死を遂ぐるに至つたのである。而して井伊大老の水戸の浪士のために刺殺されたのは、烈公を幽居したのが近因である事は言ふ迄もないが、他にも重大なる原因がある。それは將軍職相續の事から幕議が二派に分れ、掃部頭は南紀黨の首領となり、紀伊家から養君を入るゝに力を盡し、水戸派の擁立せる一橋慶喜公を排斥し、遂ひに其の目的を貫徹したのが一つである。之れは甚だしく水戸藩士の含む處となつた。殊に甚だしく水戸藩士の反感を買つたのは、安政五年に朝廷から水

戸家へ下された密勅を取り返さうとした處置で、掃部頭は大老職の權力を楯にして、手を變へ品を變へ水戸藩を壓迫した。之れに對し水戸藩士は密勅を返上させまいとして、有らゆる反抗を試み、過激派の中には、掃部頭を暗殺して根を絶つに如かずと主張する者さへあつた。是等の諸原因が遂ひに彼の櫻田事變を醸すに至つたのである。尙ほ井伊大老の暗殺については、水戸の藩論である如くに思ふ者もあり、烈公の意志である如く信する者もあるやうであるが、烈公の如きは豫め此の計畫を聞かれた際に、極力之れを制止された程であるから、烈公の意を承けたものでない事は明白であり、且つ水戸一藩の藩論であつた譯でもない。要するに井伊大老の暗殺は、客氣に逸る水戸藩の過激分子が決行したものであつて、有村治左衛門の如き薩摩藩の浪士が、水戸浪士の仲間に加はつて居つたのは、井伊掃部頭を遠勅の不義者と考へ、平素水戸の志士と深い交りがあつた處から、進んで其の仲間に加はつたのである。それから井伊大老暗殺の首謀者は餘り世間に傳へられて居らぬ様であるが、實は水戸浪士の高橋多一郎、金子孫二郎の兩人で、此の兩人は井伊掃部頭を倒して置いて、其の機會を利用して暗中飛躍を試み、薩長と水戸とを結び付け、其の聯合の努力によつて倒幕の目的を達しようとの計畫を懷いて居つたので、井伊大老を櫻田門外に襲撃した際には、此の兩人は特に其の仲間に加はらず、高橋多一郎は大阪に向ひ、金子孫二郎は京都に向つて出發したので

あるが、事變後、此の事が露現したので、高橋は大阪に於て自及し、金子は京都に於て幕吏の爲めに捕縛され刑に處せられた。

後年に至り、徳川慶喜公から親しく私の承はつた處によれば、井伊掃部頭といふ人は非常に秘密主義の人であり、且つ頗る人ざわりの悪い處のあつた人物で、慶喜公なども甚だ交り憎い様に感ぜ

られたといふ事である。是等の点も人の上に立つ人物としては、禍根を招ぐ遠因になつたかも知れぬ。

又、水戸烈公は、餘程傑出した人物の如く稱されてゐるが、烈公は露骨に申せば、世間で評判せらるゝ程の偉大な人傑ではなく、餘程偏狭な處があつて、實際の政治的手腕には乏しかつた人の様に思はれる。何故ならば、

水戸藩も藤田東湖などといふ俊傑を出した頃には、一時

之れによつて天下に名を成したものであるが、東湖先生の死なれた後には藩内に黨争が絶えず、互ひに反對派を排斥し合つて、遂ひには烈公派と中納言派との二黨の間に激烈なる確執を生ずるに至り、烈公派は尊王攘夷を以て旗幟となし、自から正黨と稱し、中納言派は佐幕開港を旗幟とし、茲



佛國留學當時の二) 八十歳 澁澤榮一

黨と稱せられたものであるが、是等の事實に徴するも、烈公は世人の評する程の偉大な人物でなかつたやうに思はれるのである。

澁澤榮一子が、日本の實業團の團長となつて渡米した時、米國の國務卿は、歡迎會の席上に於て井伊掃部頭は日本の開國に於ける先覺者であるといふ意味を述べた。井伊反對の澁澤子は、維新志士の眞面目を四十年振りで、米國の眞中で發揮した。國務卿の歡迎演説に對する澁澤子の答辭には『井伊掃部頭は、開國當時の當局者ではあるが、決して開國の先覺者ではない。それはあなた方が、日本の歴史をよく御存じない爲で、無理もないことである』といふところから、掃部頭の兩派の先覺者に非ざることを辯明して、答辭が反駁演説になつたのは正に奇觀であつた。(雄略)

三、兩親の性格と勉學當時の模様

私の生家(今の埼玉縣深谷驛より北約一里の血洗島村)は元來農と藍の商賣を家業として居つたので、私も少年時代には勉強の傍ら家業の手傳ひをして居つたが、所謂半農半工に商ひまでも兼ねて居つた有様で、多少餘裕のある處から、今でいふ質屋の様な事もして村人に融通をして居つた。

即ち藍の栽培は農業であるが、之れを藍玉に製造するのは工業であり、其の製品を賣買するのは商業に屬する譯である。血洗島には澁澤姓を名乗るものが十數軒あり、私の家は其の宗家であつたが、當主は代々市郎右衛門と稱した。實父は美雅(幼名元助)と云ひ、晩香と號したが、元來同族の澁澤宗助(又政徳と稱す)の三男であつて、宗家の後を相續した人である。父の生家も勿論百姓であつたが、最初は武家になつて身を立てようといふ志があつたらしく、武藝を學び且つ學問を修めて相當文學趣味も持つて居つた人であつて、宗家に嗣子がないので婿養子になる事に決定してからは、最初の望みをサラリと捨て、家業に専念され、多少衰微しかけて居つた家を興して産をなすと同時に名主見習に擢んでられ、領主安部攝津守(岡部侯)から苗字帶刀を許さるゝに至つた程で、私が實父を賞めるのも可笑しい様であるが、確かに非凡の人物であつたと思ふ。併しさういふ家業を營んで居りながら、武士的氣質の人で、子供の私に對しては、慈父であると同時に嚴父であつた。平素頗る方正嚴直で、一步も他人に仮すことが嫌ひであり、些細な事でも四角四面に萬事を處置する風があつた計りでなく、非常な勤勉家で、働く方にかけては極めて慾が深かつたが、それでゐても少しも物惜みなどはせぬ性質で、物慾には至つて淡泊であり、正しい道のためには、折角丹精して作り上げた身代を擲つても悔ゆる處がないといふ風の氣概に富んだ人であつた。又他人に對しても頗る嚴

格ではあつたが、其の半面には頗る人情味に富んで居り、叱言を言ひながら能く他人の世話をしたものである。母は榮といつたが、家附の娘で、特別に偉い人であつたとは思はぬけれども、非常に慈愛に富んだ人で、蔭になり日向になつて子供の面倒を見られた事については、今になつても涙の零れるほど有難く感ぜられる。嚴格な良人を持つて居つただけ、其の氣苦勞も定めし容易ならぬものであつたらう。

實父は前に述べたやうに、相當に學問もあり、時勢に對しても相當の見識を備へ、又青年時代に武藝に志したに似ず、俳諧などをやる風流氣もあつたので、其の當時は一般に百姓や町人には、學問などは必要がないとせられて居つたにも拘らず、父晩香は、今日の世に立つにはどうしても相當の學問がなければならぬといふので、六歳の頃から父は私に三字經の素讀を教へられ、大學から中庸を讀み、論語まで習つたが、八歳頃から從兄に當る手計村の尾高惇忠(新五郎)氏に師事して修學した。維新前の教育は、何れも主として漢籍によつたもので、江戸表などでは初めに蒙求とか文章物を教へたりしたやうにも聞き及ぶが、私の郷里などでは、初めに千字文三字經の如きものを讀ませ、それが濟んだ處で四書五經に移り、文章物は其後になつてから漸やく教へたもので、文章軌範とか、唐宋八大家文の如きものを讀み、歴史物の國史略、十八史略、又は史記列傳の如きものを此

間に於て學び、文選でも讀めるまでになれば、それで一通りの教育を受けた事にせられたものである。私の師匠である尾高惇忠といふ人は、幼少の頃から學問が好きで、其の上物覺えのよい性質であつたので、其頃では、田舎では立派な先生といはれる程の人物であつた。此の尾高の句讀の方法は他の師匠と多少趣きを異にして居り、初學の中は、一字一句を暗記させるよりは寧ろ澤山の書物を通讀させて自然と力をつけ、此處は斯ういふ意味、此處は斯ういふ義理であるといふ風に、自身で考へが生ずるに任せるといふ遣り方であつたから、尾高に師事してから四五年の間は、殆んど讀むことだけを専門にする有様であつたが、十一二才の頃になつて臆氣ながら其の意味が分るやうになつたので、初めて幾らか書物を讀むことが面白くなつて來た。尤も年少の事であるから堅い書物は能く理解が出来なかつたので、通俗三國志とか、里見八犬傳とか、俊寛島物語といふやうな誰が讀んでも面白いやうなものを好んで讀んだのであるが、或る日、師匠に此の事を話して其の意見を聞いて見ると、『讀書に働きをつけるには、讀み易いものから入るのが一番よい。どうせ四書五經のやうな難かしいものを讀んでも、之れを本當に自分のものとして活用するには、相當の年輩になつて世間の物事を理解する様にならなければ駄目であるから、今の中は面白いと思ふものから讀むがよい。唯、漫然と讀んだだけでは何にもならぬから、心をこめて讀む様にするがよい。さうすれ

ば知らず識らずの間に讀書力がついて、外史のやうなものも讀めるやうになり、十八史略や、史記や、其他の漢籍も段々面白くなるものだ』と教へられたので、之れからは殊更好んで稗史軍書のやうなものを讀むやうになつた。其の好きであつた證據には、私が丁度十二歳の正月のこと、年始の廻禮に赴いた際、好きな書物を懷中に忍ばせて家を出て、途中之れを讀みながら歩いてゐたが、本の方に氣を取られて足元に注意しなかつた爲め、不覺千萬にも溝の中に落ちて春着の衣裳を台なしにして仕舞ひ、母親のため非常に叱られた事もあつた。

それから十四五歳までは、讀書、擊劍、習字などの稽古で日を送つたが、田舎の事であるから、讀みたいと思ふ本も、心の儘に手に入れる事が出来ないで、親戚知己の藏書を片ツ端から借り入れて讀んだものである。私の少年時代の勉學といふものは、先づ大体斯ういふ様なものであつた。

先生幼名を榮二郎と云ふ、長じて篤太夫と云ふ、又篤太郎と云ふ、後榮一と改む、幼より伶俐を以て稱せらる。十三四の頃をひに既に成人に異ならず、村中祭禮等のごとある毎に衆に先んじて事を處し、能く辨ぜざるなし、先生の教育は今日より之を見るときは別段教育制度のあるにあらず、殊に當時百姓町人は學問を一種の贅澤事と見做したる世の有様なれば、固より不完全を免れ

す、乍併、先生の天品と父晩香の篤志とにより、不完全中稍々完全なる教育を受けた。

先生六歳の時、父晩香より始めて讀書を授かる。其時習へる書は三字經、司馬溫公、家訓等なり、八歳の時より從兄尾高新五郎（又惇忠と云ふ）に就て、孝經、四書、小學、古文眞寶、國史略、日本外史、十八史略、元明史略、左傳、詩經、書經等の書を學ぶ。又武藏の人菊城と號するもの來るに會し、論語の講義を聽く、亦尾張の人中野謙齋遊歷此の地方を過ぐ、依て止めて文選、史記等の書を學ぶ。其後老儒太田玄齡に就て質疑する所あり、又椋木花邨等の儒生に交り攻究する所あり、亦信濃の人木内芳軒と云ふ詩人と唱酬年あり、又、中井弘、姓名を變じ、鮫島雲城と稱し來寓するに會し、文學の交をなす、又藤森天山來遊し島村田島氏に寓す、就て孟子の講義を聽く、二十二歳の時、尾高新五郎の弟長七郎と共に江戸に出て、海保漁村の門に入る、後徳川民部大輔に從うて佛國にあるや、佛語を學び洋學を研究す。

先生書法を父晩香に授かる、十二三歳の頃、伯父誠室の書法を學ぶ。誠室は中村佛庵の門人にして抑公權の書法を以て名ある者、先生又古法帖を臨習して自得する所あり。

先生武藝を始む。先生の父晩香は神道無念流の劍法を學ぶ。先生故を以て、劍法を同流大川平兵衛の門人澁澤新三郎に習ふ、家業の暇あれば演習怠らず、風雪寒暑を厭はず、遂に其印可を受く

るに至る。其の江戸に出て海保漁村の塾に在るや、又、千葉光三郎に就て劍法を學べり。先生天性讀書を好む、稗官野乘小説雜書諸曲院本の類に至るまで讀まざるなし、親戚知舊等の家に書を藏するあれば就て借覽す、就中、伯父誠室、從兄尾高新五郎、其他木内芳軒、福田玄定の二家より最も多く借覽したりと云ふ。（青淵先生六十年史）

四、十四歳で藍の買入に従事す

父の晩香は前にお話をした通りの性格の人であつたが、家業に對して非常に趣味を持つて居つた人で、去年より今年、今年より來年といふ風に、年毎に良い藍玉を多く製造して賣る事を樂しみて居られた。従つて父は藍を栽培する地方の農業者間に評判がよく、『市郎右衛門さんは、良い藍でないと言はぬから、今年は一ツ市郎右衛門さんを買ひ取つて貰つて、賞められる様にした』などと言ひ合つたものである。そして何れも栽培に苦心して年々良い藍が出来るやうになつた。父は農家より藍葉を買ひ取り、之れを藍玉に製造して紺屋に賣り渡したものであるが、紺屋の方でも父の賣る藍玉は頗る好評で、去年よりも今年の藍玉は上質であるなどと賞められると、父は之れを無上の悦びとし、自分の家で賣る藍玉の品質と産額とが、毎年進歩して行くのを見て、唯一の楽しみ

としてゐたものである。併し紺屋から受取る勘定は一年僅かに二回で、凡て掛賣りとなつて居り、藍玉の製造が終つて、之れを紺屋に賣り渡しても、直ちに現金が手に入るのではなく、紺屋はその藍玉を使つて得意先の依頼に應じ、染物をして利潤をあげ、藍玉の代金は盆と暮との二期に纏めて支拂ふといふ風な習慣になつて居つたのであるから、資本は相當固定して居つたものであつた。處で私が十四五才の頃になると、父は讀書や撃劍や習字などの稽古ばかりさせて居つては、時勢にかぶれて武士風になり、家業を嫌ふやうになつては困るといふので、家業の麥や藍を作つたり、藍葉を買ひ入れたり、養蠶などにも身を入れるやうにせねばならぬと、常に私を戒められたものであつた。それで私も父の命に背かず、十七歳頃から二十二歳頃までは家業に勉強したのであるが、其の商賣始めとも言ふべきは、嘉永六年で、丁度、私が十四の歳であつた。

嘉永六年は、ペルリの率ゐる米國艦隊が浦賀に來航し、我が國の上下を驚かした年であるが、父晩香に伴はれて、初めて江戸を見物したのは此年の三月であつた。此の年は、關東地方一帯に早魃續きであつたため、一番藍は不作であつたが、二番藍は上作だつたので、父は成る可く澤山買ひ入れ度い意嚮であつたが、丁度信州上州方面の紺屋廻りに出掛ける時期なので、買出しに行く事が出来ない。それで祖父（父の養父で敬林居士といふ、父に家を譲つてからは岡右衛門と稱した）と私

とに向つて、

「祖父さんは、もう歳をとられたから、餘り家事のお世話は出來ぬお身體ですけれども、今年は一
番藍が不作であつたから、二番藍を出來るだけ多く買ひ度いと思ひます。併し私は紺屋廻りをし
なければなりませんから、甚だ恐れ入りますが、今年の藍葉を買ふことだけはどうぞ祖父さんが
お引受け下さつて、私の留守中に御心配なして下さい。又、榮二郎（私の幼名）も子供とは云ひな
がら、もう今年は十四にもなつたし、將來は此の家業を繼がなければならぬ身であるから、商賣
修業のために、祖父さんのお供をして、實際の驅引を見習ふやうにするがよい。」

と留守中の事どもを細々と言ひ残して旅立たれた。私は十四の生意氣盛りであつたから、祖父さんのお伴などは餘り氣が進まない。自分は弱年ではあるが藍の善悪を見分ける位の事は分つて居る積りであるから、一つ父の留守中に一人で買つて見やうといふ考へを起した。其の中に藍葉の買入季節になつたので、最初の日には祖父のお伴をして矢島といふ村に行き、一二軒で藍葉の買付けをしたが、どうも祖父のお伴は面白くない。何故かといふに、父は藍の鑑定家としては世間から感服されて居つた人であるから、其のお伴をして歩く事は別に恥ともならないが、隠居して多年家事に遠ざかり、露骨に言ふと、もう耄碌しかつてゐる祖父の伴をして歩くのは、何となく肩身が狭

いやうな心持がする。それで一策を案じ、翌日、祖父に向つて『私は一人で横瀬村の方へ行き度いと思ひますからやつて下さい』と言つて見た。すると祖父は怪訝な顔付をして『お前が一人で رفتても仕方があるまい』と申しますから、私は即座に『それは仰せの通りですが、兎に角、一と通り廻つて見て歸り度いと思ひますから、是非一人でやつて下さい』と願ふと、祖父も初めて納得して幾らかの金子を渡して呉れた。

私は其の金子を胴巻に入れて、確かり腹に巻きつけ、早速家を飛び出して、横瀬村から新野村の方に廻つて、藍を買ひに来たと吹聴して廻つた。マン、マと祖父に一杯食はせたのである。處が私自身では一人前の積りでも、其頃は未だ鳶口髭の子供であつたから、私の風態を見た計りで、此の子供が……と輕蔑して少しも信用しない計りか、誰も相手になつて呉れない。之れには意地ッ張りの私も弱つてしまつた。併し私は幾度も父のお伴をして藍の買入方を見て居つたから、所謂門前の小僧で鑑定かんていの眞似まね事位は出来る。それで相手にしないのをかまはずに、是は肥料が尠ないから駄目であるとか、是は肥料に〆粕を使はなかつたらうとか、或は乾燥が不十分であるとか、下葉があがつてゐるとか、それ〴〵藍葉を鑑定して批評を下した處、村の人々も妙な子供が來たと云つて珍らしがり、終ひには市郎右衛門さんの忤せがれさんだけあつて、流石に鑑定が上手だと云つて褒められ、新野

村ばかりで二十軒餘りの藍を悉く買入れる事が出來た。之れに味を占めた私は、翌日には横瀬村や宮戸村を廻り、翌々日には大塚島村や内ヶ島村などを廻つて、是れ又好結果を得たので、祖父が一緒に行かうと云ふのを、それには及びませんと斷つて、其年の二番藍は殆んど私一人の手で買ひ集めた。其後程なく父晚香が旅行先から歸つて來られたが、私の買ひ入れた藍を見て、大に其の手際を賞められた。之れが私の一本立ひつたちで商賣をした手始めであつた。

其後、十六七歳頃からは父の意に従つて専ら家業に精を出し、藍の商賣については大抵私が引受けて、年に四度づつ信州、上州、秩父の方面を廻つたが、自分で商賣をして見ると家業に對する面白味と慾望が出て、商略も覺るやうになり、又種々の獎勵法なども試みたが、或年などは、近村の人々から買入れた藍の良否によつて番附を拵らへ、是等の人々を招待して、一番良い藍を拵らへた人を上座に据ゑ、以下番附面によつて席順を定めて御馳走した事もあつた。此の様に商賣に携はるやうになつてからは、仲々多忙な日を送つたが、其の多忙な中でも、好きな書物を讀むことだけは止められなかつた。

先生幼より田畑に出で、農事に従事す。先生は田の草を取りしなり、種子を蒔きしなり、肥料を

運搬せしなり、之を聞くもの、誰れか先生立志の厚きに感奮せざらんや。(青淵先生六十年史)

五、加治祈禱の修験者を回します

孔子は「怪力亂神を語らず」と仰せられてゐるが、之れについて私の少年時代の思出がある。それは確か私の十六歳頃の出来事であると記憶するが、修験者を回まして溜飲を下げた一件である。私には一人の姉(編者曰、仲と云ひ吉岡氏に嫁す)があつたが、年頃になつて病氣に罹り、それが俗にいふブラ〜病で仲々快方に向はぬので、両親は勿論、私も大いに心配したが、或る年父は姉を連れて上州の方に轉地保養に行かれた。其の留守中の出来事であるが、親戚の人から、『姉の病氣は家に祟りがあるためであるから祈禱をするがよい』と熱心に奨められた。私は最初から斯様な馬鹿氣た加治祈禱などには反対であつたが、弱年者のいふ事であるから用ひられず、愈々修験者を招いで、家にある祟りを拂ふために御祈禱をする事になつた。それで私は何か疑はしい處があつたら修験者を回ましてやらうと待ち構へて居つたのである。

さて當日になると、兩三人の修験者がやつて来て、室内に注連を張つたり御幣を立てたりして飾りつけをなし、其の頃雇ひ入れた計りの飯焚女を中坐にして、修験者は何かしら呪文のやうなもの

を唱へた。すると大勢集つてゐた講中の信者達が聲を揃へてお經のやうなものを唱へ出したが、其の中目隠しをして御幣を持つて居つた例の飯焚女が、初めは眠つて居るやうであつたのが、何時かはなしに持つて居る御幣を振り立てた。之れを見た修験者は、女の目隠しを取つて其前に平身低頭し、何神様が御降臨になつたのであるとか、當家の病人について何かの祟りでもあるのではないとか云つて、何卒御告げを蒙り度いと恭しく願つたものである。すると飯焚女が眞面目腐つて、『此の家には金神と井戸の神が祟つてゐる。又、此の家には無縁佛があつて、それが祟りをするのである』

と、所謂神託を宣べた。それを聞いた講中の人々は、如何にも尤も千萬な事のやうに感心してゐたが、中にも熱心に祈禱を奨めた親戚の一人が、如何にも我が意を得たかのやうに首肯しながら膝を進ませて、

『それ御覽、神様の御告げは確かなものではないか。お前は加治祈禱などは當にならぬといつて蔑したけれども、此の通りあらたかではないか。何時の頃か分らぬが、老人の話によれば此の家から伊勢參宮に旅立つて其のまゝ歸らぬ人があると聞いてゐる。定めし途中で病死したのであらうと云はれてゐるが、今神様からお告げのあつた無縁佛の祟りといふのは、此の人に相違ない。

「どうも神様の御託宣は確かなものではないか」

と、頻りに有難がつたり、私に對して嫌味を並べたりしたが、此の祟りを清めるには、どうしたら宜からうといふので、改めて神託を伺つた。すると如何にも尤もらしく、「境内に祠を建立してお祀りをすればよい」といつたので、私は此處ぞと思つて、一つ突ッ込んで見た。

「無縁佛の祟りがあるといふ話であるが、一体、其の無縁佛の出たのは凡そ何年位前の事であろうか。祠を建立して祀るにしても、石碑を建て、弔ふにしても、其の年が知れなければ困ると思ひますから……」

私が斯う云ふと、修驗者は神託を聞いて、凡そ五六十年前であるといふ。そこで私は更に押し返して、五六十年前ならば何といふ年號の頃であるかと尋ねると、天保三年頃であるといふ。私は天保十一年生れで、其の頃十五六であつたから、天保三年頃とすれば二十三年前の事である、二十三年前の事だとすれば、私の両親にしても、無縁佛のことを能く知つて居らなければならぬ筈である。そこで私は母に聞いて見たが一向知つて居らないから、修驗者に向つて、

「只今聞かれる通りであるが、私には甚だ腑に落ち兼ねます。無縁佛の有無が明かに分る位の様が、年號位分らぬ筈はないと思ひます。斯ういふ簡単な事さへ分らぬやうでは、信仰など出来

るものぢやありません。果して靈妙なる神様が降臨されたのであるならば、年號位は直ぐ分らなければならぬのに、それさへ間違ふやうでは殆んど取るに足らぬものであらうと考へます。それとも外に納得の出来るやうな立派な理由がありますか？」

と詰問に及んだ。親戚の人が私の意外な詰問振りに吃驚して、横から私の尚ほ言ひ続け様とするのを遮り「左様な事をいふと罰が當りますよ、あゝ勿体ない〜」といつて止めましたけれども、そんな神罰などいふ子供欺しに沈黙して引ッ込んでゐる私ではなかつたし、殊に私の言ふ事は誰にも分る明白な事實であるから、講中の人々も適當の辯解を試みる事が出来ず、満座白け渡つて修驗者の顔を見つめ、何と答へるかど、唾を呑んで一言を發する者もない。修驗者は餘程返答に窮したと見え、頗る間の悪い顔付をして、「之れは全く可笑しい。或は野狐でも來たのであらう」と非常に苦しい言譯をした。そこで私は寧ろ馬鹿らしくなつて、眞面目に議論する氣にもなれなかつたので、「野狐なんかの云ふことなら、猶更、祠を建立するの、お祀りをするのといふ必要はない譯ですわ」と止めを刺した。それで折角の御祈禱も散々な不首尾に終つて、何事もせずに取り止める事となり、修驗者は呆々の体で逃ぐるが如く立ち去り、講中の人達も、手持無沙汰で引あげたが、其時の恨めしさうな、憎さげな、憤懣に堪へぬやうな、何とも名狀し難い顔付をして私の顔を睨んだ

修驗者の嗜好は、滑稽を通り越して寧ろ氣の毒な位であつた。

怪異不可思議の事を信ずると否とは、必ずしも其人の學問、智識の程度によるものではないらしい。存外な學者で幽霊を信じたりする者がある。さうかと思へば又一方には、無學者で一切妖怪じみた事を排斥し、之れを信ぜぬ者がある。私などは一切神いぢりといふものを致さぬのだが、若い時分には、其れでも慰み半分に淘宮術を覚えてやつて見た事がある。淘宮術には昨今大分信仰者があつて、之により日常の去就進退を決するほどの人も無いでは無いが、素は支那の天元術から來たもので、天保五年に幕府の御留守番同心組頭を勤めた横山丸三といふ人の案出した一種の術で十二支・十干・八品などにより自分の性狀を知り、その缺點病所を匡正淘治せんとするのが趣意だ。易の乾兌離震巽坎艮坤によつて八卦を立つると同じく、陰陽學の一種である。觀て宜しからう。昨今では、何んなものか知らぬが、私の若くつて能く遊んだ頃には、吉原の藝者などに之を信する者が却々多くあつて、それらと一緒になつてゐる間に、何時と無く私も其れを覺えたのだが、全くの慰み半分で、別に之によつて進退去就を決したりなどしたわけでは無い。然し或る人々に取つては、之も亦座禪の如く、修身齊家の一法になるだらう。九星とても亦同様だ。白

河樂翁公の如きは、學問もあり智慧も優れ、精神の立派な人物であらせられたに拘らず、幕府の老中に任ぜらるゝや、自分の一命は素より、妻子眷族の生命までも賭けて、窃に深川の聖天様へ起誓せられてゐる。樂翁公に似合はしからぬ事だと思ふが、怪異を信ずると否とは、其人の學問などよりも寧ろ却つて其人の教育やら境遇に因ること故、樂翁公は御出生が元來殿様なる爲め、幼少の頃より奥女中などに、斯くの如き迷信じみた思想を吹き込まれて來た結果、吾々から觀れば馬鹿氣て見ゆる如き起誓などを、正心誠意の進つた餘り、敢てせらるゝに至つたものだらうと思ふ。私の交はつた維新の元老などには、この迷信に屬する怪異を信するやうな人は無かつたもので、井上侯でも、伊藤公でも、全く迷信がかつた事の無かつた人である。大隈侯なども勿論さうである。

(遊潭子爵著、實驗論語處世談)

二、修養時代

一、舊幕時代の悪政

前にもお話しした通り、私は十四歳の頃に初めて商賣の手傳をなし、十六七歳の頃からは専ら家業に勉強したから、父晩香も大分手助けになると云つて喜び、家道も追々繁昌になつて血洗島村の中でも相當の財産家と云はれるほどになつた。此の血洗島の領主は安部攝津守といふ小大名で、自分の村から一里ばかり離れた岡部といふ處に陣屋があつたが、此の領主から御用達を命ぜられて居つた。小大名の事であるから、大した金を借りるわけではないが、先祖の法要だとか、お姫様がお嫁入りするとか、若殿様が元服するとかいふ際に、領分内から御用金を徴収したものであつた。それで私が十六七歳の頃迄に、私の家から度々調達した金額が丁度二千兩餘になつてゐた。

確か私が十七歳の時だつたと記憶するが、領主の安部攝津守から私の村へ千五百兩ばかりの御用金を吩付つた。私の父も五百兩ばかりを調達して差出さねばならぬ事になつたが、丁度實父が差支があつたので、私が其の代理として同じく御用金を吩付けられた連中二人と一緒に岡部の陣屋にま

かり出た。其時の代官は若森とかいふ人であつたが、其の人に面會して、父の名代として御用伺ひの爲めにまかり出た事を申述べると、他の二人は何れも一家の當主であるから、早速御用金の事を承知したけれども、自分は父の代理でもあるし、且つ父からは單に御用の趣きを承つて來いと命ぜられたのであるから、他の二人のやうに即答する事が出来ない。それで『御用の趣きはよく分りましたが、一應村に歸つて父に話した上で改めてお請けにまかり出でます』とお答へしたのである。すると此の代官は半ば權柄づく半ば嘲弄輕侮するやうな態度で、『貴様は何歳になるか』と言つたものである。其の言葉つきが如何にも横柄で馬鹿にしきつた調子であるから、私も内心少し怫然としたけれども、泣く子と地頭には勝たれぬ諺通り、云はゞ階級の違ふ百姓の小作なわけであるから、ちつとも頭が上らない。止むを得ず「へえ、私は十七歳でいます」と答へると、代官は『貴様も十七歳にもなつて居るなら、もう遊蕩などもするであらう。して見れば三百兩や五百兩の金は貴様一存でも承知が出来る筈ではないか。貴様の家位の財産で五百兩位の金は何でもない筈である。親父に相談するなどと、そんな分らぬ事を云つても拙者は承知が出来ぬ。萬一、貴様の親父が後で不承知だなどと云ふならば、拙者から直接説諭をしてやるから、此の場は兎も角綺麗にお請けをしろ』と無理押し付けに承知をさせようとした。併し私は單獨でお請けする事が出来ないから、二三押し

問答の末、一應父に相談してから改めて返辞をする事にして岡部の陣屋を引下つたのであつた。

其の途中で村に歸る道すがら、つくづく考へたのであるが、如何に階級が違ふとは云ひながら、陣屋の役人は私に對して徹頭徹尾權柄づくめの取扱ひをなし、私の人格といふものを少しも認めてくれないばかりか、叱りつけたり嘲弄したりまでするとは怪しからぬ態度であると思つた。如何に領主の仰せとは申しながら私の方は御用金を頼まれる方である。年齢が若からうが、身分が低からうが頼む方と頼まれる方との關係であつて見れば、當然相當の取扱ひをするのが道理であるべき筈であるのに、殆んど奴隷扱ひにも等しい實際の待遇を受けて、私は心中憤懣に堪へなかつた。私は多少でも學問をして居り、又、世間の話を聞きかちつて居るだけに、それも畢竟幕府の政治向きが宜しくないのだと考へ、明確ではないが此時から幕府の政治に慊らぬ觀念を抱くやうになつた。加ふるに陣屋の役人に加へられた侮蔑に對する憤慨の念は心魂に徹して、どうしても忘れる事が出来ない。同じ人間でありながら、何の理由もなく、いや此方に却つて正しい理由があるにも拘らず、單に武士であるからといつて百姓を奴隷扱ひにするとは不都合千萬である。私もどうかして一廉の人間になつて、是非とも彼等を見下してやるやうにならねばならぬと深く決心したのである。今日になつて回顧して見ると、私に侮辱を加へた陣屋の役人は、私をして發奮せしむる動機を與へてく

れたと云つてもよいと思ふ。

さて、途々憤慨したり、父への復命を考へたりして自宅に戻つたが、よほど顔色も悪かつたと見え、私の顔を見ると父は「何か間違ひでもあつたのではないか」と氣遣はしげに訊かれた。私はありの儘を父に話し、更に私の意見を加へて「元來人間は賢愚の差別によつて尊卑の差別も生ずべき筈であつて、賢者が人に尊敬せられ、愚かな者が世に重んぜられないのは當然の事であるが、岡部の領主は當り前の年貢を取りながら、其上返済もせぬ金を御用金とか何とかいふ名儀で取立てるばかりでなく、恰も貸してあるものを取返してもするやうに、何百兩を納めよと命令するとは實に怪しからぬ話である。今日の代官とは初めて會つたのであるが、其の言語と言ひ、動作と言ひ、察するに知識の無い男であると思はれるが、斯様な人物が良民を輕蔑嘲弄するといふのは、お上の政治向きが悪いからである。それで私も途々考へて來たのであるが、此の先き今日のやうな百姓をして居ると蟲ケラ同然の、智慧もない代官などに輕蔑せられなければならぬから、私はどうしても百姓を廢めて立派な人間にならなければならぬと決心しました」と、委しく話したやうな次第であつた。父は百姓ではあるが相當に學問も修業し、劍術も學び、武士氣質の性格の持ち主であつたが、私の言ふ事を黙つて聽き終つて、「お前の理窟は尤もであるが、領主からの吩咐は理窟では勝たれぬ。

若し又勝つたにしろ、治者と被治者との關係で、反つて他の事で意地悪くされるやうな事になるから、マア／＼お請けするより仕方があるまい。』と半ば私をなだめるやうに説き諭され、其の翌日父の吩咐に従つて御用金を岡部の陣屋迄持つて行つたが、此事があつて以來、事に觸れ物に應ずる毎に幕府の政治を呪ひ、自分もどうかならねばならぬといふ念慮が胸中を離れる事がなかつた。

二、野心を押へて家業に精勵す

岡部の陣屋の一件があつてから、私の勉學心は愈々燃ゆるが如くであつた。田舎の百姓で一生を終るよりも、武士となつて世に立ちたいといふ希望は瞬時も忘るゝ事が出来なかつた。それでどうしても江戸に上つて修業したいと思ひ、父に願つたが父はどうしても許してくれなかつた。其のうち世の中の形勢が大いに變つて來て、徳川幕府を非難する聲が至る處に喧しくなつて來たのである。

私の成長する頃は、時代が時代だつたものだから、十五六歳の頃からウロ覚えながら大義名分を論じ、尊王攘夷論に賛成してゐたものであるが、代官事件のあつて以來、感情的に討幕の念が一層熾烈になつた。そして同志の連中が集まつては盛んに天下國家を論じ、討幕の急務を叫んで居つた

ものである。殊に私に取つては漢籍の師匠である尾高惇忠氏の弟で、尾高長七郎といふ吾々の先輩が劍術家になるつもりで早くから江戸に出て居り、其の交友も廣く、吾々と異つて天下の大勢を比較的辨へて居つた爲めに、長七郎氏が江戸から歸村する毎に、當時の模様を委しく説き聞かせられて、私の血潮は彌が上にも沸き立つのであつた。何しろ私も生意氣盛りの年頃ではあり、周囲の事情が斯ういふ有様であつたので、平生愛讀した日本外史や十八史略等の感化を受け、豊臣秀吉は百姓上りで天下を取つたのであるの、徳川家康は小大名上りであるの、また漢の高祖は低い身分から起つて支那四百餘州の帝王となつたのである、自分だつて此の時世に善處したならば、傑れた人物になれぬ事はあるまいといふやうな、云はゞ誇大妄想のやうな空想に走り、千古の英雄豪傑も皆な自分の友達のやうな考へを起してゐたものである。今から考へると自分ながら汗顔の至りであるが、其頃はそれが大真面目の考へだつたのである。併しながら父晩香は非常に厳格な人で、『人間は分を守る事を忘れてはならない。書物ばかり讀んだり議論ばかりして居つては決して立派な人物になれるものではない。お前も商賣の事が大分出来るやうになつたのであるから、一所懸命に家業に精を出して、父の手助けをしてくれるやうでなければ困る』と嚴重に督勵されるので、私も父の命にさからひ兼ね、家業に對しては兎も角出来るだけの努力をなし、藍の商賣に就いては大抵自分が引受

けて年に四度づつは信州、上州、秩父の三方面を巡回する事にしたので、武士になると云ふ考へを捨てたわけではないが、家業の方では仲々多忙な日を送つたものである。かうして商賣の事を自分で引受けて見れば自ら面白味も出るやうになり、商略といふやうな事を考へ、百姓を廢めたいといふ考へは消滅せぬけれども、一方に於いては仕事に對する欲望や、家業を都合よくやりたいといふ考へなども起り、それ相當に家業發展に就いて工夫したものである。例へば藍の製造に就いては阿州の名産地に負けないやうにして見たいなどと云ふ欲望を起し、或年などは近村の藍のお得意先の人を多數に集めて大いに御馳走したが、其の席順に就いては藍の良否に應じて相撲の番附のやうなものを作り、一番良い藍を造つた人を一番上席に据ゑるやうにした。其頃席順はなか／＼やかましかつたもので、上席に坐る事を非常に名譽に心得てゐたものであるから、此の商略は大いに競争心を喚起し、來年は一層良い藍を造つて一番上席に坐らうといふやうな氣風を起さしむるに到り、今年より來年といふ風に藍の成績が良くなり、従つて私の家業も繁昌するやうになつた。是れが私の十七八歳から二十一二歳迄の大體の有様である。

三、江戸出遊と志士との交際

家業に精を出してゐる間でも天下の形勢は刻々に變り、私の考へも亦益々尊王攘夷に傾くに從つて志を同じうする交友も漸次多くなり、二十一二歳の頃には江戸にも友達が出来、又、薩州や長州等の有志などが諸國の同志を探る爲めに田舎にもやつて來るので、是等の志士等と時勢を論ずる度毎に討幕の念と百姓を廢めたいといふ念とが益々濃厚となつた。それで恰度二十二歳の時であるが私も愈々江戸に出て志を伸べたいと決心したが、父は早速に許してくれさうにもないので色々考へた末、前に述べた從兄の尾高長七郎氏が、江戸の海保漁村の塾に居つて勉學の傍ら劍術の師匠に通つて居つたので、春先の農閑期の間だけ長七郎氏の所を頼つて勉強したいと願ひ出たのである。其時に父は餘程やかましく叱言を言つて、『お前は當家の後嗣である。従つて家業を繼がなければならぬ責任がある。それにも拘らず商賣を捨て、家業の爲めに直接役に立たぬ勉強をする爲めに江戸に出るといふやうな量見では、安心してお前に家業を譲る事が出来ぬ。さういふ考へは、すつかりと斷念して商賣に精を出すやうでなければ困るではないか』といふ意味で大いに訓戒せられた。私は父が反對されるであらう事は豫め覺悟して居つたので、『父上の仰せは至極御尤であります、當今の時勢は百姓だからとて學問無しでは困ると信じます。それに家業をおろそかにすると仰せられますが、春先の農業の閑な期間だけ江戸に出ようといふのですから、決して家業の障りになるや

うな事はありますまい。曲げて是非お許しを願ひたいものです」と重ねて懇願した。無理に止める
と出奔しゅつほんもしかねまじき風に見えたらしく、父は已むを得ず私の江戸出遊を許されたのであつた。私
は飛び立つほどの嬉しさを感ぜながら、匆々に旅装を整へて江戸に出で、下谷練堀小路の海保漁村
の塾生となつて漢籍かんせきを學んだが、私の本来の目的は偉い學者にならうといふのでもなければ、劍術
家になつて身を立てようといふのでもない。天下の志士に交り求めて、弘く天下の事情を察し、
機會を見て討幕の實行を期しようといふ腹があつたから、塾に在つても讀書するよりは寧ろ有志と
の交際に心を用ゐ、又、神田お玉ヶ池の千葉の道場どうじやうに出入りして劍客けんかくと懇意を結び、盛んに國事を
論じたものである。斯う申せば如何にも立派な志を立て、江戸に出たやうに聞えるかも知れぬが、
其の實を申すと向ふ見ずの山氣澤山であつたわけである。江戸には二ヶ月餘り滞在し、其年の五月
頃一旦郷里に歸つたが、道みちがに江戸は八百萬石のお膝元、征夷大將軍の城下だけあつて、郷里のや
うな田舎と違ひ、師匠と仰おほぎ友となすに足る人物が雲の如く居り、流石に世間は廣いものだと考へ
られた。

此の江戸出遊以來、私の思想は餘程變り、天晴一廉の愛國の志士を氣取るやうな氣持があつた。
又、江戸で出來た交友が多いだけに、絶えず有志が訪問して來て、お互ひに口角泡を飛ばして議論

をしたり、國事を憂へたりするものであるから、自然と家業の方は粗末になるので、元來が嚴格の
父であるから固より黙つて居らう筈がない。客のある時は別に叱言ちごんも言はないが、客が歸つてから
は度々嚴重に叱責しつせきせられたものである。併し自分も二十三歳にもなつて幾分か世間の事も分り、
諸國の有志などと相當に國事も議論するといふ位になつて居つたから、子供を叱るやうに頭からガ
ミガミは言はれなかつたが、分を守れといふやうな意味で、條理を正して諄々しんしんと説諭されたもので
ある。尤も憎くて叱られるのでないから、私が多少世間の事が分つて來たに就いては滿更悪い氣も
されなかつたらしく、家業を粗末にするといふ點に就いて心配されながらも、江戸や其の他から同
志が來遊した時に、自分がそれと負けず劣らずに時勢を談論するのを聞かれて、内心では「俺の伴
も人に對して恥しからぬ者になつたな」と嬉しうれさうな様子を見せられた事もあり、又、現に親戚の
者に向つて其事を語られた事もあつた程である。さうかといつて、其頃の私の舉動を見るに一向に
腰こしが落着かず、何時家を飛び出してしまふか分らぬやうな節が多かつたので、内心非常に心配して
居られたやうな模様であつた。殊に母は家附きの娘であるとはいひながら、至つて内氣な性質であ
られたので、陰ながら父にも増して心を痛められたやうな模様であつた。今日から回想すると此の
前後數年といふものは、兩親に對して全く心配を掛けたもので、さて／＼不孝な子であつたと後悔

の念に堪へぬと同時に、深く兩親の痛心苦慮をお察しする事が出来るやうな氣持がする。

—海保漁村の人物—

海保漁村は寛政十年十一月上總國北清村に生れた。父は修之、恭齋と號した。三歳の頃より書を讀み終日倦まなかつたが、長するに及んで讀書慾が益々嵩じ、兩親が健康を損ねては取り返しがつかぬと心配して止めると、兩親の目を忍んで勉強するといふ有様だったので、殊更に隣り村まで使ひに出すと、少しも逆らはずに用を辨するのが常だつたが、其の往復は必らず駟歩をし、歸宅すると又直ちに書を讀むといふ風であつた。十二歳の時に勉學のため始めて江戸に出たが、江戸は餘りに騒々しく深思推稿を専らにする事が出来ないで、滞在數ヶ月にして郷里に歸り、其の後は専ら獨學を以て研鑽した。二十二歳の時再び江戸に出たが、學資がないので當時幕府の御典醫だつた多紀桂山の執事となり、餘暇を見ては勉學に怠りなかつた。桂山は大に其の篤志に感ぜじ太田錦城の門に通學せしめたが、其の頃、晝間は錦城の許に往く外は主人の用務が頗る多忙なので、夜間を勉學の時間と定めて居つた。處が夜半後は家内の燈火は悉く消す習はしなので、貧乏な彼は油を買ふ錢がないため、密かに街路に出て常夜燈の下に立つて書を讀むのを常とした。

斯くの如く苦學した甲斐あつて才識人に優れ、師匠錦城をして感動せしむるに至り、遂に錦城門下の高足と稱さるゝ様になつた。そこで錦城は漁村に奨めて下谷練堀小路に塾舎を開かした。號して傳經廬といふ。漁村が塾舎を開くや、其の門に學ぶもの頗る多く、其の名聲一時に高まり、天保十一年周易古占法を著すや、大に識者の推稱する處となりて、是れより諸侯伯のために賓禮せられ、日野大納言も亦大に敬愛せられた。慶應二年九月十二日、六十九歳を以て歿したが、其の門弟數千に及んだといふ。(永松乙一著による)

四、再度の江戸出遊と尊王攘夷論

忘れもしない私が二十四歳の春の事である。憂國の志士氣取りの私は、どうしても凝乎として家業に従事してゐる事が出来ないで、父に向つて再度の遊學の許しを乞うた。其時の私の決心は、若し父が許さなかつたならば、兩親を捨て家を捨て、も此の望みを貫徹しなければならぬと云ふやうな非常に突き詰めた考へであつた。併しながら子として父に向ひ『私を勘當して下さい』とも言へないから、時勢を談じ、それに事寄せて遠曲りに私の意のあるところを述べたのである。父も最初の程は反對されたが、私の決心の動かし難いのを察しられたと見え、遂に我を折つて私の願ひを

許される事になつた。其時父の言はれた事が今でも深く心に銘じて居る。大體の意味を申せば斯うである。

「お前の十七八歳頃からの様子を見るに、私とお前との考へには、どうも餘程違つたところがある。私の考へからすれば、折角お前も商賣のコツを覚え、家業も追々盛んになつて来たのであるから、何時までも手許に止め置いて家業を繼がせ、私は早晩隱居したのであるが、無理に私の意見に従はせようとするれば、反つてお前を不孝の子たらしむるかもしれない。それは私の忍び得ぬところである。且つ人間にはそれ〴〵の特徴があるから、其の見地からすれば自分の希望する處に向つて進むのが、最も出世する正しい道であるとも言へる。私は子供を一人失くしたと思つて、是れから大いに若返つて改めて家業に出精する事にしよう。斯ういふ風に決心するからお前の體はお前の自由によまかせる。只くれ〴〵も言つて置くが、決して無分別の考へを起しては可かぬ。何事をするに當つても冷静に熟慮して、人間の道を踏み誤らぬといふ事を念頭から離してはならぬ。家業の事は心配せずにお前は希望に向つて眞面目に進んだがよからう。」

斯ういふやうなわけで、父から公然と江戸出遊を許されたので、此度は家業の事を心配する必要もなく、場合によつては再び郷里の土を踏まぬ決心で江戸に出たのであるが、以前に出た時と異つ

て江戸には既に友達も出来て居つたし、江戸の地理や事情にも多少通じて居り、且つ前の縁故もあるので再び海保漁村の塾生となり、千葉の道場にも出入して勉學の傍ら劍道を學んだ。郷里と異つて江戸は刺戟が多い。友人知己も全國から集まつた人々で、口を開けば天下國家を論じ、幕府の暴政を罵倒するといふ有様。さうかうして居るうちに豫て讀書によつて學び覺えた國體論が明瞭に私の頭腦に理解が出来るやうになつたので、一層私をして決心を固めさせるに至り、愈々多年の主張であるところの攘夷論に向つて献身的に活動しようといふ決心をなすに至つたのである。かう決心が定ると天下の形勢を觀望して凝乎として勉強などして居られるものでない。そこが血氣の勇でも稱すべきものであらうか。どうしても速かに幕府を倒して、王道を以て天下を治むるやうにしなればならぬといふ決心を抱き、其の具體的謀議を回らす爲めに、私は僅か四ヶ月ばかり江戸に滯まつたのみで、急遽郷里に馳せ歸つたのである。何故同志の多い江戸で計畫を進めなかつたかといふに、江戸には志を同じうする者は多いけれども、云はゞ各藩から集まつた人々が大多數である關係から、江戸で計畫をしては、事を起す前に發覺する虞れがないでもない。それで最も機密を貴ぶといふ意味から、郷里の同志を募る爲めに歸郷したのであつた。

此處で一寸當時の状態を申述べて置かなければならぬが、井伊直弼の勇斷によつて外國と通商條

約を結び、一旦開港の約を結んだのであるが、京都の朝廷に於いては是れを許されず、攘夷鎖港の勅諭が降されたのであるが、實力の無い幕府に於いては、是れを實行する事が出来ない。朝旨を遵奉せぬといふ事は、取りも直さず征夷大將軍の職を穢すものであつて、之れが爲めに我が神州は毛唐人の爲めに侮辱されんとして居る。若し此儘で、正式に通商條約を許すやうであつたならば、城下の誓をするやうなもので、我が國體を辱めるやうなものとは云はなければならぬ。されば假令通商條約を結ぶにしても、一旦は我が力を示し、其上で對等の條約を結ぶやうにしなければならぬ。外國には堅艦巨砲ありと雖も、我には大和魂があるし、洋夷を懲すに持つて來いの日本刀がある。切つて切つて切りまくつたならば毛唐人なんか一溜まりもなく敗亡するであらう。私共は當時の時勢をこんな風に考へ込んで居つたものである。實に向ふ見すの野蠻な考へであつて、今から考へて見ると笑ふべき話であるけれども、尊王攘夷の説に凝り固まつて居つたのであるから、大眞面目に實行可能な事と信じて居つたのである。それに幕府の力では到底攘夷などは出来さうもないし、幕府の積弊は腐敗の極に達し、士氣沮喪し、人心は極度に萎靡不振の有様であるから、此際天下の耳目を驚かすやうな大騒動を起して、幕府の腐敗を洗濯した上でなければ、到底國力を伸張する事が出来ない。吾々は農民であるけれども、苟も陛下の赤子である以上は、徒らに傍觀して居る事は出

來ない。固より軍備とても無いし、公然多數の同志を集めるわけにも行かぬから、十分の効果を奏する事は出来なからうが、云はゞ先陣の血祭になる覺悟で目覺しい騒動を惹き起し、國論の歸趨を定める階梯にならうと定めたのである。之れが謀議を回らす私の腹案であつた。さりながら二人や三人で外國人の中へ斬り込んだところが、結局は生麥事件位の程度のもので、償金の支拂ひで濟む位がせいゝだらうから、大騒動の端緒となる事は出来ない。何でも幕府の驚くやうな大騒動を起さなければならぬといふので、此の考へを抱いて郷里に歸つたのである。

三、血氣憂國の志士となる

一、倒幕の大計畫

討幕の義舉——私共は此度の企てを起すに就いて斯う言ひ合つたものであるが、公平に考へると義舉ではなく、寧ろ暴舉といふのが適當であらう。兎も角、此の討幕の旗擧げをするに就いては、適當の中心人物がなければならぬと考へたので、年輩と人望の上から最も適任である私の師匠の尾高藍香(惇忠)氏を頭領に仰ぐ事にし、私と私の従兄弟の濫澤喜作とが參謀といふ格で、此の年の冬には愈々旗擧げを執行しようと思議を凝らした。議が纏ると極秘裡に同志を募つた。血をすゝり合つて此の企てに加盟した血氣の同志は總勢六十有九人であつた。僅か六十九人の同志を以て、衰へたりと雖も天下に號令を下す徳川幕府を覆へさうといふのであるから、全く正氣の沙汰でないが、當時の吾々に取つては十分の成算があつたのである。いや成算があつたのではない、成算があると自惚れてゐたのである。

順序として其の計畫の大略を申上げると、第一の目的は横濱の居留地を襲つて焼打ちを仕掛け、

片ツ端から外國人を斬り殺して、幕府と外國人との事端を大ならしめようといふにあつたが、直ちに横濱に繰込む事は不可能であるから、先づ決死の六十九人が一舉に高崎の城を攻め取つて、此處で更に同志を糾合し、兵備を整へた上で、鎌倉街道を横濱に長驅し、一舉にして外國人の居留地を襲はうといふのであつた。吾々が旗擧げをしたといふ事になれば、江戸の同志も馳せ加はるであらうし、天下に志を同じうする同憂の義人も多數居るから、之れ亦吾々と行動を同じうするであらう。さうすれば吾々の勢ひは益々強大になる。一方横濱の居留地を襲撃すれば外國では黙視して居る筈がない。當然問責の師が日本に向けて來るに相違ない。さうなると幕府は到底支へ切れずして顛覆するに到るは必定である。幕府が倒れたら吾々の常に主張する王道を以て天下を治むる時代が當然出現するであらう。天晴天下の志士を以て自ら任じて居つた吾々は、勿論生死の問題などは眼中にない。眞劍に實行可能の事と信じ、同志の意氣は實に天に冲するの概があつた。ところで兵器の問題であるが、鐵砲を手に入れる事が一番必要であるけれども、それは機密の漏れる虞れがあるので秘密に買ひ整へるといふ事は不可能であると考へた結果、武器としては槍と刀を用ゐる事にした。それで私と尾高藍香とが主に此の方面の準備を擔當する事となり、尾高が五六十腰、私が四五十腰の刀を整へ、又、劍術の稽古に使ふ時の稽古着に似た着込みといふ物を用意し、提灯其他の

必要の道具も密かに買ひ集めたが、別に他から軍資金を募つたわけでもないし、私にしても金銭が自由になる身分でないから、父に對しては濟まぬ事ながら、私は藍の商賣をした勘定の中から、父に隠して支拂ひをなしたが、それが積り積つて其頃の金額で二百兩計りに上つてゐた。今だから白状するが此の大眞面目な計畫が、大事決行の際には銘々竹槍を持ち、高張提灯を押し立て、乗り出さうといふ申合はせであるから、若し勢揃ひをしてゐたならば、昔の野武士のやうな恰好であつたらう。

決行の時期に就いては種々の議論もあつたが、高崎の城に夜討ちをかけて是れを乗取るには、焼打ちの手段を選ぶのが最も有効である。焼打ちをするには火早い期節が一番よからうといふので、大體に於いて、其年(文久三年)の冬頃にしようといふ話に定つたが、其後十一月二十三日を期して旗擧げをする事に確定した。何故二十三日を選んだかといふに、當日は恰かも冬至に當り一陽來復といふ頗る日出度い日であるから、自ら「陽氣の發するところ金石皆な透る、精神一到何事か成らざらむ」といふ意味を含んで、此日を特に選んだのであつた。

二、父晩香に他所ながらの訣別

討幕の企てが確定したのは八月頃であつたが、追々時日が迫つて來るに従つて、外ながら父に私の決心の程をお知らせしたいと思つた。幸ひ九月十三日の月見の日には、私どもの田舎では觀月の宴を開く例があるので、其晩尾高藍香と澁澤喜作の兩氏を自分の宅に招いて、父と四人で小宴を催したが、實際私は世間話に事寄せて、天下は大いに亂れる形勢であるから、百姓だからといつて安心して居る譯にはいかぬ。吾々も斯ういふ時世に生まれたのであるから、亂世に處する覺悟をしなければならぬだらうといふ意味を申述べた。すると父晩香は私の話を遮つて、「お前の説は自分の本分を忘れて、謂はゞ非望を企てゝゐるといふ事になる。それは間違つた考へである。吾々は百姓に生まれたのであるから、其の本分を守らなければならぬ。天下の政事に對しては別に其人があるから、そんな事を心配するのは寧ろ分を越えた考へといはなければならぬ。併し幕府の施政を論じたり、閥老や諸公の善惡正邪を見分ける位の知識を持つのは、其の人間に取つて一つの見識であるから少しも障げはないと思ふ。此の區別を明かにせず、身分不相應の望みを起すやうな事は量見違ひであるから、若しお前がそんな考へを抱いて居るやうであつたなら、飽迄も是れを止めなければならぬ」と言はれた。此度の企ては私が主謀者であるし、父の諫止にあつても思ひ止どまる事の出來るやうな生やさしい決心ではないのだが、さりとて父と大いに議論する譯にも行かない。それで

「私自身にさういふ望みがあるといふ譯ではないが、日本が奈何なるか分らぬといふやうな今日の状態では、百姓だから知らぬ振りで過すといふ譯にも行きますまい。日頃お父さんが世の成り行きに就いて嘆いて居られるが、私もそれと同感なのであつて、最早此の切迫した時勢となつては、百姓町人だからといつて、傍観する事は臣民の道ではあるまいと思ひます。澁澤家の事も大切であるが、それよりも日本の國の事がもっと大切でなければならぬと考へます、況んや私の一身に間違ひがあつたにしても、澁澤家の存亡に關する譯でもありませんし、道理の上から言つても小の蟲を殺して大の蟲を助けるといふ事もありますから、お父さんのお説に反對する譯でもありませんが、私の説も間違ひではないと思ひます」と種々と私の意見を述べ、論語には斯ういふ事があるの、孟子には斯ういふ教訓があるのなどと、一問一答の形ちで話し合つてゐるうちに遂に夜が明けてしまつた。尾高藍香にしても澁澤喜作にしても、私の眞意は十分知つて居るが、事實を打明けて有りの儘に陳べる事も出来ないし、殊に事實を打明けると敷を突つて蛇を出すやうな結果になる事は餘りに明かな事なので、それとなく私の説に助言はしたが、強い意味で父の説に反對されるといふやうな事はしなかつた。

白々と東の空が白んで來た頃になつても話は盡きなかつたが、父は至つて思ひ切りのよい方で、

私の眞意が何處にあるかといふ事を話の中によく推察された見え、「もう分つた。俺は何も言はなから、お前はお前の信する處に向つて進んだが可からう。時勢の事も今迄の議論でよく分つたから、此上お前に對して言ふ事もない。俺は時勢の事を知つたにしても、そんな事は一切知らぬ積りで相變らず麥を作り藍の商賣をやつて、一生百姓で此世を終る決心である。假令幕府の政治向きが無理であらうとも、役人が無法な事をしやうとも、それには構はずに家業に精を出す積りである。お前にはそれが出来ないといふならば仕方がない。果して名を擧げる下地になるか、それとも其身を亡ぼす様になるか、俺には分らぬが、今日からお前の一身を一切自由にする事を許してやるから心の儘に振舞ふが可い。それに就いて私とお前とは、もう立場の違ふ人間であるから、私は今後一切お前の相談相手にはならぬ。愚痴を言ふではないが、お前が無い者だと諦めると寧ろ深いから、今日を限りに親子各々其の好む處に従つて進むことにしよう」と言はれて、十四日の朝になつて快諾といふではないけれど、漸く一身の自由を許されたやうな次第であつた。

三、旗揚げの準備着々として進む

十四日の夜明けになつて父が私の一身の自由を許されたので、私は改めて「今後國事に一身を献

げたいと思ひますから、甚だ不孝な次第であります。家業を相續するといふ事は出来ませぬから、私を勘當し養子を貰つて後をお嗣がせ下さるやうにせられたい」と申述べた。處が父の言はれるには「今、突然勘當するといつても却つて世間の疑惑を求めればかりだから、其の必要はなからう、又養子の事も今決定するまでの事はない。且つお前が國事に奔走した結果、萬一嫌疑で縛られるやうな事があつても、罪科さへ犯さなければ此家に迷惑を及ぼすやうな事もあるまいから、それらの事に就いては心配せんでも可い。猶、前にも申す通り、お前の言動に就いては一切關係はせぬが、吳々も正しい道理を間違へずに誠意を以て事に當り、志士仁人と云はれるやうに心掛けなければならぬ。之れが俺のお前に對する最後の「餞」である」と教訓された。それから後は「何も言はぬ」と言ひながら「一體今後はどうする考へであるか」といふ様な事を父は頻りに訊ねられたが、此度の機密だけは、親子妻子の間柄でも決して漏すべきでないから、只漫然と「江戸に出て其上で方針を定めたと思ひます」と其場を紛し、種々準備もあるから、善は急げとばかりに兩親に暇乞ひを告げ、其日の中に江戸に向けて出發した。江戸に出て約一ヶ月ばかり滞在し、其間に同志を集めたり、細細した準備をなしたり先づ一通りの事は出来たので、十月の末頃に郷里に歸り、追々旗擧げの期日も迫つて來たから、スワ勢揃ひといふ時に差支へないやうに同志の面々の役割を定め、誰と誰は刀

槍の類を受持つとか、誰々が着込み其他の方を分担するとか、合言葉はどうするとか種々の事を取り定め、更に當日の手違ひのないやうに地勢を十分調査して置かねばならぬから、是れは私が引受ける事にして、總てが順序よく計畫通り進んだ。

事を擧げるに就いては頭梁の尾高惇忠並びに私と澁澤喜作との外に、尾高長七郎が重要な役目を担当する事になつてゐた。尾高長七郎は東寧と號し私より二歳の年長者であつたが、早くから江戸に出で四方に知己があるばかりでなく、學問に秀で思慮に富み、殊に劍道にかけては達人の域に入つて居つたので、自然同志の間にも重きをなし、専ら江戸並びに京都の間を往來して、所謂天下の形勢を探り各藩の向背に注意し、愈々事を擧げた際には參謀長の役を勤むべき人物であつた。そこで私の歸郷と同時に恰かも京都に滞在中であつた尾高長七郎に同志を遣はして計畫の具體化を報告すると同時に、京都方面の様子をも詳細に聞きたいから至急戻つて來るやうにと言ひ送つたが、此使者と一緒に尾高は取る物も取り敢へず京都を發足し、手計村の生家に戻つたのが十月の末であつた。それで文久三年十月二十九日の晩、手計村の尾高惇忠方の二階に於いて、惇忠、長七郎、澁澤喜作、中村三平並びに私を加へて五人が會合し、京都の報告を聞くと同時に旗擧げの密議を凝らしたのであつた。

四、東寧の極諫と暴擧の中止

元來、尾高長七郎は非常に熱心な尊王攘夷主義者で、夙に吾々を鞭撻し、或る意味から云へば、吾々をして過激な思想（かういふ言葉は或は不適當かも知れないが）即ち直接行動に出づるまでに到らしめた先輩であるが、此の急進論者だった尾高長七郎は此夜の密議の席上に於いて、意外千萬にも掌を覆す如く自重論を主張し、今回の暴擧を中止せしめやうとした。是れは同志にとつては全く意外千萬だったのである。尾高長七郎は先づ諄々として京都の状況を述べて、中山侍従を加盟とした十津川浪士暴擧の失敗や、大和五條の暴擧の有様を説いて、頻りに討幕の義擧の無謀を諫め、「私自身も最初から此計畫に參畫したのであるが、天下の形勢を察知するに無謀の計畫で非常の間違ひである事を自覺したから、諸君に變節漢と罵らるゝのを覺悟で、極力中止を主張する次第である」と述べたけれども、死を決した吾々同志の心を動かすには足りなかつた。殊に私は大いに亢奮し、「貴兄は今更生命が惜しくなつたのだらう。先陣の血祭に貴兄を刺し殺しても此の計畫は必ず決行しなければならぬ」と血眼になつて詰め寄つたが、長七郎は從容として屈せず、猶も熱誠を面に現はして極諫したのである。其時の彼の熱辯は今でも耳に残つてゐる。

「同志諸君の君國を思ふ忠誠の志は、私もよく知つて居る。一身一家の利益の爲めとか、立身出世の爲めとかいふやうな不純な心が微塵も無い。さればこそ私も同志の一人として東奔西走し、敢て犬馬の勞を辭せざる覺悟だったのである。然るにつく／＼天下の形勢を見るに、今日わづか六七十人の農兵を以て事を擧げて一敗地に塗れる事は火を賭るよりも明かである。而もそれが幕府を倒潰する端緒となるならば貴い犠牲として瞑すべきであるが、結局は百姓一揆と同様に見なされて、兒戯に類した輕擧だと世人の笑ひものとなり、吾々に續いて起る志士も無く、謂はゞ犬死に終るは必然である。若し假りに高崎の城を抜く事が出来たと假定しても、横濱まで乗り込んで外人の居留地を襲撃しようとするには十分に訓練した兵でなければ不可能である。諸君の考へてゐる通り、幕府の兵は弱いには違ひないが、兎に角人數が多いから、横濱に至る前に失敗に歸するは云ふまでもあるまい。猶又、幸ひにして居留地焼打ちが成功したとしても、野心満々、虎視眈々たる外國人に對して、徒らに口實を與ふるのみであつて、之れが爲めに幕府が倒れるとするも、それと同時に皇土を外人の爲めに汚される結果となるかも知れぬ。外國との戦争の結果は兎も角として、國內の政治に對し外國をして干渉せしめるやうな端を開いては、國家の大耻辱であるから此の見地からしても斷然此度の計畫は思ひ止ごまらねたい。但し諸君にして拙者を裏

切者と思ふなら甘んじて諸君の刃に死するであらう。」

尾高長七郎の至情を吐露し、理を盡し情を傾けて縷々數千言を費した此の熱辯に、他の同志の人は餘程動かされたやうであつたが、私は二十四歳の血氣盛りではあり、尾高の感化を受けて尾高よりも過激な考へを抱いて居つたから、條理よりも寧ろ感情の方が昂ぶり、「一旦死を決して旗擧げをしよう」と盟ひ合つた以上は、成敗は天に委せて唯決行の一字あるのみである。若し他日の機會を見て實行しようなどといふ手緩い事を考へて居るうちに、幕府の嫌疑を受けて縲紲の辱めを受けやうな事があつては、耻の上の大耻である。今になつて彼此と議論する必要はない」といふ過激な論を主張し、徹宵議論をしたけれども、其の歸結するところを知らず、遂には長七郎は濫澤を刺し殺しても此度の計畫は止めると云ひ、私は長七郎を殺しても決行すると言ひ張り、果ては兩人互ひに昂奮して『殺すなら殺せ』とか『刺しちがへて死ぬ』とか、殆んど手の付けられぬ大激論となつたが、師匠の惇忠其他の人々が雙方の仲に入り、此席で直ちに是非を決定しなくとも更に日を期して協議を開き、慎重に議を練らうといふ折衷説が出で、私は猶も自分の説を主張したけれども、頻りに宥められたので、其場は何うとも決するところなく散會した。

血を見るやうな激論の末別れたのであるから、私の憤懣はなか／＼おさまらない。議論で行くよ

りも他の同志の居らぬ處で長七郎と果合ひをし、それで其の可否を定めようと思つたのであるが、時間が経ち感情が鎮るに従つて長七郎の云ふ事にも一理があるやうな節もある様に思はれた。それから種々熟考し、先程長七郎の述べた議論を繰返して考へて見るに、自分の主張は大いに景氣がよいやうであるけれども、理窟に於いては長七郎の方が正しいやうに思はれる。一死國の爲めに奉ずるといふ事は頗る潔い事ではあるけれども、長七郎の言ふ如く百姓一揆と同様に見なされては天下の志士も氣紛れ者の兒戯に類した舉動だど一笑に附し、討幕の大勢を馴致する端緒となりさうもない。死ぬ可き時に死んでこそ花であるが、犬死では何の意味をもなさない。若し又、横濱まで押出すにしても、外人の爲めに行動を汚されたならば、赤誠を以てした吾々の仕事が却つて御國の仇となるわけである。之れはもつと緻密に考慮しなければならぬと思つて、其夜は一睡もせず考へた末、之れはどうしても長七郎の説に従つて一時中止し、他日天下の形勢を窺つて初志を貫徹するに努める事が得策であると考へついたので、改めて會議を開いた席上に於いて、私は前晩の粗暴なる言動を謝し、且つ私の考へを述べた處、他の人々も同感であつたので、討幕の義擧は遂に中止する事となつた。今にして思へば實に無謀至極の暴擧であつたが、若し當時長七郎の諫止がなかつたならば恐らく私は其際に犬死をして無謀の譏りを後世に貽したらうと思ふ。

五、親の情けに涙にむせぶ

討幕の計畫は斯くて闇から闇に葬られたのであるが、扱計畫を中止するとすれば、密かに集まつた同志をも離散させねばならぬから、私共四五人の者が相談をした上で、それ／＼手當などをやつて、十一月の初め全部の解散も滞りなく済んだ。處がさうかうするうちに、何處から漏れたものか判らぬけれども、私共が不穩の企てでもしてゐるのではないかといふ事が、其頃の幕府の探偵であつた八州取締の耳に入り、それ／＼手が廻つてゐるといふ事を聞き知つたので、郷里に止まつて安閑としてゐるのは危険の淵に身を置くと同様であつて、手を束ねて捕縛を待つ様なものであるから、一時身を隠して後事を計らうではないかと相談し、脱走と云ふ譯ではないが、澁澤喜作と二人で郷里を立退く事にした。尾高惇忠は密議に與かつた一人であるけれども、既に父親が死んで一家の主人となつて居り、且つ漢學の師匠をして居つたのであるから、幕府の嫌疑もかゝらないだらうし、長七郎は同じく國を出るにしても、一時に大勢揃つて行く事は却つて危険であるといふので、之れは別に江戸に潜行する事にした。吾々も徒らに身命が欲しい爲めに郷里を立退くのではなく、少しでも國家の爲めに盡さうといふ決心なのであるから、江戸に潜伏したい希望であつたが、江戸は

將軍の膝元であるから、燈台下暗しとは云ひながら餘程危険である、どうしたものかと種々密議を重ねた上、當時京都には尊王の志士が雲集してゐる故、之等の志士と交り、旁々天下の形勢を觀望しようといふ事に相談一決し、私と喜作との兩人は相携へて密かに京都に赴く事となつた。討幕の旗擧げを中止する事に決する迄は非常に氣が立つて居つたから、八州役人の五人や八人は何時でも片つ端から切り捨てゝやらうといふ意氣込みであり、實際に於いても武器其他を集めるに就いて、随分危い橋も渡つたのであるが、計畫を中止して郷里を逃れるといふ事になると、今迄のやうに緊張してゐた氣持も失くなり、風の音にも若しやといふやうな危険を感じるやうになり、誰にも告げずに暮夜密かに立退かうかとも思つたが、それでは却つて世間の疑惑を増す事になるだらうといふので、親戚や近隣の人々には伊勢參宮旁々京都見物に行くこと吹聴して別れを告げ、なるべく目立たぬやうに輕装を整へて懐しい郷里を立退いた、之れは慥か文久三年十一月八日であつたと記憶する。思ひ出多き此日こそ、實に私の生涯に於ける一轉期を劃する重大なる意義を含む日であつた。丁度私が數へ年二十四歳の事である。さて私が郷里を立退くに就いて、今迄は一切を秘密にしてゐたのであるが、今度は討幕の計畫を中止したのであるから、左まで秘し隠す必要もないので、露骨には申さぬが大體の事わけを父にお話して別れを告げ、猶ほ藍の取立金のうち二百兩餘を遣ひ込んであ

る事も正直に告白した。父は『既に遣つてしまつた物は今更仕方がない。どうせお前が此家を繼ぐとすれば、全部お前の財産になるのであるから、それに就いては別に文句は言はぬ。猶ほ此處に百兩あるが、之れをお前に餞別にやる。正しい事の爲めに使ふなら、此上とても私の身に叶ふ事ならどうかしようから、今後は自重して身を誤るやうな事をしてくれないな』と、流石は父子の情愛で以前私の一身の自由を許された時とは打つて變つて、頗る温情の籠つたお言葉があつた。不孝の子に對しても是れだけの愛情を注がれるかと思へば、私も亦心中涙なきを得なかつた。

六、郷里を脱れて京都に赴く

斯うして私と喜作とは相携へて一先づ水戸に入つたが、前にも述べた如く私共に何等かの不穩な企てがあるといふ事が八州取締の耳に入つて居るし、而も私共が郷里を立退いた事が、早くも彼等の探知するところとなつたといふ噂を、或る同志から密かに教へられ、途中の詮議も仲々嚴しくなつた事を豫知する事が出来た。それで郷里を立つ時は目立たぬやうにといふので、上方參りの百姓姿で出たのであるが、之れから京都に上るに就いて丸腰の百姓姿では却つて直ぐ發覺する虞れがあるから、武家に身装を變へて京都迄行かうと相談し、江戸に於いてすつかり武士らしい姿に變つて

しまつた。併しながら浪人者に對しては幕府の神經が過敏で、矢張り取締が嚴重であり、郷里の訛り言葉から怪しい浪人と睨まれて、却つて窮地に陥る虞れがあらうと云ふので、兩人で苦肉の策を回らし、一橋の用人平岡圓四郎氏の家來であるといふ事にして京都迄行かうと考へた。此の平岡圓四郎氏の名前を利用するに就いては、一橋家が徳川の一門であるから都合がよいといふのが根本であるが、元々平岡氏とは相識の間柄であり、曾つて私が江戸に滞在中一橋家に仕へてはどうかと勧められた事もあり、其時は他に志すところがあつたので、『もつと勉強してから御推挙を願ひませう』と斷り、平岡氏からは『それでは君等が改めて仕へたいと思つたら、其時は遠慮なく申出るがよい』といふやうな話合ひになつて居つたので、其の縁故から平岡氏の名を利用しようと思ひ付いたのである。

其の當時は一橋慶喜公は禁裏守衛總督の役を仰付かつて京都に在られ、従つて用人の平岡圓四郎氏も亦京都に居つたので、私共が平岡氏の宅を訪づれて家來分の諒解を得ようとした時には勿論留守であつた。一時どうしようかと考へたが、前にも申す通り私が江戸の海保漁村の塾や千葉の道場に入入りしてゐる當時、友人の縁故で平岡氏に知られ、屢々其の屋敷に出入りしてゐた關係から、平岡氏の家來とも亦面識があつたので、其の家來に會つて、『實は此度伊勢參宮旁々京都に上らうと思

ふが、途中が物騒だといふ事であるから、平岡氏の家來分といふ事にして上りたいと思つて伺つた次第であるが、其邊は如何したものであらうか」と相談的に話した。勿論家來の一存ではどうもならぬと考へたのであるけれども、天は吾等を見捨てなかつた。留守の家來の申すには、「主人の平岡が京師に出發するに當り、豫て貴公も知つてゐる澁澤が家來にして貰ひたいと頼んで来るかも知れぬから、其時は何時でも許してやつて差支へない。そして京都の斯くくゝの場所に居るから、其處に訪ねて来るやうに申し傳へるやうに」と言ひ置いて行かれたさうで、其の爲め心配した程の事もなく直ちに兩人の依頼を聞き届けてくれたのである。一橋家の家來といふ事になれば、途中は頗る安心である。そこで江戸で四五日も遊んだ上、愈々京都へと志し、途々一橋家の用人平岡の家來であるといふ先觸れを出して置いたので、途中少しの心配もなく、所謂東海道五十三次の宿りを重ねて、其年の十一月末頃に京都に入つた。だが、私にしても喜作にしても最初から平岡氏の家來にならうとする氣持などは毛頭なかつたので、只京都迄の道中を無事に通過しようが爲めに平岡の家來分たる名目を犯したに過ぎないから、京都に着しても直ちに平岡氏の所へは顔出しをしなかつた。先づ三條小橋側の茶久といふ宿屋に着いて此處に落着き、それから一應平岡氏に挨拶を述べ、豫て知合の仲で京都に滞在して居る有志もあるし、其等の人を訪ねたり、新たに知己を求めたり、又機會を

失しては伊勢參宮をする事が出来ないだらうといふので、二人で伊勢參宮に赴いたりしてゐるうちに、其年も暮れ、正月も過ぎ、如月となつたのである。

四、幕府の祿を食む

一、平岡圓四郎氏の説教

私共兩人が京都に於いて諸藩の志士と交つたり、伊勢參宮をしたりして、天下の形勢を觀望してゐるうち、計らずも意外な飛信に接した。それは討幕の密議に加はつた同志の一人である尾高長七郎が、或る嫌疑の爲めに幕吏の手に捕はれて、江戸の獄舎に投ぜられた事と、長七郎が捕縛の當時私が京都から天下の形勢を論じて書き送つた手紙を懐中して居つた關係から、私と喜作とに對しても嫌疑が掛つてゐる模様であるから、十分身邊を警戒せよといふ通知であつたのである。吾々兩人は自分の事も大切であるが、同志の尾高長七郎を見殺しにする事は出来ないで、如何にして之れを救ひ出さうかと善後策に胸を痛めてゐる最中、一橋家の用人である平岡圓四郎氏から、『急用が出来たから是非即刻來宅せられたい』といふ使者が來たので、何事であらうかといふ不安を抱きながら、早速平岡氏を訪れた。平岡氏とは相識の間柄であり、殊に京都に上るに就いては、其の家來といふ名義を用ゆる事を許した程で、頗る理解に富んだ人物であつたから常に敬重して居つたし、京都に到着してからも、屢々一橋家の邸内に入りはして居つたが、上京した理由を訊ねられたり

すると困ると考へて此の問題には觸れない様にして居つた際であるし、折りも折りとて身邊を警戒せよとの通知に接した直後であるから、脛に傷有つ心持がした。

併し兎も角も不安を抱きながら平岡氏を訪れると、早速私共兩人を引見し、更めて京都に出て來た理由を質された。それで私は腹を定めて少しも包み隠すところなく一切の事情を告白し、『早速お話しすべき處であつたが、萬一御迷惑をおかけするやうな事があつては重々相濟まぬ事と考へたので、存じながら今日迄お話をしなかつたのである』と申述べると、平岡氏は既に總ての事情を熟知して居つて赤裸々に白状した態度が氣に入つた模様で、『實は今日君等と呼んだのも其の問題に關聯した事であるが、幕府に於いても既に大體の企てを探知し、兩人を逮捕する爲めに幕吏が京都に追跡して來てゐる。處が兩君が京師に上るに際して、途中平岡の家來と稱して來た事が分つたので、親藩の手前直ちに手を下す事が出來ず、果して濫澤兩人が平岡の家來であるかどうかといふ事を、一橋家に問合せて來た。それに就いて君等と呼んだのであるが、幕府に於いても既に兩人が平岡の家來でないといふ事は大體承知して居るけれども、大事を取つて念の爲めに問合せて來たのであるから、私も白々しく平岡の家來であると偽つて返答する事は出來ない。さればといつて有りの儘に平岡の家來でないと言つてしまへば、直ちに捕縛されるのは分り切つてゐるから、拙者も返答に迷

つてゐる次第ぢや、其邊はどうしたものだ」と極めて打ち解けた相談をされたのである。更に言葉を重ねて言ふには、「君達が郷里に居つて抱いて居つたやうな一足飛びの過激な思想では、到底何事も成就するものではない。それよりも寧ろ此際、一時節を屈して一橋家に仕へた方が得策ではあるまいか。固より直ちに立派な身分に引立てるといふ事は出来ないが、大閤秀吉でさへ草履取から立身出世したのであるから、君達も下士輕輩で當分辛抱する決心で、追々と政治上に實際の権力ある人に自分の意見を進言し、徐々に之れを行はしむるやうにする方が遙かに賢明なやり方である。君等が其考へであれば、拙者から君公に申上げて、内々で慶喜公にお目通りを仰せ付けられるやうにしようし、幕府方へも兩君は一橋家の家臣であるから、指を差してはならぬと返答しよう」と説き諭された。

平岡氏の説には確に私共の考へ及ばなかつた眞理がある。併しながら今更となりて、昨日迄倒さうと考へてゐた幕府方に頭を下げ、其の一門である一橋家の祿を食む事は、男子の體面としても出得べき事ではない。又、今更尊王討幕の意見を捨て、謂はゞ軍門に降るやうな醜い事をする氣持もない。それで直ちに斷るといふのも穩當でないから、先づ宿に戻つて熟考の後返答する事とし、宿に戻つてから殆んど夜を徹して相談した結果、種々の事情から一時節を屈して一橋家に奉公する

決心をした。其の理由の一つは、平岡氏の厚意を斥ける事は徒らに犬死に終る事であるから、討幕の旗擧げを中止した事が意味をなさぬ結果になる事、一時耻を忍んで變節漢と罵られても、將來に志を伸ぶる方が眞に國家に盡す所以であるといふのが其の一つ、更に焦眉の急務として、此の場合一橋家の家臣となる事は江戸の獄舎に投ぜられてゐる同志、尾高長七郎を救ひ出すに最も便宜であるといふにあつた。之れは決して自分等が生き延びようが爲めに考へ出した理由ではない、又世間に對する申譯の口實でもない。自分自身の事は兎も角として、尾高長七郎を救ふには、之れより外に良策が無いと考へたからである。前の二つの理由に就いては一橋家に仕官の後と雖も、私が尊王討幕の志を捨てなかつたに見ても、其の眞意を察する事が出来やうと思ふ。

二、節を屈して一橋侯に仕ふ

私が一橋家に仕ふべく決心した事情に就いては、曩に述べた通りであるが、兎も角も一旦仕へる事となつた以上は、飽迄も一橋家の爲めに盡さなければならぬ。それで最初は槍持からでも草履取りからでも何でも構はぬ、其中に段々出世をして自分の理想を實現しようといふやうな考へで、平岡氏から呼び寄せられた翌日、同姓喜作と相携へて再び平岡氏を訪問し、「熟慮の末お勧めに従つて

一橋家の家臣とならうと決心致しましたから、宜しくお取なしを願ひます』と返辞をした處、平岡氏も非常に喜んで早速其の手續を履んでくれ、二三日後に非公式に慶喜公にも御目にかゝり、かうして私共は愈々一橋家の家來となつたのであるが、それは忘れもしない元治元年二月二十三日の事であつた。

最初、一橋家に召抱へられた時には、奥口番と稱して奥の口の番に當る至つて低い役柄で、四石二人扶持、滯京手當月四兩一分宛の俸祿を受ける事になつたのであるが、奥口番といふのは表向き役名で、實際の仕事としては御用談所の下役といふものを仰せ付けられた。此の御用談所といふのは、一橋家の外交向きを取扱ふ役所で、禁裏御所に對する接待、堂上公卿との交際、諸藩關係筋に對して始末をするなどといふのが、其の主なる仕事であつたから、身分は至つて低いながらも、謂はゞ一橋家の外交事務に參與する事が出来るやうになつたのである。百姓上りの私が此の身分になつたのであるから、一時節を屈して一橋家の家來とはなつたものゝ、心中又些か得意でない譯でもなかつた。斯う申せば私の尊王攘夷論並びに討幕の企てなどは、少しの根據も無い附和雷同的の考へでもあつたかのやうに思はれるだらうが、一橋家の家來となつても決して尊王討幕の志を捨てた譯でなく、只地位を得て自分の志を行はうといふやうに考へが變つたのであつて、手段方法は

違ふけれども、根本の思想に於いては變りはなかつたのである。

さうかうして居るうちに、私も多少信用されるやうになり、殊に平岡氏はよく私の意見を聽いてくれたが、豫て私から平岡氏迄申出であつた建言が容れられて、一旦有事の日に備ふる爲め、一橋家に於いて廣く天下の志士を召抱へる事になり、身分が軽いにも拘らず、知己もあるし辯舌もうまいといふので、私と同姓喜作とが關東人選御係といふものを命ぜられ、確か同年の五月の末か六月の初旬頃かと思ふが、公然關東に下る事になつたのである。郷里を脱け出して京都に上る際には一橋家の家來といふ觸込みであつたから、身邊に危険は無かつたものゝ、脛に傷持つ身であるから、風にも心を置かなければならぬ身の上であつた。それが半年後の今日には一橋家の役人として、堂々といふ程ではないが、兎も角も公々然と下向するのであるから、往時を思ひ起して感慨無量であつた。斯くて關東に下向し、天下の志士を歴訪して、相當の人数を纏める豫定であつたが、當時水戸の藩中に政争があつて、志士の多くは之れに赴いて居つた爲め、應募者は極めて少數であつた。それで止むを得ず、一橋家の御領内にある各村落を巡回し、廉潔忠誠の農兵三四十人を募集した上、之れに江戸で採用した八人の劍客と二人の漢學書生とを加へ、總勢五十人ばかりを纏めて京都に歸つたのである。餘り好成績ではないが、場合が場合であつたから、農兵を募つた事は寧ろ機宜

の處置として褒められたやうな次第であつた。

三、 恩人平岡氏の凶變と其後

私の關東下向中、京都に於いては私個人として容易ならぬ事件があつた。それは私に取つては大恩人であるところの平岡圓四郎氏が、六月十七日京都の一橋家邸附近に於いて、水戸藩士の爲めに暗殺された一事である。其頃の世の中は實に物騒千萬なもので、殊に京都並びに江戸に於いては暗殺などは尋常茶飯事のやうなもので、始終撃つた斬つたの話で持ち切り、私如き者も一命を捨てる事などは露程も恐れてゐなかつたのであるから、他の人が暗殺されたのならば、水戸との關係を知つて居る私に取つては、さては暗殺されたかと、暗殺そのものに就いては決して驚きもしなかつたらうが、それが少なからぬ庇護を蒙つた平岡氏であるだけに、驚駭もし、亦私情として甚だ遺憾に思つたのである。平岡氏と私とは以前からの縁故もあり、私を一橋家に推挽したのも此人であり、殊によく私の性格を知つて居られて、非常に厚意を以て引立てられたのであるが、平岡氏が居らなくなれば恐らく私の立場も從來のやうには行くまいし、従つて今後重要な地位に進んで、志を伸べるといふ事も危ぶまれるやうに思はれぬでもなかつたが、幸ひにして平岡氏の歿後、一橋家の用人

筆頭となつて政務を掌る事になつた黒川嘉兵衛といふ人が、私共を多少でも役立つ男ども思つたのか、平岡氏と同様に私と喜作とを重用してくれ、其年の九月末には身分が御徒士に進み、食祿八石二人扶持、滯京手當月六兩になつたのである。明けて慶應元年二月には、私は小十人といふ身分に進み、十七石五人扶持、滯京手當月十三兩二分となつた。其頃一橋家の兵備といふものは頗る手薄で、尾州や紀州や水藩のやうに譜代の家來といふものも無く、禁廷守護の兵備としては、幕府より貸し與へられた二小隊計りの客兵が主であつたのである。而も此の二小隊の兵隊とても元來が幕府の兵隊であるから、幕府の都合に依つては何時引揚げられるかも知れない。それでは一朝有事の際に當つて、一橋家が禁裏御守衛の大任を果すことが出来ぬと考へたので、私は慶喜公に謁見して農民募兵の議を言上したのである。此頃は既に立派な士分に取り立てられて、お目見得以上の資格を持つて居つたのであるから、直接慶喜公にお目にかゝる事も出来、意見を開陳する事も出来たのである。處が此の農民募兵は黒川用人も賛成であり、其他の重役にも賛成者が多かつたので、遂に此の建言が容れられたばかりでなく、以前に關東人選御用係を命ぜられた關係もあるし、且つ此度の事は濫澤の建言であるといふので、私が歩兵取立御用係といふものを命ぜられ、兵備組立の事に就いて全責任を負ふ事となつた。新規召抱への私に此の大役は過分であるだけに、私としては是

非とも豫期以上の成績を挙げねばならぬと決心し、種々の準備を整へて早速一橋家の領地を巡回し農兵募集の事に従事した。此の募兵に就いては、最初種々困難な事情もあり、豫期通りにスラ／＼と進まぬので、大いに頭を悩ましたものであるが、私は大なる決心を以て事に當つたので、後には都合よく事が進み、屈強な農民の募りに應ずる者が陸續として出で、結局は豫期以上の成績を収める事が出来たので、私は完全に其の重責を果す事が出来たのである。

此の農兵募集に就いては、私は一橋家の各領内を巡回したので、密に領内の事情を知る事が出来たが、其の結果領内の産米と木棉が、他領の物に比較して餘程値段が安くなつて居る事や、硝石の産出が比較的多いにも拘らず、其の製造所が餘りに小規模の爲め、非常に不利な立場にある事などを始めとして、産業上の種々な方面に就いて氣付いた点が少なくなつたので、之れはどうしても大いに改良して其の方法を改め、領民を豊かならしめると同時に、一橋家の収入をも増加させなければならぬと考へ、是等の事に就いて種々私の意見を建言した。役目以外の仕事であるが、此の私の産業經濟に關する建言が、從來の係役人よりも目の着け所が違ひ、餘程進んで居るといふ事になつて、『濫澤は産業經濟の方面には大分明るいから、寧ろ軍事の事よりは經濟方面の仕事をさせる方が宜しからう』といふ事になつたらしく、農民兵組立の仕事が終ると同時に、一橋家の御勘定組頭に取

立てられ、「十分に其の意見を實行するやうに力を盡せよ」と命ぜられた。それで豫て調査した材料に基いて種々財政上の案を立てたり、直接仕事をしたり、又諸種の改良案を計畫したりしたが、御勘定組頭を仰せ付かつてから食祿も加増されて、二十五石七人扶持、滞京手當月二十一兩となつたのである。此の御勘定組頭の上には勘定奉行といふのがある。勘定奉行といふのは、今日で申せば大藏大臣といった格で、其次が勘定組頭であるから、平たく申せば先づ私は一橋家に於ける大藏次官の格になつたわけである。斯く重用されば重用される程、私は一橋家に對する恩義を深く感ずるやうになり、加ふるに慶喜公は徳川親藩に於いても、唯一人の傑出した人物であるから、幕府が倒れるやうな事があつても、慶喜公を押立て、私の志を行はうと考へるやうになつた。

四、將軍繼嗣問題と豪族政治豫想

一橋家の祿を食み漸次登用さるゝに従つて、次第に私の意見も用ゐられるやうになつて來た。それで私も一橋家の爲めに獻身的に御奉公する決心で益々精勵して居つたが、爰に頗る困つた問題が起つた。それは徳川十四代將軍家茂公が慶應二年八月に薨去遊ばされたに就いて、慶喜公が一橋家より宗家に入られて、徳川十五代將軍にならるゝ事になつた一件である。一橋家の家臣といふ立場

からすれば、慶喜公が將軍職に就かるゝ事は甚だ喜ぶべき事と云はなければならぬだらうが、私は之れに對しては大反對だったのである。それには相當の理由がある。元來私は一橋家の祿を食んで居つたけれども、依然として徳川幕府は倒してしまはなければならぬもので、又天下の大勢から察しても幕府は當然に倒るべきものと考へて居つたのであるが、若し今日まで君公として仕へ奉つた慶喜公が一度將軍にならるゝ事になると、情誼の上からしても私は幕府を倒す爲めに力を盡すといふ譯には行かなくなつてしまふ。『忠ならんを欲すれば孝ならず、孝ならんを欲すれば忠ならず』と嘆いた重盛ではないが、私の立場はつまり君臣の義と平素の主張との板挟みになつてしまふ、それ計りでなく將來に於いて、必ず慶喜公を見殺しにしなければならぬやうな破目に陥る虞れがあると思つたのである。

其の當時、私は幕府は早晚倒れる運命にあると信じて居つたが、幕府の倒れた後直ちに今日のやうな御親政にならうとは夢にも思はなかつた。今になつて考へると誠に恐懼に堪へぬ次第である。當時の形勢からすれば、幕府の倒れた後には當分の間豪族政治のやうなものになつて、薩州とか土州とか其他の有力な藩が集まつて、天下の政治を行ふ事になるだらうと信じたやうである。何故直ちに御親政に復古する事を豫想しなかつたかといふに、朝廷には兵力といふものが少しも無い、従

つて討幕には勢ひ諸藩の兵力を必要とする、諸藩の兵力を借りて幕府を倒すとすれば、其の雄藩の大名が寄り集まつて政治を取るやうになるのは必然の歸趨である。されば一藩の力を以て討幕の大事業を行ふ事は不可能であるから、徳川幕府が倒れた後更に別の幕府が出来やうとは考へなかつたけれども、一時的の現象として、朝廷直屬の下に豪族政治が出現するだらうと豫想したのである。大西郷の如きも、最初は矢張り豪族政治になるだらうと考へられて居つた模様で、急轉直下維新の大業を完成する事の出来たのは、全く時の勢ひであるといふのが至當であらう。

扱、幕府が倒れて豪族政治が行はれると假定して、徳川一門から之れに參與し得る人傑は誰かと考へて見たが、尾州侯にしても、水戸侯にしても、又紀州侯にしても、豪族政治の仲間入りが出来やうな人物ではないやうに思はれるが、只一橋慶喜公だけは非常に英明な人傑であらせられるから、慶喜公を押立て、行きさへすれば、豪族政治の中に割込む事が出来るし、従つて私の志も慶喜公を通じて行ふ事が出来ると思つて居たのである。其の慶喜公が一旦將軍にお成りになつてしまへば、幕府が倒れた時に何うしても天下の政治に私の志を伸べる事が出来なくなつてしまふ。そこで私は慶喜公の立場と私自身の立場との兩方面の立場から考へて、慶喜公の將軍に成られる事は頗る不得策と信じたので、私は飽迄も慶喜公を將軍職にお就かせまいとし、直接慶喜公に面謁して私



の意見も申述べたが、遂に力及ばず慶喜公は宗家に入つて第十五代將軍を襲ふ事となられたのである。此時私は慶喜公だけとは思つてゐたが、矢張り地位、權力を好む普通のお大名に過ぎなかつたかと思ひ、自分の觀察の過つたのを後悔すると同時に、慶喜公の爲めに大いに其の輕舉を惜んだ。



公 喜 慶 川 徳

之れは後日の話であるが、私がフランス留學から歸朝して慶喜公にお目にかゝり、種々話の末に前年私が公の將軍就職に反對したのを語られ、何故彼の際不利な立場と知りながら將軍になつたかといふ理由に就いてお話しされたが、それに依れば慶喜公には一橋家から出て將軍職にお就き遊ばす際に既に大勢の赴く處を察知せられ、私共の思ひ及ばなかつた御深慮をお持ちになり、他の人が將軍職を繼いで時は局が益々紛糾するのみであるから、自らを犠牲にして將軍の職に就き、其の地位を利用して大政を奉還し、御親政の道を開きたいとの御志望から、將軍職にお就きになる決心をせられたのださうである。此のお話を承つて、私が其の當時斯くの如き御深慮のあつた事を少しも察知する事を得なかつたのを、私かに耻ぢ入つた次第である。

五、飯炊きもやり澤庵買ひもする

一橋家に仕へた當時私は自炊生活をした。俸祿が僅か四石二人扶持で、仕官の身といふのも氣耻しい次第であるが、兎も角も俸祿を取るやうになつたので出来るだけ儉約をしなければならぬといふので、丁度御用談所の側に空いてゐる長屋があつたので、それを借り受けて兩人が同居し、自炊生活を営むことになつたのであるが、部屋は八疊二間に臺所の附いたもので、書生に毛の生えた吾の身分としては、先づ満足しなければならぬ程度のものであつた。

元來、私が郷里を逃れ去る時には、前にもお話しした通り、父晩香から百兩だけ恵まれたのであるが、明日にも死なうといふ考へであつたのだから、若氣の至りから江戸に滞在中、喜作と兩人で遊びに出掛けたりして二十四五兩を遣つてしまひ、京都に上つてからは有志と交際したり、伊勢參宮をしたり、それに世間馴れぬものだから最初から儉約するといふ事に氣付かず、京都では三條小橋の茶屋久四郎といふ上等の旅籠に宿つたりしたので、二ヶ月計りの後には懐中がすっかり寂しくなつて來た。それで或日茶久の主人を呼んで、「今後長滞在をするから食事に就いては一切文句を言はぬ代はり、宿錢を大いに負けてくれる」と交渉をした處、主人も早速承知してくれて、晝飯炊きの

朝晩二度だけで一日一人の旅籠代四百文に負けようといふ事になつた。尤も今日から見ると四百文といへば頗る安いが、普通は二百五十文位が相場であつたから、四百文に負けさせても猶ほ上等のお客様であつた譯である。其中に懷中はメツカラカンになつてしまひ、死んでも再び父兄から金銭の補助を受けぬと心に誓つたので、郷里に言つてやる事も出来ないから、親しい友人から參兩五兩と借りて漸く旅籠代を拂つたり、交際費に當てたりして居つたのである。最初から金の事を考へて居つたならば、適當の下宿屋にでも宿を取つて、こんなに早く食ふ事の心配までしなくともよかつたらうに、新米の書生だけに苦しくなつてから初めて氣が付いたやうな次第であつた。一橋家に仕へる事となつた頃には、此の義理ある借金も貳拾五兩ばかりになつて居つたので、微祿でも仕官する身となつた以上は、此の義理ある借金も追々返済しなければならぬといふので、さてこそ兩人で大いに切詰めた生活をする事とし、今でいふ簡易生活を始めたのである。

無駄な金は一文も遣はぬといふ申合せをしたので、勿論雇女も頼まず、私と喜作と兩人で交替で炊事をする事にしたのであるが、第一に困つたのは、どうしても好い具合に飯が出来ない。或時は水が多過ぎて粥のやうなものが出るかと思ふと、次の日は硬過ぎて半分生米であつたり、さうかと思ふと眞黒に焦げつけさせて上の方まで黄ろくなつたり、満足に食へるやうな飯はなかく出

來なかつた。それでも段々馴れて來ると焦げも附けず、軟かくもなく硬くもなく、丁度頃合の飯が出来るやうになつた。今でも臍に記憶して居るが、磨ぎ上げた米を釜に入れて、其上に手を置き水が少し其手を越える位にすれば、好い具合の飯が出来たものである。豆腐汁や菜つば汁等も拵へたが、飯を炊くのと違つて、之れは自分で味を見ながら拵へる事が出来るから、分量なども直ぐに覺える事が出来た。何分雇人なしの共同生活であるから、汁の實や澤庵等も自分等が買出しに行つたものであるが、時々牛肉や鯨肉等を買つて來てつゝき合つた。それが先づ其頃に於ける最上の御馳走であつたのである。それから寢具であるが、二人分を借受けては損料を多く拂はなければならぬので、蒲團を一人分即ち三枚だけ借りて、私と喜作とが其中に背中合せになつて寝たものである。斯ういふ風にして、殆んど極端に近い儉約生活をしたので、兩人が月に貰ふ四兩一分宛の手當の中から、半分位は借財の返済の方に向ける事が出来、四五ヶ月の後には貳拾五兩ばかりの借金を、全部返済する事が出来たのであつた。後日の話であるが、此の恩借金を返したについて、其の恩人の申さるゝ事には、『書生さんに貸すのに、返済して貰ふといふ氣は少しもなかつた。最初から進上する積りで差上げたのであるのに、僅かの俸祿の中から儉約をされて返金されるとは、若いに似合はずサテ／＼見上げた心掛けである』といつて感心され、大に面目を施したのであつた。

五、慶喜公の長州征伐

一、志願兵取立に成功す

私が歩兵取立御用係を吩咐けられたのは、慶應元年の二月の末頃であつた。元來一橋家の領地は攝州に一萬五千石、泉州に七千石、播州に二萬石、備中に三萬三千石、他に關東に二萬石合計十萬石が御賄料であつたが、各領地には代官所があり、領内の事を一切取扱つて居つた。私は此の命を受けるや、「此度歩兵取立御用係として濫澤篤太夫を派出するに就き、萬事同人の指圖に従ふ可し」といふ御用狀を得て、先づ大阪河口にある代官所に赴き、御用の趣きを申傳へると、大阪の代官役人は私の命令を承知し、それにしても備中の方が先きに出來れば大阪方面を取り纏める事は至極容易だといふので、其の意見に従つて備中の方から先きに手を着ける事とし、其の足で直ぐ備中の代官所を置かれてある井原村に向つた。此度は田舎への出役であるから少しは威容を整へて行く必要があるとて用人の注意に従ひ、京都出立の時に槍持を連れ合羽籠等を持たせ、長棒の籠に乗つて出掛けたのであるが、其の途中板倉候の城下である板倉といふ宿を通行する際などは、「下にゐろ、

下にゐろ」といふ下座觸れをする有様で、我ながら仲々威容を増したやうに思はれたものである。扱、井原村に着して代官に面會し、領内の庄屋に對して農兵募集の趣旨を申傳へて、「村々の次三男で、志有る者に召しに應ずるやう取計つてくれ」と申したところが、代官の言ふには「私から申し付けるよりも、尊公から直接申渡した方が宜しからう」といふ意見だつたので、其の翌日から毎日のやうに庄屋附添の上で村民を陣屋に呼び出し、御用の趣きを噛んで含めるやうに申し聽かせたが、誰一人として召しに應ずる者がなく、毎日多人數出ては來るけれども、庄屋共は申合はせたまうに、「何れ篤と申し諭して希望者があつたならお受けに出ます」と歸つて行く。それで私は不思議に思ひながらも、猶ほ親切に話をしたり、嚴格に説諭したり、手を更へ品を變へて説諭を試みただれども依然として一人の應募者もない。之れは愈々おかしい、何れ何か裏面に事情が伏在してゐるに違ひないと思つたが、其の理由が不明なので手の着けやうがない。さればと云つて此度の使命は自分が建言し、自分が進んで此の役目を引受けて來たのであるから、今更募兵が出來なかつたと言つて、空手で歸るわけにも行かない。そこで先づ氣長に構へて良案を考へ出さうと思ひ、村民を集める事は一時中止して、當分様子を探る事とした。

其頃寺戸村といふ所で、阪谷希八郎(阪谷芳郎男の實父)といふ儒者が、興讓館といふ塾を立て

て子弟を教養して居つたが、一度會つて見ようと思つて、一日、酒一樽を贈り、『明日お伺ひするか
ら御都合は如何であるか』と問合せると、早速快諾があつたので、其の翌日興讓館に阪谷先生を訪
問し、大いに時事を談じて宿に歸り、又更めて阪谷先生と主だつた弟子達を自分の宿に招待して宴
會を催し、互ひに胸襟を開いて痛飲し、開港鎖國の得失を討論したり、天下の形勢を談じ合つたり
した。又近所に關根といふ劍術の師匠が居つたので、此人とも親しくなり、或日興に乗じて此の男
と一本の手合せをしたが、左程の達人でもなかつたと見えて、脆くも私の爲めに撃ち込まれた。こ
んな事で私の噂が弘まり、『今度來た御役人は普通の俗吏ではない。學問と云ひ劍術と云ひ共に勝れ
て居る』といふので、意外千萬にも虚名が高くなつたので、稍々文武に志ある青年子弟が續々訪ね
て來るやうになり、學問上の話や、擊劍の試合等をした事もあつた。

或日の事、備中名物の鯛網を見物に行つた。其日は興讓館の門弟や、近傍の青年等を同行して酒
を携へて出掛けたのであるが、私共の一行は取立ての鯛を料理し、酒を飲み、詩を吟じ、一日を頗
る愉快に送つた。それ以來、此の連中とは特別に親しくなり、且つ私に心服した模様であつたが、
それから間もなく、四五人の青年が私の處に『是非京都に召し連れられる様に御配慮を願ひたい』
と頼み込んで來た。私はそれで一つの妙案が浮かんだので早速承知をし、望みに任せて一橋家に奉

公出來るやうに心配してやるが、ただ口上ばかりでは都合が悪いから、志願の趣きを認めて申出づ
る様にせよと申付け、下書を書いてやると、早速其通り認めて願書を持つて來たので、之れで使命
を果たす見込みが付き、稍々安心する事が出來た。

——其年もいつしか暮れて慶應元年の春の頃とか、近き村に住みけるながし伊勢に詣で都にも
のぼり、播磨の名所まで見めぐりて歸りけるが、或時家に訪ひ來て語りけるは、やつがれ先つ日
播磨なる舞子明石など見めぐりたるかへるさ、敦盛塚のほとりにて、ひがしの方よりよしありげ
なる武士の行装と、のへてねり來るにあひぬ。路をさけつゝふと見れば、乗物のうちなる武士は
榮二郎ぬし(澁澤子爵)に似たりけり。あまりに思ひがけぬ事なれば、いぶかしみてたゞすみ居る
程に、あごに添ひて歩みゆくは虎之助ぬし(大人の御従弟須永傳藏ぬしの始めの名)にまぎれも
あらず、あなやと呼びかけまくせしかど、あなたにてはさらに心づき給はぬさまなり。つき従へ
る侍たちあまたありて、其さまのいとかめしきに心おくらためらふまに、はやとく行過てけ
れば、追ひしきて名のらんもさすがにて其まゝ止みにけれど、あはれ其折心をはげまし名のりか
けて對面し、言づてなりとも承り來たらんには、こよなきつとともなりぬべかりけるに、あまり

に心よわかりしを後に悔むもかひぞなき、と申しとぞ。語りつる人よりも打聞き給ひたる祖母君、母君こそなかくに残り惜しうはおほし給ひけり。後の御消息によりて、そは公用にて備中の國まで行かせ給ひける御道の程の事なりけりとは知らせ給ひけり。此時大人は寺戸といふ所にて阪谷ぬし(芳郎男)の父君に始めて対面し給ひけりとぞ。(穂積歌子著、は、その落葉)

二、歩兵隊の編成と篤行者の表彰

扱其の翌日、庄屋一同を自分の宿に呼び出し、「先日来、其方共に對して一橋家の御趣旨のある處を懇々と申聞けたにも拘らず、今日まで一人の應募者もなかつたが、昨日私の手許まで此の様な願書を差し出した者がある。僅かの間であるけれども、私に接觸した人々の中からは四五人も志願者があるのに、御領内から外に一人も志願者が出ないといふのは不可思議千萬である。察するところ蔭に廻つて其方共を掣肘する者がある爲め、殊更に希望者を差止めてゐる事と推察するが、若し其様な譯合であるなら斷じて許しはせぬぞ。拙者は君公の仰せを拒むやうな不屈な庄屋の十人や十五人を殺す位のことには平氣であるから、各々方が餘り愚圖々々すると其儘には差置かぬぞ」と威嚇しつけ、更に繰返して募兵の趣旨を諄々として説諭した。すると庄屋連中も閉口頓首し、旦那様の御

眼力には誠に恐れ入りました。實は御代官様が内々私達に申されるには、一橋家も近頃は段々山師が多くなつて困る。其の結果從來なかつた色々の面倒な事を考へ出して代官所などにも言つて來るが、一々其の申す事を聞いて居ては領民の難儀になるから、成るべく敬遠する様にした方がよい。今度の農兵募集の事なども志願者が一人もないと言へばそれで済むから、京都から役人が來たならば其様に申立てる様にせよといふ事だったので、大分多數の志願者がありましたけれども、それ等の連中を戒めて一人も希望者がないと申上げたので御座います。併し此事が御代官様に聞えますと私共が難儀しますから、何卒御内分に願ひます」と白狀した。斯ういふ様な譯で事情がよく分つたので、庄屋に對しては「更めてもう一度呼出しをするから、其時には十分に心配をしろ」と申し含め、其の翌日、早速代官所に出掛けて談判をした。

代官に對しては、庄屋共を叱り付ける様には參らぬので、少し改まつた口調で、「實は先日来庄屋並に領民共を集めて説諭したけれども、今以て召しに應ずる者が無い。之れは全く私の説諭が行届かなかつた結果と思ふから、明日から改めて呼出しの上説諭しようと思ふ。それに就いて御參考までに私の存意を申述べるが、此度の歩兵取立に就いては、君公にも深い思召しがあつて仰せ出だされた事は豫てお話し申した通りである。然るに御領内から一人も應募者が無いのは、私の説諭に不

行届きの點があるかも知れぬが、一面に於いては代官としての平素の薰陶が悪い爲めに、斯ういふ結果を見たものであるとも云へる。貴殿のお考へでは、農兵募集が出来なかつた場合は、拙者が辭職すればそれで済むものと思はれてゐるかも知れぬが、此度の使命は非常に重大な責任を帯びて遙出張したのであるから、唯出来なかつたと申してそれで済まされるものではない。拙者の責任上、徹底的に其の理由を調査して、其の證據を携へて復命しなければならぬから、さうなつた場合には貴殿の身分柄にも何ういふ迷惑を及ぼすか計られぬ。此點をよく熟考されて、明日は貴殿からも嚴重に説諭をされたら宜しからうと存する。念の爲め一言申上げて置く」と嚴重に談じたところが、脛に傷持つ代官の事であるから、大いに困つたといふ様子で、「常々嚴重に薰陶して居るのではあります、今度は猶一層御趣旨の徹底を計り、十分御役目を果されるやうにお力添へを致します」といふ辯解交りのしどろもどろの挨拶であつた。

先づ之れでよしと考へたので、翌日から再び陣屋に村人達を呼出して再び説諭をすると、此度は志願者が續々と簇出し、僅かの間に備中計りで二百人餘の應募者を得る事が出来た。それで是等の應募者に対しては、何月頃京都に參るやうにと期日を定め、それから播州、攝州、泉州を廻つたところが、既に備中が豫期以上の成績を得て居るので、是等の地方に於いても、續々として志願者の

申出であり、總體で四百五六十人の人数を纏める事が出来た。私は事の成れるを喜んで五月の中旬頃京都に歸り、農兵募集の成績を具に復命したところが、慶喜公から速かに大役を仕遂げて満足に思召すといふお褒めの言葉に與り、白銀五枚に時服一重を添へて賞與された。是等の農兵は其年の七月に兵制の組立を終へ、洋式の訓練を施し、急造ではあるが兎も角一通り整つた歩兵隊の編成が出来上つたのである。猶ほ此度の巡回中に領分内に於ける篤行者とか、孝子や、節婦、義侠等の行ひを問ひ訊し、之れを取り纏めて黒川用人まで具申し、地方政治の行届いてゐる事を示す爲めに、是等の人々を褒賞されたら宜しからうと意見を申上げたところが、速かに其の意見を採用され、孝子、節婦、義侠等十四人の善行者に對して、それ／＼褒賞を授け、特に興讓館の阪谷先生をば、京都に呼出して慶喜公が拜謁を賜り、お褒めの言葉があつた計りでなく、塾に對しては相當の扶持を付與される事になつたので、領内各地方に於いては一橋家の徳政を稱揚し、且つ濫澤が來てから善政が多くなつたといふので、大いに私の評判も良くなつたといふ事であつた。

三、一橋家の財政革新を圖る

農兵募集並びに歩兵隊の編成は一段落つしたが、私は領分を巡回して居る中に、土地の物産や、

其の賣捌方其他の經濟上の事に就いて調査したが、歸洛後等は等の意見を取纏めて君公に建議した。それは大體に於いて年貢米の賣捌方、播州木棉の賣買、備中の硝石製造の三ヶ條であつて、之れに依つて幾分でも藩の經濟を豊かにし、併せて領民をも富ましめようといふのであつた。處が黒川用人を初めとして、其他の重役連中も至極賛成だと云ふので、私に對して其の取扱ひを命ずる事となつた。併し自分は御用談所出役であつて役目が異ふから、其年の秋改めて勘定組頭を命ぜられ、御用談所出役の方は兼務といふ事になつた。此の勘定組頭といふ役目は、會計事務の次官格のものである。殊に私は一橋家の財政上、十分に改正を行ふ事を委任するといふ御内意を受けて、勘定組頭になつたのであるから、普通の組頭よりも餘程重く取扱はれた。

勘定組頭を拜命すると同時に、私は二十五石七人扶持、滯京手當月二十一兩に進められたが、一橋家の財政を整理改革するに就いては、机の上で計り出来るものでないから、再び領分へ出張して、先づ兵庫で年貢米賣捌方の方法を立て、又備中へ行つては硝石の製造方法を聞き、播州の木棉に就いては藩札を發行して木棉を買上げ、大阪の間屋に仕向けるといふ様な方法を立てた。此中で硝石の製造に就いては、さまで顯著な成績を擧げる事は出来なかつたが、年貢米の賣捌きに就いては、

當時の相場より一石に付いて五十錢も高く賣れ、木棉の賣行きに付いても相當刺戟を與へて、其の産額を増加した計りでなく、其の値段も幾分高く賣る事が出来た。猶ほ此の藩札は其頃他の諸藩に於いても往々行はれて居つたが、多くは其の引替が悪かつた爲め、取引が圓滑に行はれず、其の藩に依つては他領に通用せぬものは勿論、其の領分内の通用さへも何割引とか何掛とか云つて、藩札の表面の金高の何分の一かにしか通用しなかつたものである。で、私は此點に最も注意し、第一番に引替現金に注意し、決して之れを他に流用出来ぬといふ基礎を定めた上で發行したから、少しの弊害も無く一匁は一匁、十匁は十匁の價格を保つて便利に行はれた。今日で申せば兌換紙幣の様なものであるが、他藩に於いて之れが完全に行はれなかつたのは、其の正金引替が不十分であつた爲め、それが爲め藩札の信用が地に墜ちたのだが、一橋家の方は此點を第一に確實にしたので、現金同様に通用を見、非常の便利となつたのである。

三事業の改良に就いては兎も角も着々として進行したが、一方勘定所の改革に就いては前例や舊慣等が多いので、之れを急速に改革する事は一通りや二通りの困難ではなかつた。元來、一橋家の御勘定所の組織といふのは、勘定奉行が二人、勘定組頭が三人、其他に平勘定、添勘定といふのが數十人あり、御金奉行、御藏奉行、御金方、御藏方、御勘定所手附等の人数を加へると百人以上に

上り、又領分を支配する各代官所の役人も總て勘定奉行の支配する處であつたから、役所の規模も大きく新米の自分一人の力では、直ちに面目を改めるといふ事は出来得なかつた。併し乍ら慶喜公や重役の信任を蒙り、財政改革の内命を承けて勘定組頭を拜命したのであるから、困難だからと云つて引込んで居る譯には行かない。何處までも能ふ限りの力を竭して、一橋家の財政改革に當らなければならぬといふ固い信念に基き、私は如何なる困難にも拮抗して與へられた任務を全うする手段に出ることを覺悟したのである。徒らに引込み思案に時日を費す時ではないので、私は思ひ切つて勘定奉行に對し自分の考へを詳細に申述べ、同役や輩下の人々に對しても仕事の取扱ひ振りや執務の順序等に就いて、些細な事まで注意し、甲の事務と乙の事務とを合併して一局としたり、煩雜な丙の仕事を閑な丁の方に幾分か分けてやるやうにしたり、執務上にも幾分の改革の實を擧げる事が出来た。

處が翌年の夏頃に至つて、慶喜公が長州征伐の大任を引受けられる事となり、私も亦お供を命ぜられて勘定組頭から御使番格に榮轉し、愈々君公の馬前で一命を捨てる場合となつた。之れより先き徳川十四代將軍家茂公は、朝廷の御召しに依つて上洛し、當時は大阪に滞在中であつたが、長州が朝命に背いて禁廷に發砲したので、長州征伐の勅命が幕府に下り、幕府は諸藩の軍勢を催して長

州征伐を始めたが、總督尾張大納言の軍令も行はれず、各藩の士氣も一向に振はず、寸功を納める事も出来なかつた。殊に長州勢は様々の奇策を弄し、藝州口の戦争等は幕軍が連戦連敗の有様だつたので、斯くては徳川の天下も亡びるより他はないといふので、一橋公が奮然として蹶起し、自ら長州征伐の大任を引受けて、成敗を一舉に決しようと言はれたのであつた。斯うなつて見ると自分が建言して編成した歩兵隊は、洋式の訓練を施してあるだけに頗る有力なものとなり、君公から濫澤は先見の明があるなどと言はれたものであつた。然るに愈々出陣間際になつて、大阪に滞在中の家茂將軍が遽かに薨去され、長州征伐の議も沙汰止みとなつてしまつた。而も之れに引續いて形勢は一轉して、一橋慶喜公が宗家を相續して第十五代將軍になられる事となつたのである。

此の將軍家相續に就いては、私は反對の意見を持つて居つた事は前にも申述べた通りであつて、當時用人の黒川嘉兵衛は權勢が頓に衰へて、水戸出身の原市之進といふ人が用人頭になつて居つたので、此の原用人まで慶喜公の將軍家相續の不可である事を建白し、又慶喜公にも此の趣きを言上するところがあつたが、其の議は遂に容れられず、聽て一橋公が將軍家相續といふ事になつてしまつたのである。

四、近藤勇と壬生浪人

幕末當時、新撰組の隊長として勇名を轟かした近藤勇とは、私が陸軍奉行支配調役として京都に滞在して居る當時、二度ほど會つて話をした事がある。一般から非常に無鐵砲な向ふ見すの猪武者の様に誤解せられて居るけれども、會つて見ると存外濃厚な人物で、無鐵砲な趣きなどは更になく、よく物事の解る人であつた。私などより五六歳ばかりの年長者であつたが、親しい交りをした譯ではないから詳しい事は分らぬが、近藤勇は武州多摩郡の出身で、膽力が衆に優れて居り、劍術の達人であつた。幕末の頃、幕府が勇士を募つた際、土方歳三と共に之れに應じて、新撰組と稱する浪人團體に加はり、十四代將軍家茂公が朝廷の詔によつて上洛せられた時、其のお供をして京都に入つたのであるが、新撰組が解散せらるゝや、更に新撰組を組織して自ら其の隊長となり、京都守護職の手に屬して京都の警衛に當つて居つた。勿論幕臣といふではないが、所謂幕府公認の別働隊の様なものであつたのである。部下の人数は總體で二百人足らずであつたが、何れも死を見ること歸するが如しといふ様な生命知らずの浪人揃ひであつたし、而も幕府に直屬して居つたのであるから、近藤勇の勢力といふものは實に大したものであつた。之れが爲め京都警衛といふ重任をも

能く盡すことが出来たのである。此の新撰組は幕府公認の別働隊であつて、幕府直屬の武士ではなく、浪人の集まりのやうな觀を呈したのであつたが、其の秩序は立派に保たれ、他の一面に於いては勤王の志士などは随分苦しめられたものであつた。尤も近藤勇は決して無茶な事をする様な亂暴な人物ではなかつたが、薩摩の首鼠兩端を持つ様な態度を非常に嫌ひ、薩州人と云へば如何なる者でも之れを憎むやうな傾向があつて、薩州人とは俱に天を戴かざるの氣概を持つて居り、薩州人に對しては頗る過激の態度を取るのが常であつた。慶應四年(明治元年)慶喜公が大政を奉還し、大阪より江戸に遁れさせ給うた際、近藤勇は新撰組を解散して、公に従つて江戸に歸り、慶喜公に對して、頻りに擧兵を御勧めしたのであるが、慶喜公には恭順の御志が篤く、其の説に耳を傾けられなかつたので、遂に一旗擧げる機會を失ひ、大久保大和と變名し部下の兵百餘人を率ゐて甲州に走り、甲府の城に立籠つて官軍に抗しやうとしたが、甲府は既に開城して官軍の有に歸して居つたので、計畫に齟齬を來し、甲府附近に於いて激戦を交へたが衆寡敵せず敗走し、遂に捕へられて恨みを吞みつゝ斬に處せられたさうである。

近藤勇の新撰組には、前にも申す如く随分無鐵砲な亂暴者も加はつて居つたが、中にも壬生に居住する壬生浪人はよく亂暴を働き、時には良民を惱ます事も往々あつたので、一部の人人からは毛

虫の様に嫌はれて居つたが、私も或人を匿まつた爲めに壬生浪人に襲はれ、危ふく血を流さんとした事がある。年月は確に覚えて居らぬが、或る事情の爲めに壬生浪人から睨まれて居る氣の毒な人があつたので、其者を私の宿所に同伴して匿まつて置いた。處が此事が間もなく壬生浪人の耳に入り、是非共其の人間を當方に渡して呉れど人を以て交渉して來たが、武士の體面からしても先方に渡してやられる譯のものでないから、勿論キツパリ斷つた。すると壬生浪人共は非常に怒り出し、そんな腕力に訴へても奪ひ取つて見せると三人計り押しかけて來た。處が澁澤達ひをして、此の連中が突然澁澤喜作の宿所に押し掛けて行つたが、喜作の處に居らぬので人違ひをした事が分り、其足で直ぐ私の宿所に押し掛けて來たのである。丁度其頃喜作の處に氣の利いた下僕が居つて、浪人共の先廻りをして私の所に駆け付け、壬生浪人が必ず押し掛けて來るに相違ないから御用心なさいと注進して呉れたので、私も大決心をして多少の準備をなし、戸を堅く鎖して心待ちに待つてゐると、果して其夜の十時頃三人連れの壬生浪人がやつて來て裏口の方に廻り、頻りに戸を開けると、騒ぎ立てた。私は『夜中戸を開ける譯に行かぬから、用事があるなら戸外から申せ』と答へると、『匿つて居る人間を受取りに來たから速かに渡せ』と怒鳴り立てた。『そんな馬鹿な事は出來ぬ』と怒鳴り返へすと、戸外では戸を破つて踏み込んで奪ひ取ると立騒ぐ。私は『強ひて狼籍するに於

いては其分には差し置かぬから左様心得ろ』と叱りつけ、若し戸を破つて屋内に侵入したならば斬つて捨てようと覺悟の臍を固め、屋内と戸外で押問答をしてゐると、其處へ私の匿つてゐる男がやつて來て、『私の事から御迷惑をかけては相濟まぬから是非私を戸外に出して呉れ』と頻りに氣の毒がる。私は『そんな無茶な事をして私の好意を無にするものではない』と止めたが、隙を見て何時の間にか跣足で戸外に飛び出してしまつたので、私にして見れば驚に油揚をさらはれた様な氣持がせぬでもなかつた。壬生浪人共も一時は頗る殺氣立つてゐたが、目的の人間が自分から飛び出して自分共の手に入つたので、捨ぜりふを残しながら其男を引つ立て、行つたが、一時は却々の騒ぎで、どうしても血を見なければ納まりさうもない形勢であつた。此夜の事件は後日に至り隊長近藤勇の耳に入り、三人の壬生浪人は近藤から大に叱責されたさうであるが、近藤勇は斯ういふ風に條理の分つてゐる人物で、薩州人に對する例外を除いては、決して無鐵砲に亂暴を働く様な男ではなかつたのである。

六、遣佛使節隨行の準備

一、陸軍奉行支配調役となる

前に話したやうな譯で、一橋慶喜公は愈々將軍職を襲はれる事となつたが、私は此際程困つた事はない。從來倒さう／＼と心掛けて來た幕府であり、現在もそれを心掛けて居るのであるから、假令是迄仕へて來た君公が將軍になられたからとて、おめ／＼と幕府に仕へて其の祿を食むわけには行かぬ。さればとて如何に主義の爲めとは云ひながら、今更浪人になつて舊主に弓を引き、討幕の爲めに努力奔走するも情誼上憚らなければならぬ。一時はいつその事潔く切腹して相果てようかと思ひ詰めたのであるが、それでは徒らに犬死になる計りであつて、世間の物笑ひの種になるのみならず、餘りに意氣地のなき過ぎる仕業である。あれやそれやと考へ抜いた末、一時の耻辱や苦痛を忍んでも機會の到來するのを待つて、正しい道に進むのが本當の男子の取るべき道であると信じたので、暫く忍從して幕府に仕へる事にした。慶喜公が將軍職になられたに就いて、一橋の家來は其の身分に應じ、それ／＼幕府の役人になつたのであるが、私の任官されたのは陸軍奉行支

配調役といふものであつた。此の役は立派な士分ではあるけれども、將軍に直接お見得する資格はない、今迄は用事がある時は如何でもお目にかゝれたのであるが、今度は身分が身分であるから、お願ひしても面調して意見を申述べるといふ事は全く不可能である。従つて私は總てに對して不満で／＼堪へられなかつた。勤め向きなども是迄は非常に精動したのであるが、幕臣となつてからは職務に勉強する氣も起らず、毎日快々として樂しまざる日を送つて居つた。

此の陸軍奉行支配調役勤務中の事であるが、最初は大阪に居つて勤務して居つたが、其後新將軍が京都にお上りになり、私共も其のお供をして京都に上り、毎日吾々の詰所と定められてある陸軍奉行の詰所の傍らの屯所に出役して居つた。同役は凡そ十四五人居つて、森新次郎といふ人が組頭を勤めて居つたが、此の男は相當の才氣はあるが寧ろ小膽の人物であつた。従つて吾々も此の組頭に敬服するといふ事はなかつたが、或日町奉行から陸軍奉行に對して、國事犯の嫌疑ある大澤源次郎逮捕の掛合があり、陸軍奉行から組頭である森新次郎に其の命令が下つたので、森は大いに閉口したのである。嫌疑を受けた大澤源次郎といふのは御書院番士で、禁裏御警衛の爲め京都に滞留して居つたのであるが、其の勤向きが陸軍奉行の支配であつたので、町奉行が直接手を入れる事が出來ず、陸軍奉行の方に逮捕の事を交渉して來たのであつて、當然奉行の名代として輩下の組頭が出

役しなければならぬのである。然るに其の組頭は前に述べたやうな小膽者であり、且つ大澤には多人数の共謀者があつて、兵器銃砲の用意までも整うて居るといふ評判だったので、益々尻込みをする。陸軍奉行の役所でも評判が大袈裟なので、軽々しく手を下すのは危険だといふので、遂に此の大澤捕縛の件を新撰組に頼む事となつた。之れに依つて見ても、其頃の幕府が如何に怯懦であつたか察する事が出来やう。扱大澤の捕縛は新撰組に頼むにしても、陸軍奉行の支配下にある人間を捕縛するのに、全然新撰組に任せきりにする事も出来ない。誰か正使といふやうな格で新撰組に付き添つて行かねばならぬのであるが、其の人選に就いてもお互に譲り合つて、進んで此役を引受けようといふ者が無い。其の中に澁澤は根が浪人で死を恐れぬ男であるから、彼の男に命じたらよからうと發言するものがあり、到頭私が其の貧乏籤を引く事となつた。私はこんな役は買つて出ても引受けたのであるが、新參のハヤ／＼でもあり、不斷の勤向きに對しても厭氣がさして居る際であるから、進んで引受けようとは言はなかつたのである。けれどもこんな役を押付けられるのは願つたり叶つたりであるから、早速引受けて萬事の手筈を打合せ、早速京都町奉行の屋敷に行つて新撰組の隊長近藤勇と面會し、手配に就いて種々打合せをなした。其際近藤勇は自身で出張するところであるが、他に止むを得ない所用がある爲め、土方歳三を私の代理として遣はす事にするといふ事

で、土方外五六人の隊士を遣はす事になつた。其頃大澤は紫野の大徳寺の境内に住んで居つたが、其の在否を確かめねばならぬので、慶應二年四月十四日の午後、探偵を放つて大澤の動靜を窺はせると、大澤は外出し寓居に歸つて居らぬ事が確かめられた。それでは夜分に出掛けた方が可からうといふので、私共の一隊は途中の小さな飲食店で晩食をなし、間斷なく探偵を放ち大澤の歸宅するのを監視させた。程なく大澤が歸宅したといふ報知に接したので、早速勢揃ひをなして捕縛に向つたが其の途中、大澤が劍道に熟達して居るといふところから、私が陸軍奉行の申渡しを傳へてから大澤を縛るか、有無を言はさず大澤を縛つてから私が申渡しをするかに就いて、私と新撰組の人々との間に意見を異にした。新撰組の人々の主張するところは、吾々は大澤逮捕の爲めに來たのであるが實は澁澤の護衛も一つの役目である。其の澁澤に若し萬一間違ひでもあつては、吾々が護衛に來た甲斐なく、又單に護衛の意味を失ふ計りでなく、新撰組の名折れにもなる。だから萬全の策として先づ吾々が直ちに大澤を縛り上げるから、其上で正式の申渡しをされたいと言ふのである。先方の言ふ事も一理はあるが、併しそれでは私の面目にかゝはる、私の主張するところは、成程貴殿方の言はるゝところは一應尤も千萬であるが、申渡しをせぬ中は大澤を罪人扱ひにする事が出来ない、不意に縛り上げるなどいふ事は甚だ卑怯千萬な仕打ちである。公の事は正々堂々としなければ

ならぬものである。殊に云は、自分が正使であるから、自分が奉行の代理として大澤に會ふ理由を述べて『御不審の廉があるから捕縛して糺問する故左様心得ろ』と申渡してから、其の以後は貴君等にお任せする。大澤が劍道に達してゐると言はれるが、拙者とても劍術は心得て居る。若し大澤が無謀の振舞に出で、突然斬つて掛かるやうな事があつたら、拙者も其の積りで相手になるから決して御心配下さるなどいふのである。尤も此の議論といふのは肩胛張つての理窟張つた話でなく、途々歩きながらの打合せであるが、結局正しい道理に従つて私の意見通り行ふ事となり、新撰組の人々も『澁澤君大丈夫かな』などと戯談半分に肩を叩いて笑つたりした。

聽て紫野大徳寺に到ると警護の面々を門前に待たせて置き、私と土方歳三と兩人が大澤の宅を訪れて『大澤は居るか』と尋ねると、世間の評判程でもなく、殆んど警戒の氣振りも見えず、本人は既に寝て居つたものと見え寢巻を着た儘で眠むさうな顔をして出て來た。私は『陸軍奉行の代理である』と申渡し、『國事犯の嫌疑で捕縛する』といふ命令を傳へたが、別に手向ひする模様もなかつたので、先づ兩刀を取上げ續いて戸外に待つて居つた新撰組の連中が、ドヤ／＼と乗り込んで來て難なく大澤を捕縛した。之れで自分の職責は済んだので、大澤を新撰組の手に渡し、新撰組の手から町奉行に引渡して、此の一件は案ずる程の事もなく無事に落着した。其時の奉行は溝口伊勢守と

いふ人であつたが、物騒な世間だつただけに斯かる些事にも深く心配し、私の復命するのを寢すに待つて居つた。其處へ私が訪問して大澤捕縛の次第を逐一申述べたところ、奉行も大層喜んで『流石は澁澤である！』と言はれ、當座の褒美として羅紗の羽織を下された。

二、巴里留學の恩命と其の事情

忘れもしない慶應二年十一月二十九日（西曆一八六七年一月五日）の事であつた、原市之進から『急に相談致したい事があるから即刻來て呉れるやうに……』といふ使者が來た。何事であるかと不審を抱きながら、兎も角早速行つて見ると、それは意外千萬にも、私に『民部公子のお供をしてフランスに行つて呉れぬか？』といふ、棚から牡丹餅のやうな、私にとつては此上もない結構な相談だつたのである。私の其時の嬉しさといふものは、實際何とも譬へやうのないものだつた。處で私に斯うした命令が下るに至つたに就いては、實は慶喜公の御聲掛かりがあつた爲めであつた事が後で判つた。

西曆一八六八年（慶應三年）フランスに萬國博覽會が開かれるに就いて、各國から帝王や代表者が參列される事となつて居るが、日本も通商條約を結んで居る友邦であるから、此際代表使節を派遣

されるのが、國際的儀禮でもあり、且つ兩國の國交を益々親善ならしむる道であること、日本駐在の佛國公使が幕府に建言した。それで幕府では種々評議した結果、國際關係上計りでなく、此際先進



徳川氏の子孫

民部公子(四十年)自署

各國の狀態を視察して置くが宜しからうといふ事になつて、水戸の徳川民部公子照武を御遣はしに成る事に決定した。民部公子は慶喜將軍の御令弟であるが、少年で在らせられる故、博覽會の使節の役目が濟むと、其儘佛國に留め學問を修業せしめようといふ慶喜公の思召しであつたのである。尤も遣佛使節としての民部公子には、外國奉行其他も隨行して行くのであるが、留學中は諸事萬端手輕にしなければならぬといふので、隨行の人数も出来るだけ切詰める事となつた。併しながら從來民部公子に御附き申してゐた水戸の連中が、公子を一人で外國に遣はすと云ふ事を承知せず、己むを得ず七人だけ召連れる事となつたのである。處で此の人々は何れも外國人を夷狄と稱してゐる

頑固な連中で、素より彼地に於いて大に西洋の學問を修めようなどいふ進歩した思想を持つてゐない。民部公子の御傅役には、幕臣の山高石見守が命ぜられてゐるけれども、他の隨行員が此の様な頑固者流であるから頗る心許ない、誰かもつと適當な者が居らぬだらうかといふ事になつて、人選の末將軍家から

『篤太夫(濫澤子爵の當時の通稱)ならば、人間も確かりして居るし、將來の望みもある男であるから、彼男ならば適任であると思ふ』

といふ御内意を原市之進まで仰せられたのであつた。其時原氏は此の御沙汰に接して『至極適任に存ぜられます』と御受けして引下つたのであるが、濫澤は元來が尊王攘夷論者であるといふ事を察して居つた原氏は、濫澤が果して快く承諾するかどうかと、頗る懸念されたといふ事である。且つ將軍家からの御内意であると申傳へたならば、結局は承諾をすだらうけれども、それにしても一と文句も二と文句もある事と内心覺悟して居つたらしい。併し私の身にして見れば、異議を挟むどころか願うでもない幸福である。全く天來の福音であつたのである。何故かといふに、前にも述べた如く、私は元來勤王討幕論者であつて、一時節を屈して一橋家に仕官はしたものの、最初の志を全然棄てた譯ではない。従つて慶喜公が將軍職を繼承さるゝに就いては大に反對であつた。そ

れで誠意を披瀝して將軍職を襲はるゝ事の不得策である事を建議したのであるが、慶喜公には別に深謀遠慮があられたので、私の建議は容れられず、慶喜公は遂に將軍となられ、其の臣下である私も、最初顛覆を企てた事さへある幕府の臣下に列し、陸軍奉行支配調役になつたのである。其時の失望落膽、不平不満は實に言語に絶し、毎日煩悶懊惱の日を送り、眞に進退に窮したるの餘り、いつそのこと切腹して相果てようかとまで思ひ詰めたものである。其處へ今度の命令であるから、旨亀に浮木と云はうか、枯木に花と云はうか、全く救ひの神の福音であつて、異議などのある可き筈がない。それで私は飛び立つ程の嬉しさを感じながら、直ちに御請けをし『どのやうな艱難も決して厭ひませぬから、是非御遣はしを御願ひ致します』と、誠意を面に顯はして答へたのであつた。原市之進は私が豫期に反して一議にも及ばず、其場で直ちに快諾したので、意外に思ひつゝも非常に満足し、『實はごうあらうかと心配して居つた』と述懐し、出帆までには一月計りしかないので、其間に手落なく萬端の仕度をするやうにと注意され、尙ほ種々の打合せをして辭去した。

——かくて公使の任命も定めり、博覽會に參して出品すべしとの議も決せり、この機を以て、幕府は此國の實際主權の存するところなるを公示して、其祖宗以來の基業を固くせんとの方略を回ら

し、將軍の令弟、徳川民部大輔照武を以て清水家の相續とし、これを日本大君の名代として、先博覽會議に參せしめ、現に各國帝王と親しく交を結び、猶締約各國をも巡聘せしめらるべしとの事を以て、十二月廿日を以て、其沙汰を行れたり。これ蓋し佛國公使ロセスが内々に勧めませしものと知らる、而してその猶幼年におはせしを以て、日付、山高石見守(今信離)を以て、これが傳に任せられ、且本官を以て公使の職務を監すべきを命ぜられたり。(田邊太一著、幕末外交談)

三、滑稽至極な洋行の諸準備

何分突然の事であるし、初めて異國に旅立つ事であるから、其後の一ヶ月は打合せやら準備やらに忙殺された。外國奉行の向山隼人正は江戸から直ちに立出する豫定になつて居つたが、御傳役の山高石見守が京都に上洛されたので萬事相談をなし、又水戸から御附の人々も京都に滞在して居つたので、是等の人々とも引合はされた。一方、歸郷する餘裕がないので、郷里の父晩香へ此旨を申し送ると共に、死生を共に誓つた澁澤喜作が恰も江戸に下向中だったので、此度の事柄を詳細に認めて急狀を出し、衣類道具の取片付や借家の始末などをなし、傍ら外國行の支度に取り掛つたのである。

洋行の準備と云つても、今日では地方の人が東京見物に出かける程度のもので、頗る手輕であるが、何しろ當時は我國には汽車汽船などない時代で、伊勢参りや金比羅参りに、水盃で旅立つといふ風な開けない頃の事であるから、さう手輕には参らぬ。それに新歸朝者といふやうな人は勿論居らぬし、彼の國の事情に精通した人も居らぬか



御傳役山高山石見守

外に西洋に行つたならば必要だらうと思つたので、曾て大久保源藏が横濱で買ひ求めて來たといふ燕尾服の中古を一着譲り受けた。處が其の燕尾服たるや、後日になつて考へると、ホテルのボーイでも着たものらしく、而もズボンもチョッキも揃つて居らぬ上衣計りを手に入れて、得々としてゐたのであるから、今から思ふと全く笑止千萬だ。それに今日ではどんな貧乏な腰辨でも履かないや

ら、一向に様子が知れず、又指圖をする人もないの
で僅か計りの耳學問や何かに基いて、自分勝手な旅
装を整へたのであつたが、今から思へば實に滑稽千
萬なものであつた。勿論、依然たる大鬚に大小を手
挟んで行かうと云ふのであるから、禮装としては黒
羽二重の小袖羽織に緞子の義經袴一着を新調し、此

うな靴を買ひ求めて、西洋へ行つてから之れを用ゐようとしてゐたのであるから、盲目蛇に怖ぢずとも云ふのが適當であらう。

兎角してゐる中に期日が切迫し、民部公子の一行が京都を出發したのは師走も押詰つた二十九日



全權向山準人正

で、浪花から長鯨丸に乗船して横濱に向つたから、
慶應三年の元旦は船中で迎へた譯である。斯くて横
濱に上陸したのは正月四日頃で、五六日同地に滞在
して更に諸般の仕度を整へ、且つ打合せなどをした
が、此間に御勘定奉行小栗上野介、外國奉行川勝近
江守などといふ人々にも面會し、全權として民部公
子と同行する外國奉行向山準人正とも引合はされ、

又語學の教師であつた佛人のミランといふ人に招待されて午餐の饗應を受けたが、此時生れて初めて洋食といふものを食べた。其時の料理はどんな献立であつたか忘れたが、食ひ方が分らないので大いに閉口した事だけは今でも記憶に残つてゐる。

四、一行の顔觸と郷里の評判

扱民部公子の一行は、總勢二十八人計りであつたが、之れは詰まり博覽會の用務の爲めに赴く外國奉行が同行した爲めに、比較的大勢になつたのであつて、其の顔觸れの主なるものを擧げると、外國奉行向山隼人正、同組頭田邊太一（運舟）、同調役杉浦露山其他の外國方及び公子の御傳役山高石見守、水戸からの御附人たる小姓頭取菊地平八郎を始めとして井阪泉太郎、加地權三郎、三輪端藏大井六郎左衛門、服部潤次郎、皆川某等七人其他であつた。

此の當時に於ける郷里の評判は世相の一斑を察するに足る故、左に之れを抄録する。（編者）

——一橋の公には、このたび終に將軍にならせ給ひければ、大人（澁澤子）も成一郎（澁澤喜作）ぬしも、やがてともに召し連れられ給ひて、おのづから幕府の臣となり給ふことゝはなりぬ。かく世のさまの變り行くにつけて、御身のなりゆき、はじめの御志とはますますたがひける事を深くかこたせ給ひ、むしろふたゝび浪人して、もとの志をとげばやなごおぼしつゞけられ、おのづからこもりがちにて暮し給ふ折しも、ゆくりなくも民部大輔の君、佛蘭西に行かせ給ふにしたがひ

參らすべきよしの仰せごとをうけ給ひければ、萬里の波濤をしのがせ給ふ事をもいかでか辭せさせ給ふべき、なか／＼によるこばせ給ひてけれど、御旅立の程のいと俄にて、父母の君に御別れ告げさせ給ふ暇だになく、慶應三年正月十一日、横濱の港より船出し給ひしは、いかに残り惜しうやおぼしけん。まして郷里に残り居る御人々の御心はいかなりけん。鬼の住める島にむかはせ給ひけりと聞よりもおそろしく、佛蘭西でふ國は日本の西にあたりとか、心あてにながむる空は、今よりもかはらぬ月の入る方なれど、幾千里ともかぎりなき海のあなたと聞くからに、袖にも浪のたえずかゝりて、こがれわたらせ給ひつゝ、今は此の世にてはふたゝびまみゆる事はかなふまじと思ひあきらめ給ひけるも、其かみの世のさまにては、誠に御理りところ思ひやられ奉れ。（中略）海山遠く立ちへだたる其かなしみばかりならば、忍ぶにも猶安からめど、大人を始め伯父君たちの尊王攘夷の説をとなへて、人々をはげまし給ひけるは、此時より僅に四年の前なりければ、さきに一橋の公に仕へ給ひける時だにも、さすがに命は惜しきなめり、なごとりふ言云ふ者もありけりとかきくに、ましてこたびは誰もいみ嫌へる外つ國に行かせ給ふ事なれば、其理を知るよしなく、ひたすらあやしみそしりけるが中に、近きほとりなる親族に、かねてより祖父君とも大人とも志合はずして、中らひよからぬがありけるが、さま／＼のあらぬとりぎたをさへ添へ

て、さかしら言云ひふらすを傳へ聞せ給ひつ、祖母君も母君も、云ひとき給はんにも言の葉だになき心地して、いと口惜しう思ひわづらひ給ひけるが、尾高の伯父君來給ふごとの給ひけるは、篤太夫ぬしの前に仕官せられつるは、たゞに身の危ふさに隠れがもとめんが爲のわざならめや、一橋の公は父祖の御志を繼ぎて朝廷を尊び給ふこと深くおはしませば、この君をたすけ奉りて共に皇國につくさばやとの心にこそ、さればいかで初めの志をひるがへしたりと云ふべき。又外つ國をえびすと云ひて、いたくいみ嫌ひけるは、我を始め誰もまだ世のさまをよく知らず、ひたすら心狭かりける頃の思ひひがめなりけり、外つ國人とて、あながちに皇國にあだせんとするにはあらず、交り結びてかたみになりはひの便りをえんと求むるにこそ。さるをひたすら拒み退くる理りやある、ことに彼の國どもは萬のわざ開け進みたりとか聞ゆれば、かの國に行きてその國さまをつぶさに見あきらめ、その進みたるわざを習ひおぼえんは、此後深く交りかはさん折は更なり、もし仇として戦ふ事あらん時にも、こよなき御國の助けならずや。大鵬の心知らで罵りさわぐむら雀のいかにかしましとも、そは心になかけ給ひそと、常に云ひさとし給ふに、御胸のくもり晴れ給ひけりとぞ。(はよその落葉)

七、其頃の國內事情

一、薩長の内状を探る

一橋家に仕官してからの來歴に就いては、前に其の概略を申述べた如くであるが、更に其の當時に於ける二三の出來事や見聞についてお話する事としよう。

私が一橋家の家來となつたのは、元治元年の二月で、丁度數へ年で二十五歳の春であるが、御用談所下役として勤仕してゐる中に二箇月ばかりは夢の間に過ぎた。處が、圖らずも私は攝海防禦砲台築造御用掛の折田要藏といふ築城學者の内弟子となつて、築城學を修業する事となり、大阪に赴くことになつた。それは確か同年の四月初め頃と記憶するが、表面は築城學の修業であるけれども其の實は一種の間者の役目を仰せ付かつたのである。其の理由といふのは、元來、此の折田要藏といふは薩摩の藩士であつて、築城の事に精通して居るといふので、幕府が百人扶持を給して砲台御用掛を命じたのであるが、當時徳川幕府に取つて一敵國をなして居つたのは長州と薩州の二藩で、此の兩藩に對しては幕府に於いても常に注意を怠らなかつたのであるが、一橋家としても此の兩藩

の内幕をよく探つて置かなければ、京都守衛總督の重任を完うすることが出来ない。幸ひ折田は薩摩藩士であり、幕府から扶持せらるゝ様になつたものゝ、矢張り薩摩の人々との往復が多いだらうから、折田の處に弟子入りしたならば、自然薩摩に於ける空氣も判るだらうと云ふので、私が謂はば間諜の役目を買つて出て、扱こそ築城學の修業といふ名目で、内弟子に住み込む事となつたのである。折田の塾生になるに就いても、最初は用人の平岡圓四郎氏が一橋家から表向に頼まうかといふ話もあつたが、それでは物事が重苦しくなり、且つ疑惑を招く原因となつて要心でもされては却つて目的を達する事が出来ぬから、私の知己で折田と懇切の間柄の者がある故、其人から折田に頼んで貰ふ事とし、尙ほ一橋家から『澁澤は當家の家來であるが、築城學を修業したいと願ひ出たので許可したから、懸念なく教授をして呉れる様に……』と、他事なくお聲掛かりをして貰つた様な次第であつた。

此の折田要藏といふ人は實際には何れ程の兵學者であつたか分らぬが、辯舌も巧みであつたし、而も海防の事に就いては兎も角全國に亙つて調査をして居り、嘗に攝海防禦の事ばかりでなく、必要な港灣は悉く暗んじて居り、其の防備に就いても具體的の意見を有して居つたので、幕府に登用せられて御台場築造の指圖役となつたのであるが、大阪土佐堀の松屋といふ家に假寓し、薩摩では

それ程よい身分の人ではないけれども、平たく申せば餘程威張りたがるといふ様な風があつた人で幕府の御用掛となつてからは、宿所の玄關に紫の幕を張り、『攝海防禦御台場築造御用掛折田要藏』と筆太に書いた看板を掲げて尊大振つてゐたものである。私は其の内弟子として住み込んだ譯であるが、築城學の修業と云つても、今日の様に秩序立つた教授をする譯でなく、専ら實地の仕事に就いて自得し、不審の點を聞き訊す位のものであつたが、私は内弟子であつたから、下繪圖を作らされたり、書類の謄寫をさせられたりした。處が、私はこれまで繪圖を引く稽古などをした事がないから、線が屈曲したり、墨色に濃淡が出来たりして思ふ様に出来ず、書類の謄寫は一と通り出来たけれども、圖面の方は反古ばかり拵へるので、よく叱言を言はれたものである。併し私にとつて一つ仕合せな事があつた。それは折田の従者は總て純粹の鹿兒島言葉で他國人とは言葉が通ぜぬが、私は鹿兒島辯も大抵は諒解が出来、江戸言葉も分るので、使者の役目は大抵私に命ぜられた事であつて、大阪町奉行とか、勘定奉行とか、御目附などへの用向に就いては、折田が直接出向く場合の外は、殆んど私が其の應接の役目を引受けて謹直に働いたので、相當に信用を得る事が出来た。折田の宿所には、薩摩の連中では三島通庸、河村純義の兩氏を始めとし、海江田信義、奈良原繁、内田正風、中原直助、高崎五六等の人々がよく遊びに來たので、此の人々と相識の間柄となつたが、

殊に三島、河村の兩氏は折田の添役のやうな任務を帯びて松屋の隣りに下宿して居つたから、此の兩氏とは特に懇親を結んだ。斯うして居る中に、折田から島津侯に建言した事や、西郷隆盛に意見書を提出した事なども探り得たし、薩摩内の空氣も大體察知する事が出来たから、其の都度内密に平岡氏の處まで報告したが、一ヶ月ばかり居る中に間者としての役目は大抵果たし得たので、之れ以上大阪に止まる必要がなからうと平岡氏の許まで通ずると、それでは引揚げたらよからうと云ふので、『當所に於いて要用が出来たに就いて、修業半ばではあるが京都に立ち戻るやうにせよ』といふ公式の呼戻状が来て、五月の初旬に再び一橋家に立ち歸つたのであつた。京都に戻つてから、私は平岡氏まで更めて詳細に報告をなし、尙ほ一橋慶喜公の御内意では、『折田の人物が果して傑出して居る様だつたら、一廉の役に立つだらうから一橋家に召抱へてもよい』といふ事であつたから私は折田の人物に就いて親しく觀察した通りを少しも飾らず申述べて、彼が決して非凡の人物ではないことや、西郷隆盛とは時々文通して居るけれども、其の言は信ぜられて居らぬ模様であることや、日常の舉動や幾多の實例を擧げて、折田は辯舌ほどには實力の伴はぬ人であると推斷する旨を話したところが、平岡氏は『それでよく事情が分つた。短かい期間によく之程の役目を果たして御苦勞であつた』と言つて私の勞を稱はれたが、此の役目を首尾よく勤めた爲めに、私は以前より一

層信任せられる様になつたのである。

二、三島通庸蠻勇を揮ふ

話は少しく前後するが、私が大阪を引揚げる際に、一つの滑稽な挿話がある。丁度、私が一橋家からの命令に接して、愈々京都に歸るといふ前の晩であるから、確か五月の七日か八日頃と記憶するが、日頃親しく交つてゐた河村純義と三島通庸の兩氏がやつて来て、『送別の爲め一献酌み交したいから是非同行し給へ』と勧めるので、師匠に當る折田の許しを得て雑魚場の料理屋に赴き、三人鼎座して痛飲し、且つ食ひ且つ歌ひ、何れも熟酔したが、三島通庸は餘り酔つたからと一と足さきに戻り、河村と私とはそれから又暫らく飲んで料理屋を出で、途中ブラ／＼語り合ひながら宿所に歸つたのは夜の十一時頃であつたが、挨拶の爲め折田の部屋に行くと、今まで一杯やつて居つたらしく、而も何か亂暴でもしたのか、盃や皿小鉢などが微塵に打ち割れて座敷中に散亂し、實に盃盤狼籍たる光景を呈し、殊に今まで折田のお酌でもして居つたらしい松屋の娘が眉間を傷けられて鉢巻をして居り、折田は折田で其の取亂れた座敷に呆然たる有様で坐つてゐるので、私も此場の光景に折角飲んだ酒も醒める思ひがした。何れ私の留守中に何かの出来事があつたらうと察したので、

「先生、これは一體どうしたのですか？」と尋ねると、折田は急に私の方に向き直つて満面に怒氣を含みながら、言葉も荒々しく

「今三島が亂醉して來て此通りの亂暴を働いて行つた、實に怪しからぬ。聞けば貴公が京都に歸るに就いて一緒に飲んだといふ事であるが、定めし其の席上に於いて拙者の事を罵詈譎した爲めに此處へ暴れ込んだのであらうと察する。シテ見れば貴公とても三島と同腹と見做されても辯解の辭があるまい」

と、酷しく叱責したものである。私は全く寢耳に水であるが、何しろ二十五の血氣盛りではあるし、殊に酒の機嫌も手傳つて居るので、身に覺えない言懸りをされて怒氣心頭に發した。それで事と品によつては師匠と雖も其儘には置かぬ積りで、折田の顔をグツと睨みつけ、膝を立て直し、「之れは實に奇怪千萬な事を承はる。私は先生を師として教へを受けて居る身分であつて、魯鈍不肖の性質ではあるが、師弟の道だけは心得て居る積りで御座る。従つて假令如何やうな事があつても、陰で先生を誹謗する様な、そんな卑しい心は微塵も持つて居りませぬ。唯今、先生は私を三島と同腹であると言はれたが、それは先生が推量せられたのか、それとも三島が左様な事を申したのか、其點をハッキリと御聞き致し度いと存する」

と詰め寄つた。すると折田は「それは三島自身が申した」と言下に答へたので、私は

「實に思ひも寄らぬ事である。若し三島がそんな事を申したなら、恐らく自分の舉動を人に藉りて、罪の幾分を轉嫁しようとする卑怯千萬な振舞であるから、其分には捨て置けぬ。三島を此處へ連れて來て是非曲直を明かにした上、刺殺して仕舞はねばならぬ」

と言ひ捨てたまゝ、血相變へて立ち上り、追ッ取刀で三島の宿つて居る隣家へ駈けつけた。そして宿の者に「三島は居るか？」と聞くと、「二階に寢て居る」と答へたので殆んど夢中の有様で二階に飛び上り、豫て案内知つたる三島の寢室に躍り込まうとすると、同宿の河村が飛び出して來て私を抱き止め、「血相變へて何をするのだ」と言ふから、「三島に意趣がある。彼奴は實に怪しからぬ男だから、連れて行つて果し合ひをするのだ」と語氣荒く答へて、抱き止めた手を離さうとしたが、河村は「馬鹿な真似をするな」と其の手を離さない。斯うして兩人で押し合つてゐる處へ、折田も心配だつたと見え従者を遣はして、「話があるから兎も角一旦松屋に戻つて呉れ」と強ひて引戻さうとする。三島は酔つて寢たのであるから、此の騒ぎを少しも知らないで白河夜舟である。私は暫らく押問答をしたが、當の本人は寢て居るし、河村や其他を相手にして喧嘩をする譯にも行かぬから不承々々で使の者と一緒に松屋に戻つた。すると折田は先刻の立腹にも似ず至つて穩かな口調で、

「先程は失言をして誠に濟まなかつた。貴公が立腹されるのも尤も千萬の事であるが、實は先刻三島が言つたと申したのは、一旦の怒りに乗じて遂ひ覺えず發したのであつて、三島はそんな事は言はなかつた。たゞ貴公の送別會で酔つた上こんな亂暴を働いたものだから、少々疑惑心を抱いてゐた處へ貴公から突ツ込まれたので、言はゞ騎虎の勢ひで出た失言であつて、冷靜に立ち返ると貴公に對しては少しも疑念を有たない。今更めて先程の失言を謝するから、それで納得して呉れる様に……」

と陳辯された。私は未だそれでも腹の蟲が納まらなかつたが、假りにも師匠と仰ぐ人に向つて、その上怒る譯には行かない。『先生がさう仰せられると、私としては別に彼是申す譯ではありませぬが、それでは少しも疑念が御座いますまいな。痛くもない腹を探られるのは私として不快千萬ですから、三島を前に置いて是非曲直を明かにした方が宜しいと存じますが……』と申すと、『イヤ、決して貴公に對して疑念はない。拙者の失言から貴公が立腹して三島と爭論されては却つて困る』と言ふものだから、『そんなら宜しう御座います』と承知をしたので、此の件は幸ひ無事に濟んだが、此の一事に見ても、折田といふ人は餘り傑い人物でないと思つた。

尙ほ何ういふ譯で三島が折田の處に暴れ込んだかと云ふに、之れには曰く因縁がある。折田、河

村、三島は何れも同藩士であるが、折田は元來氣位が高く、殿様然と尊大に構へて威張りたがる方であつたが、河村や三島は全く之れと反對の志士氣質であつたから、役儀上の關係で頻りに交際して居つたけれども、意氣相投するといふ様な間柄ではなかつた。それに其頃折田の宿所たる松屋に一人娘が居つたが、折田が日頃其の娘を寵愛してゐるのを河村も三島も知つて居り、常にそれを心憎く思つてゐた様子であつた。處が私の送別會で飲んだ揚句、三島通庸が酔ひに乗じて折田の座敷に押しかけ、娘を傍に置いて一杯やつてゐる姿を見てムラ／＼となり、薩摩武士の面穢しだと、酒氣も手傳つて亂暴狼籍を働いたものらしかつた。折田も此の一件に就いては大いに閉口したらしいが、可愛さうに宿所の娘は飛んだ側杖を喰つたものである。後日、三島通庸や河村純義などと會つた際に、よく笑ひ話に此時の事が出たものであつた。

三、堂々と岡部の陣屋前を通行

關東人選御用係を命ぜられて私と同姓喜作とが關東に下向したのは、大阪から京都に引揚げてから一ヶ月ばかり経つた後であるから、六月初の頃だつたと記憶する。江戸では大いに奔走したけれども、曩に述べた様な次第で水戸の騒動の爲め知合の有志家は大抵其の方に行つてゐた爲め、豫期

した様な好結果を見る事が出来なかつたが、兎も角五十人近くの希望者を集める事が出来たから、此の人々を同道して中山道から京都に戻る事とした。中山道を通るとすれば、舊領主の陣屋を置かれてある岡部に掛かる事となるが、岡部からは故郷が直ぐ側であるから、久々で故郷にも立寄つて父母妻子にも面會したいと考へないでもなかつた。それで使をやつた處が、岡部の陣屋の役人が、私共を謀反人の如く思つて睨んでゐるといふ事であつたから、危険な事があつてはならぬと思つて郷里に立寄る事は見合せた。又岡部の陣屋では、吾々が中山道を京都に上るといふ事を探知し、澁澤は元來領内の百姓であるから、途中で差留めて召捕つて仕舞ふといふので、其の手配をしたといふ内報があつたが、元は領分内の百姓であつたにしろ、今日は身分こそ低いが一橋家の家來であるし、殊に重任を帯びて下向した戻り途なのであるから、若し陣屋の役人が理不盡な振舞をしたならば一刀兩斷に斬り拂つて通行しようといふ意氣込みで矢張り中山道を選び、九月初旬に五十人ばかりの人数を同伴して堂々と上洛の途に就いた。聽て一行は岡部の陣屋の前に差掛つたが、陣屋の役人は一行の威勢に恐れをなしたものが別に手出しもせず、無事に吾々を通した。尤も岡部の村はづれの處に陣屋の役人が二人ばかり来て、此の御同勢の中に當領分の百姓が兩人加はつて居る筈であるから、意見をして村方に戻る様に取計らはれ度いと同行の人に頼んだが、之れは領主に對するホ

ンの申譯的のものらしく、素より當方に於いてはそんな事を受けつける筈はないから、「何れ御依頼の趣きは申傳へる事にしませう」と挨拶した位のもので、大手を振つて通行したのであつた。吾々の一行は此様に堂々と舊領地を通行したのであるが、流石に留守宅に對する後難を懸念されたので、兩親や妻子に公然と面會する事を憚り、父晩香や妻子とは途中に於いて密かに面會したのであつた。

——其年の夏五月の頃、大人(澁澤子爵)と成一郎ぬし(澁澤喜作)とは、一橋家の公用にて東に下り給ひ、長七郎君(尾高東寧)を獄より早くひ出さんとてさまざま力を盡し給ひければ、有司の人々もさすがに其情にやうごかさされけん。ゆるしこそはせざりしかど、いとからかりしとりあつかひも、これよりやう／＼ゆるるびもて行きけり。其秋九月なかば頃、かへさの道は中山道に依らせ給ひければ、家にも立寄せ給ふべかりけるに、さまざまの妨げありて、それすらかなはせ給はず、わづかに宿根なる親族の家に立よらせ給ひけり。これより先に祖父君(晩香)は妻沼と云ふ所に行きましてひそかに大人に對面させ給ひければ、このたびは母君(千代子)に妾(歌子)をいだけせ、叔母君(貞子)をもともに、宿根なる親族がりやらせ給ひけり。此折の御對面は只東の間

なりければ、かたみに恙無かりける面で見かはし給ひけるがせめての心やりにて、うさをかたらひなぐさめ給ふ暇もなく、やがて立別れ給ひけり。この時岡部なる陣屋の役人ども、大人等が一橋家に仕ふることを心よからず思ひて、しひてさへぎり留めまくせしかど、事成らざりける心やりに、腹あしうも逢ひにまかりつる家族をとらへて耻見すべしなど云ふ由ほの聞えければ、其あけの朝まだいと暗きに、母君はわらはをかきいただき、叔母君と共に畔とも云はず、畑ともいはずひた走りにはしりて家に歸らせ給ひけりとぞ。(はゞその落葉)

尙ほ此度の關東下向に際しては、豫て同志の一人である従兄尾高長七郎(東寧)等が、傳馬町の牢屋に繋がれて居るので、ごうかして救ひ出したいと思ひ、其筋に對して種々運動して見たけれども仲々赦免にならない。それで豫て京都を出發するに先だつて、一橋家の用人で平岡氏に次いで權力のあつた黒川嘉兵衛氏に頼んで、其頃幕府の御勘定組頭を勤めて居つた小田又藏(鐵齋)氏に宛て添書を貰つて置いたので、之れを携へて小田鐵齋氏に面會し、其の盡力によつて救ひ出さうとしたけれども、小田氏の骨折りも幕府當路者を動かす事が出来なかつたのは遺憾千萬であつた。併し幾分か此の運動の利目とも云ふべきは、それ以來牢内に於ける待遇が幾分丁寧になつた事で、私共は何

れ時節を待つ事として、せめて待遇の良くなつたのに我慢するより外はなかつたのである。

——小田鐵齋翁は幕臣でありながら水戸派の勤王家で、藤田東湖先生なども親交があつた。虚名を博さなかつた爲めに表面には現はれなかつたけれども餘程優れた人物であつたらしく、現に東湖先生から鐵齋翁に宛てた信書には、常に小田鐵齋先生と敬稱を用ゐてある程である。東湖先生は斯くの如き人物が幕府に重用せられぬのを慨嘆し、曾て其の作詩中に「閑却天下有用人」と詠じて居る。幕府に重用せられなかつたのは、或ひは勤王家だつた爲めかも知れぬが、確に幕末時代に於ける隠れたる人材であつた。(植村澄三郎氏談)

四、蛤門事變と天狗組の騒動

郷里を脱走して京都へ上る際や、一橋家に仕官するに當つて一方ならぬ恩顧を蒙り、仕官後は引續き其の引立を受けた恩人平岡圓四郎氏が、私共が關東に下向中、兎及に仆れた事は前に申述べたが、此外、吾々が京都を留守にしてゐた間に、容易ならぬ騒動があつた、それは即ち蛤門事變である。元治の變に就いては歴史に明かであるから茲には詳しく述べぬが、極く大體の經過を申すと、

之れより先き薩長土の三藩が相前後して京都警衛の命を拜し、攘夷論者の氣勢大いに揚がつたのであるが、其後朝議が俄かに變じ、前年の九月頃長州藩の禁衛を解いて引拂ひを命ずると同時に、鷹司關白を初めとし勤王派の公卿殿上人等は悉く勅勘を蒙り、官位を褫はれた。三條實美、三條西季知、壬生基修、澤宣嘉、四條隆謨、東久世通禧、錦小路頼徳の七卿が長州藩をされたのは此の當時の事である。其後、長州藩の老臣から『奉勅始末』といふ建白書を朝廷に差出し、長州藩が下關海峡に於いて外國船を砲撃したのは決して一藩の獨斷ではなく、全く聖旨を奉じて攘夷を決行せんとしたものであるから、勅勘を蒙るべき筈がないと、其の赦免を哀訴嘆願したのであるが、此の嘆願は遂に容れられなかつた。それで翌元治元年の秋に嘆願の筋があると稱して、長州藩士多数が洛中に進撃したので、守衛總督の一橋家は勿論、會津、桑名、彦根、薩摩等の諸藩が之れに應戦し、遂に長州勢は戦ひに敗れて本國に逃げ歸つた。之れが、蛤門合戦の起るに至つた大略である。幕府は勢ひに乗じて長州征伐を行ふ事となつたが、長州藩主毛利敬親が首謀者である老臣益田等三人を斬つて其罪を謝したので事件は一と先づ治まつた。

私共が京都に戻つたのは九月の末頃であつたから、蛤門の變も濟んで京都は以前の通り平靜に歸して居つたが、市中は相變らず物騒であつた。併し蛤門合戦後は薩藩も公武合體の爲めに盡力す

る事となつたので、自然に京都守衛總督の一橋家の威勢も加はり、諸藩の間に重きをなす様になつたところが、其年の十二月、筑波山に立籠つた武田耕雲齋、藤田小四郎等の水戸浪士が、慶喜公に嘆願の筋があるといふので、北國筋から上洛するといふ騒ぎが持上つた。此の水戸浪士の騒動に就いては仲々込み入つた事情があつて、簡單に申すと、水戸藩中に烈公派と中納言派とがあり、一方は尊王攘夷主義、他方は佐幕主義で互ひに氷炭相容れざる有様であつたが、此の兩派の軋轢が年と共に激烈を極め、私が關東へ下向の際には、此の鬭争が破裂して、尊王派の天狗組一派は筑波山に立籠つて、大いに氣勢を擧げ、幕府から討手が向ひ烈しく之れを攻めたけれども、數度に亘つてそれを斥け、一時大いに氣勢が擧がつたが、衆寡敵せず遂に敗走した。それで首領株の武田耕雲齋、藤田小四郎等が殘兵を取り纏め、正邪曲直を一橋公に訴へて、其の判定を請ふといふ趣旨で中山道に路を取り、京都へと向つたのである。之れに對しては幕府方に於いては逆賊として追撃の軍勢を差向け、沿道の諸藩に於いても亦兵隊を繰り出して之れを防ぐといふ有様だつたので、一橋公も傍觀することが出來ず、自ら軍兵を指揮して取鎮めの爲め出馬することになつた。其の先手の大將としては、其頃京都に滞在中であつた水戸の民部公子が向はれ、慶喜公にも大津まで出陣された。其時私は平岡氏に代はり用人となつた黒川嘉兵衛氏に従つて出陣し、陣中に於いては祕書役をも勤め

たのであるが、慶喜公が海津まで進まれた時、水戸浪士は越前の今庄に於いて加賀藩の隊長永原甚七郎へ降伏の事を申入れたので、永原から一橋公に向つて其の指圖を仰いで來た。そこで慶喜公は浪士連中の兵器を取上げ加賀藩に於いて警護の上幕府方へ引渡すことを命じて、十二月の末に京都に還られたが、其後は等水戸の志士連中は幕府の手に引渡され、是非曲直を審判されるでもなく、一律に賊徒といふ罪名を以て首領の武田耕雲齋、藤田小四郎を初めとして、總勢百三十人計りが敦賀港に於いて悉く斬罪に處せられてしまつた。其の當時軍門に降つた浪士を直ちに幕府に引渡したのは、一橋公としては餘りに人情を解せぬ處置であるといふ批評もあつたが、慶喜公の立場としては、さうするより外に已むを得なかつた事と推察される。

猶ほ武田耕雲齋等が降伏を申出たのは、慶喜公が自ら兵を率ゐて討伐に向はれたと聞き、慶喜公や水戸の民部公子を敵として戦ふ譯にも行くまいといふので、歸順の意を表することになつたのださうだが、其の斬罪に處せられた者の中の一人である藤田小四郎は、藤田東湖先生の遺子であつて、當時僅に二十四歳の青年であつた。藤田小四郎とは私も兩三回面會した事があるが、頗る立派な人物で刑に處せられるに當つて従容として正氣の歌を吟じ、「かねてより思ひそめにし言の葉を今日大君に告げてうれしき」といふ一首を辭世とし、泰然として死に就いたさうである。後年、武田

耕雲齋に對して正四位を追贈された時、藤田小四郎も亦從四位を追贈されたが、蓋し勤王の志厚きを嘉せられた爲めであらうと思ふ。

五、每晚の宴會取持役に惱まされる

平岡氏の凶變後、用人中の全權となつた黒川嘉兵衛氏は、幕府の御小人目附から段々出世して、一橋家の用人になつた人であるが、平岡氏と同様よく私共を親切に引立て、くれ、私は元治元年の九月に御徒士に進み、翌年の二月頃には小十人といふ身分に進み、それ迄は御用談所下役であつたが御目見得以上の身分になつたので、下役が取れて出役といふ事になつた。

水戸浪士の一件が濟んでから、一橋家の威勢は一層加はり、従つて御用談所の仕事も餘程多忙になつたが、諸藩との交際上の事が一番繁忙を極めた。私も其頃黒川等の下役だから宴會の度毎に黒川に隨伴して、今晚は加州藩の御馳走であるとか、明晩は彦根藩の重役を御馳走するとか、殆んど毎晩のやうに藩と藩との交際宴會で、祇園町とか木屋町とかいふ處に出入りした。尤も自分は役目が低いから主人格といふ譯ではなく、云はゞ酒席の取持役のやうなものであつたが、毎晩のやうに此のやうな場所に入入りして居つては、自然と浮薄の風に染み易いから特に身を持するに注意し、

役目の際は已むを得ぬけれども、自身等が單獨で紅燈綠酒の巷などに遊ぶなごといふ事は絶対にせず、曾て婦人などにも關係した事がなかつた。黒川用人はもう五十近い年輩であつたが、私共とは違ひ随分遊んだものであつた。それに就いて一つの滑稽な話がある。

確か丑年(慶應元年)の正月であつたと覺えてゐるが、筑前藩であつたか何れの藩かは記憶にはないが、兎も角お客を招待して祇園のある料理屋で酒宴を催した際の事である。夜の十二時頃に酒宴も終つて、遅くもなつたからもう寝ようと思つてゐると、其晩に限つて何時も自分の寝る部屋でなく、別の部屋へ案内して行くので、これは不思議だと思つて仲居に聞いて見ると、大夫さん(一橋大夫と黒川を尊稱して居つた)が毎度貴方様にお氣の毒だから、今晚は特別に御馳走なさるといふ仰せ付けでありますといふ事だつたので、私は不快極まりなかつた。それで何にも言はず引返して着物を着換へ、『今夜は急に用がある事を思ひ出したので、遅くなつたけれども是非とも歸らなければならぬ。若し後で大夫が尋ねたならば、澁澤は急用が出来て戻つたと傳へてくれるやうに』と言ひ捨て、女共が大騒ぎして留めるのを振り切つて料理屋を立ち出で、スタク／＼歩いて三條の小橋の邊りに差掛ると、後から『おい、おい』と頻りに呼ぶ人がある、誰だらうと思つて待つてゐると用人の黒川氏であつた。それで二人伴れ立ちブラ／＼歩きながら歸路に就いたが、黒川氏の言ふには

『今頃から一人で小屋に歸つても困るだらうから、今晚は拙者の宿に一緒に泊つたらよからう』と勧める。私は『それは誠に有難い』と早速承知をして黒川氏の宿に泊る事となつたが、道々黒川氏は至極眞面目になつて、『今晚は誠に失禮した。定めし立腹したであらうが、決して悪い氣持でした事ではなく、日頃の勤勞に對して些か慰めようと思つてした事であるから、悪く思つてくれるな』といふ辯解をされた。私も黒川氏の氣持はよく解つて居るから、『イヤ決して立腹などは致しませぬが、實は心に誓つた事がありますから、大夫の御厚志は十分解つて居りますが、お受けしなかつたやうな次第で誠に相済みませぬ』と挨拶した。すると黒川氏は大いに感心して、『若いに似合はず全く殊勝な心掛けである。それに比べると拙者などは誠に耻入つた次第であるが、人間は是非さうありたいものである。其の心掛けを持つて居ればこそ大事を頼む事が出来る』と言つて、其後一層黒川氏から信用せられるやうになつた。

八、西歐各國巡遊の首途

一、遺憾なく赤毛布式

慶應三年（丁卯）正月十一日——西曆一八六七年二月十五日——愈々佛國郵船アルヘー號に乗込んで横濱を解纜したが、是れぞ行程幾萬里といふ西洋各國巡遊の首途であつた。船は千噸位のものであつたらうか、今から見れば殆んど問題にならぬほどの小汽船であるが、當時の私共の目から見る時は、設備萬端實に到れり盡せりで、吾々の陸上の住居よりも遙かに贅澤なものであつた。船長はフランス人のクレーといふ人で、諸事懇切に一行の便宜を取計らつて呉れたが、殊に横濱から同船したゼルマン人のシーボルト氏は、横濱に滞在して日本人ともよく接觸して居つた爲め、一通りの日本語に通じて居り、此人が専ら通辯の役を引受けて呉れたので、一行にとつては頗る好都合であつた。

何しろ一行は孰れも外國旅行は初めてであるし、外國の模様などは少しも分らぬから、外國船に乗つて、外國式の起臥をするに就いては、遺憾なく赤毛布式の失敗を繰返した事は勿論であるが、

それはさて置き、私は前にも申述べた通り、從來、曾王攘夷論を主張して居つたのであるが、曩の一橋家仕官時代に、歩兵組立の事を思ひ立ちて、慶喜公に建言し、それが幸ひに容れられて、自から直接歩兵組立の仕事に關係してからは、兵制とか、醫學とか、又は船舶機關とかいふ様な事は到底外國に及ばぬ事を覺り、是等の進歩した事柄に就いては、「彼の國の長所を探つて、我國のものとしなければならぬ」といふ念慮を生じて居つた。其處へもつて来て、此度突然外國に赴く事となつたのであるから、恰かも私の念願が叶つた譯である。それで一日も早く外國語を覚え、外國の書物が讀める様にならなければならぬと思つて、船中でフランス語の稽古を始める事としたのである。永い船中を徒らに過ごすのは心ない仕打であると考え、船中に於いて専心佛語の稽古を始めたのは、我ながら殊勝な心掛けであつたが、元來私は船には弱い方であつたし、且つ船中では規則立つた稽古も出来なかつたので自然と怠り勝ちになり、フランス語の文法書などの教授を受けたけれども一向に進歩しなかつた。それで向山華人正や田邊蓮舟、杉浦靄山などと共に、詩作などをして無聊を慰める日が多かつた。

汽船は極めて平穩な航海を續けて上海及び香港に寄港し、香港に於いて同じく佛國郵船のアンベラトリス號に乗り替へたが、此船はアルヘー號に較べると二倍もある大船で、無事に蘇士に着し、

それより陸路汽車の便を藉り、カイロを経てアレキサンドリアに到り、再び汽船サイド號に乗船して佛國マルセイユ港に到着したのは、二月二十九日（陽曆四月三日）で、横濱を出帆してから丁度五十九日目であつた。

——幕末の外交家として世に知られた蓮舟田邊太一は、磊落跌宕、物に拘はらぬ性質で、江戸っ子肌だけに、學者に似氣なき行爲をする。けれども敢て他人から憎まれたり嫌はれたりすることは無かつた。先年、榎本武揚子と同じく外務省に出てゐた時などは、二人とも舊幕の士なので、互に交誼が親密であつたが、或時、榎本は公用で地方に出張する事となつたので、其時の俸給受取方を田邊に依頼した。田邊は委細承知と快諾して、俸給日には手続き通りに金額を受け取つたが、サテ俸給を懐ろにすると急に昔時の元氣に若返つて、役所から後押綱曳の俵で景氣よく柳橋へ押出し、其晩から翌日にかけて大陽氣に騒ぎ散らし、一擲千金の豪遊を極めて平氣な顔。然るに榎本の留守宅では、依頼した田邊から俸給を送つて來ないので、どうした事かと思議に思つたけれども、眞逆聞きに行く譯にもいかぬので、一日二日だまつて待つて居たが、それでも何とも音沙汰なしなので、平素の氣質を知つてゐる榎本子の家族が、若しや田邊さんが柳橋にでも行

つて、大盡振りを發揮してゐるのではあるまいかと氣付き、書生を使者として蓮舟の家に偵察にやつた。すると田邊は悠々閑々と一室に寝轉んでゐたが、家人に起されて眼を擦りながら書生を引見し、宿醉未だ醒めずといふ大元氣振りで、『人間事を成すは凡て青春の期、血氣盛んの時にありだ、白髮終難變、黄金不可成だ、君等は前途有望の青年時代、これから大に、マルベシである。乃公のやうになつては、攀柳折花の技も亦妙ならずだ』などと、ノベツ幕なしに饒舌り立てるので、書生は煙に捲かれて不得要領で邸に歸り、『田邊サンの言ふことが、どうも變です、ハイ……』（鈴木光次郎著、名流奇談）

二、上海及び香港の第一印象

横濱からマルセイユまで約二ヶ月に亘る航海中、各地に寄港して視察をしたが、何れも初めて接する外國の風物の事であるから、一つとして珍らしからぬはなく、中には驚異の眼を瞪らしむるものも尠くなかつた。其の當時の第一印象はどんなであつたか、六十年前に遡つて日記を繰つて見ると、感慨無量、全く隔世の想ひがする。

第一印象は上海に始まる。此港に碇泊したのは正月十五日（陽曆二月十九日）で、此日未明に揚子

江を溯り、十一時頃上海に投錨したが、稍々する中支那人が朱塗に魚眼を舐に描いた小舟を漕いで来て上陸をすゝめた。其の一隻を雇うて上陸し、英國人の經營するホテルに投宿したが、民部公子の一行が上陸したといふので、土地の役人や英佛人等が來訪して安着を祝し、總て英人の案内で市街を見物した。江岸には西洋各國の官衙や居留民の邸宅が立並び、官衙にはそれ／＼其の國々の國旗を掲げて居るが、何れも樞要の地を占めて居り、其間に税關が設けられてある。税關には江南北関といふ扁額を掛け、門は江に面し、浮波止場があつて、家根を設け、鐵の軌道を敷き、荷物の陸揚に便して居る。又江岸には凡て瓦斯燈を設け、電線を架設し、街路樹を植ゑ、道路は平坦で殆んど歐風である。何しろ我が國に於いては石油ランプさへ珍らしい時分で、蠟燭が明いとされてゐた頃、地中に桶を埋めて瓦斯を導くなどといふことは、想像も及ばぬことで、况んや電線によつて音信を傳へるなどは、切支丹バラレンの妖術でない限り、有り得べからざる事であつたのだ。百聞一見に如かずで、私は汽船の設備に先づ感心したが、歐洲の土を踏むに先だち、上海で西洋人の科學知識の遙に進歩して居ることを實地に見聞し、大に學ぶ處あらねばならぬと痛感した。

總て一里計りで城内に到つたが、城壁廓門と思しき處に兵器を飾り、背中に「護兵」といふ文字を染め抜いた支那服を纏うてゐる兵卒が立番をして居つた。市街は道路が狭く、店舗は二階造りであ

るけれども、軒が低く間口が狭小で、それに道路には石が敷いてはあるが、兩側に汚ない捨水が溜つてゐて頗る不潔千萬である。加ふるに飲食店では見世先で牛、豚、鶏、蟹などを始め、いろ／＼なものを煮焼して居るので、何とも言へぬ臭氣が鼻をうち、辻賣の商人や駕籠舁や乞食などが、聲々に客を呼びながら群衆の中を行き交ふさまは、全く嘔吐を催ほす程であつた。尤も住民中の富豪は大抵駕籠に乗つて往來して居るが、貧しい者は衣類に垢づいてゐる計りでなく、臭氣紛々たるものがあつた。更に城隍を見物し、城外に出でて江に添ひ約一里ばかり下ると新大橋といふ處に出た。此橋は絶えず橋桁を揚卸して舟行に障りのない様にして居るが、之れは珍らしい装置だと思つた。それより先きには英國の客舎もあり、其の裏通りには支那市街が軒を並べてゐるが、此の市街には青樓や劇場等があつて、鼓歌さんざめき、又支那の官吏が兵卒従僕を多數引率して往來を巡邏するのを見たが、其の服裝の整はぬのみならず、衣服の粗末にして區々別々なるには、全く見戲に等しい感を抱かざるを得なかつた。尙ほ此地には英佛其他の西洋人の教會、學堂などがあつて教化に勵めて居るが、西洋人の支那人を役する有様を見るに、恰かも牛馬を驅使すると等しく、鞭をもつて督呵して居る。而も此の支那人たるや、敢て之れを怪しまないのみか、寧ろ當然の如く心得て居るらしい。又、私共が市中を歩くと、蟻の甘きに集まるやうに往來を塞ぎ、何やら分らぬ事を冗舌

りながら喧しく罵り喚き、英佛等の巡邏兵が来て追ひ拂ふと、一時は潮の引く如く立ち去るけれども、暫くすれば忽ち以前の如く集まつて来る。東洋の老國民も亦泰西に比すれば殆んど問題にならぬ程に、文化の上に隔りがあることを感ぜざるを得なかつた。

英領香港に着したのは正月二十日（陽曆二月二十四日）の午前十時頃であつた。香港は鴉片戦争後、英國の附屬地となつたもので、昔時は荒僻の一漁島に過ぎなかつたけれども、英國の版圖に屬して以來、山を拓き海を埋め、燈臺を造りなどして面目を一新するに至り、漸次人口稠密し、貿易が盛んとなり、東洋屈指の貿易港となつたのである。港内は海底深く、如何なる巨船をも碇泊せしむるに足るが、島内は平坦の地が少く、山腰を截ちて道路を設け、海岸には支那人が多く住み、山手は悉く歐洲人の居住地となつてゐる。此地の最も高地になつてゐる處を俗に太平山といふが、麓より約一里餘りであつて、頂上には英國々旗が掲げられてある。此處より望めば、灣内の諸島嶼、風帆の往來などは勿論、市街地は眼下に展開して一瞬の中に收める事が出来、眺望絶佳である。此地には土民保護のため鎮臺を置き、陸海軍の兵隊を駐屯せしめて居るが、裁判所、造幣局、新聞社、教會、病院等が悉く備はり、略歐洲の都市と變りがなかつた。

上陸の日は市街を見物し、翌日は造幣局を視察し、英國水師提督を訪問して敬意を表し、更に監

獄を視察したが、其の建築の宏莊なる点にも感心したが、罪人の取扱方の如きも、罪の輕重に従つて職業を營まして居る点など、流石に文化が進んでゐるのを思はしめた。且つ獄中に說法場を設けてあつて、時々罪人を集めて說法を聴かして居るが、此の說法といふのは善惡應報の道を説いて罪人を懺悔せしめ、凡て惡を戒しめ善に赴かしようとするものであつて、其の懇篤切實なるは全く感服の外はなかつた。成程、前非を悔い、本心を取戻し、善心に立歸らしむるには斯うあらねばならぬと思つた。

——翌慶應三年正月十二日、民部公子は公使向山隼人正と共に佛國郵船に駕して出帆あり、隨行の外佛蘭西在長崎の岡士ジュレー、職事を帶び歸國の次を以て、往路船中並に上陸等の用辨を達すべきを命ぜられ、又英國公使館の通辯アレキサンドル・フォン・シーボルトも歸省の便を以て、同じく公子に陪隨して通辯其他の事をも辨すべしとの命を受けたり、公子の斯行は實に大君の地位を西洋諸國に顯揚すべきの擧なれば、往路着船上陸の場所々々、其の接待振等は殊に注意を要し體面を傷けざるやうはからふべしとは、別段に訓令を奉ずる所なれば、差向香港着の折祝砲の手續等は最懸念する所なり、（これ英國にては、既に幕府を以て日本統治の權あるものと認めず、た

だ諸侯中較大なる者とするの説あればなり）されば郵船の着するや否、先シーボルトに上陸せしめて、彼方待遇の如何を探らしめしに、いかにも相當の禮を盡すまじき狀あるを以て、公子の事は別段の披露をなさず、上陸總督の面會等、皆向山公使其一行の者にとゞめたりしが、柴根は佛國の藩屬なれば、廿一發の祝砲をはじめ、其他の禮遇、此方の意を満たすに足りなき、（幕末外交談）

三、眼に映るもの悉く珍奇の世界

佛領サイゴンに入港したのは正月二十五日（陽曆三月一日）であつたが、赤道に近い爲め日本の土用中の如き氣候であつた。碇泊の日、佛國總督の使者が來訪して一行の安着を祝したが、翌朝、迎ひの船がやつて來たので陪從して上陸した。直ちに總督の官邸に案内されたが、碇泊中の佛國軍艦は祝砲を放ち、又騎兵約半小隊が馬車の前後を警護した。官邸内には種々の奇物珍品を蒐集陳列した室が設けられてあつて、一行の縦覽に供したが、それより市街を巡覽して一旦歸船し、其夜再び總督官邸の招待會があつた。サイゴンは當時から約十年ばかり前に佛國の領土となつた處で、總督が一切の統治に任じて居るが、約一萬の軍隊を駐屯せしめて土民の蜂起に備へ、盛んに開拓建業に向つて歩を進めつゝあつたが、未だ土地荒廢し人煙稀であつて新開地の空氣に満たされて居つた。

それでも道路等の修繕は稍々整ひ、既に製鐵所、學校、病院、造船所等も設けられ、將來佛國の東洋根據地としての大計が着々として進められつゝあるのを看取する事が出來た。尙ほ案内の者を雇うて椰子林や芭蕉樹の間を縫うて郊外の廣場に赴いたが、象使ひがやつて來て技藝を見て呉れといふ。珍らしいものだからどんな事をするかと若干金を與へると、象使ひは二匹の巨象を鞭打つて或ひは跪坐せしめたり、太い木の枝を鼻で折らせたり、飛び乗りをさせたり、自由自在に使ふので一行は初めてあるだけに大いに興味を感じ、茶目氣分を發揮して象に乗つたりした。

翌二十七日サイゴンを發し、二十九日夕刻シンガポールに入港し、翌朝上陸、此地第一の旅亭と稱さるゝヨーロッパといふ客舎に投宿した。灣内廣く且つ海底深く、船は波止場に横着けとなる良港で、流石に英國が東洋に志を伸べんとする根據地だけあつて、埠頭の築造より、石炭の置場、電線の設け、馬車の備へなど、凡て文明的の設備が頗る進んで居つた。上海、香港、サイゴンといふ風に、漸次見聞を擴めて來たので、格別新奇に感ずる程の印象もなかつたが、裸體の小兒が小舟を操つて船側に群がり、銀貨を海中に投ずると多數の小兒が争うて海中に飛び込んで拾つて來る。其の有様は恰かも龜の子の如く、又海上を競泳して先きを争ひ、其の迅いこと實に矢の如くであつた事が今でも記憶に残つて居る。

日本の土地に別れを告げてから、早くも二十日を経過した。船中ではフランス語の稽古を始めた。又一行の中でも外國奉行の向山隼人正、同組頭の田邊太一(蓮舟)、同調役杉山露山等いふ人々は何れも相當に學問あり、殊に向山は詩人とも言はれる程であつたから、鬪詩などをして無聊を慰めたが、寄港地は何れも目先が變つてゐるので私共にとつては上陸が大きな慰安の一つであつた。斯くて二月七日(陽曆三月十二日)にはセイロン島のホアントミガールに着し、オリエンタル・ホテルに投宿した。此地の土人は支那人と異り、色は黄黒であつて、目は凹み、唇は赤く且つ厚く、腰間を僅かに更紗木綿で掩うてゐるだけで全然裸體であり、男女とも頭に丸い櫛を挟み、毛髪を束ねてゐる。又下級民で平常煙草を買ひ得ぬ連中は、檳榔を嚙んで吸煙に代へて居るため、自然に齒が黒くなつて、恰かも鐵漿を染めてゐるに等しい。

セイロン島は元ポルトガル領であつたのを、其後英國が略取したものであつて、港口に岩石多く且つ波浪が荒くて上陸に頗る困難であつたが、土人が小さな舟の上に木材を組んで釣合ひの取れるやうな一種の桴を拵らへ、之れに乗せて上陸せしめた、波止場には木造の小屋があつて直ちに城門に續き、城門には砲卒が警衛して居つた。それより少し小高い處に市街があり、海岸には多くの砲台を築造し、火藥庫も設けてあつたが、恐らくポルトガル領時代に築いたものらしく、現に城門上

には依然として兩獅金冠を捧げたる舊領時代の標記を存してゐるのを見た。私共は特に馬車を備うて約三里計り山手にあるポーカハウアといふ小寺院に詣でたが、山門を入れれば正面が本堂で、平常は鎖して開けぬといふ事であつたが、特に僧侶に請うて拜觀する事が出来た。堂内には約二丈餘りの磁製の釋迦涅槃の像を安置してあつたが、腰から下は鱗狀をなした衣もて掩ひ、堂の側、僧房、廟宇などには何れも地獄極樂の圖を描いてあつた。又僧侶は袈裟を纏うて居るのみで、頭を丸め、眉毛を剃り、跣足であつたが、香を奠じ、花を供へ、合掌をなし且つ讀經の音律など、ほゞ禪宗のと同様であつた。山の後に佛骨を納めた遺跡があつたが、地を三層に築き、周圍に石壇を繞らし、中央に菩提樹を一本植ゑてあるだけで、外に何もなかつた。又一方の山頂に至れば小亭があり、三鞭酒などを備へて賣つて居るが、眺望絶佳であつて、遙に靈鷲山の雲間に聳ゆるを遠望することが出来た。此の寺院に至る途中には椰子林があり、又水田があつて、水芋、蓮などが青々と浮かんでゐるのを見た。ホテルに戻つて午餐を喫したが、給仕人は何れも裸體の黒人で、腰部を僅に布で掩うたのみなので、我々日本人にとつては尠からず不快に感ぜられた。夜は割合に涼しいので、打揃つて市中を散策したが、特に珍らしいと印象する程のこともなかつた。

二月十六日(陽曆三月二十一日)朝、汽船は英領アデンに着したが、此間の航海中に於いて、或時

は海中に多数の鯨の跳躍するを見、或時は海馬の波間に浮ぶを眺め、或日には海中に鯨群の游泳するを遠望した。此のアデンはアラビア南陲の一商港で、紅海の口を扼し、東洋航路の要衝に當つて居る。土地は赭い磧にて、山に樹草なく、地に潤澤なく、人民はアラビア人種で、印度人に比すれば更に頑強な體軀であるけれども、容貌は醜い。上陸して海岸にある一客舎に少憩してゐると、馬車や乗馬を店先に並べて頻りに市街見物を勧めるので、一台の馬車を驅つて市街見物に出掛けたが、山に副うて屈曲した海岸の細い路を約半里餘り行くと、漸やく磴道を登る處に出た。其處に城門があつて山腰を切り拓いてあるが、左右に石壁が聳え、要所に大砲を据付け、兵隊が守備してゐる。そして切通しの上十丈許りの處に、橋梁を架して要害の往來として居り、道幅は僅に馬車が行き違ふ事が出来る位に過ぎない。

市街は此の所謂關門を通つて稍々下つた平坦の地であるが、土人の住居は何れも陋矮を極めたもので、而も其半ばは茅葺や朽ちかけた家屋で、殺風景な淋しい街であつた。歐洲人や在留官吏の舎屋は皆海岸の山手にあつて、全く別天地をなしてゐる。應て市街を過ぎて水圍場^{みづかきば}に到つたが、元來飲料水に乏しい土地なので、此處の規模の廣大なことは全く驚く計りである。聞く處によれば、管を通じて平地にある汲取場^{くみとりば}に導き、其處より豚皮の袋に汲み入れて、駱駝又は驢馬に背負はしめて

數里の地に送り、各所に分配するのださうである。私は其の實況を親しく観て、所謂瘠土の民は勤儉にして剛勁、肥沃の民は遊惰にして柔弱なるを想ひ、前者は即ち富國強兵の根基であり、後者は亡國逃遁の根柢であることを痛感した。

四、スエズ運河の開鑿を見る

航海も漸やく終りに近づき、二月二十一日(陽曆三月二十六日)に無事スエズに入港した。現今でこそ地中海と紅海との間に運河を掘鑿して、東西兩洋の通航が出来るやうになつたけれども、其の當時は海路による時は、喜望峰の迂路を取るより外に途はなかつた。それで一行はスエズに上陸し陸路を地中海に出るの旅程を取つたのである。尤も私が行つた當時は盛んに運河の開鑿工事中で、汽車の窓から瞥見すると、左方遙に多數のテント張りが立並び、人夫等が土畚を運ぶ有様などが手に取る如く見えた。此の大工事は一八六五年(慶應元年)頃より起工したさうで、四五年後には全く竣成を見る豫定であると聞き及んだが、私は其の工事の大規模である事よりも、寧ろ泰西人が獨り一身一爲のためのみならず、國家を超越して、進んで斯くの如き世界全人類の利益を計る爲め、斯くの如き規模の遠大にして目途の宏壯なる大計畫を實行する點に感服せざるを得なかつた。



スエズ運河

却説、スエズは西紅海の尾端に當る一港灣であつて、地中海岸に通ずる鐵道は此地を起點とするので、陸路聯絡の旅をなすには、是非此地に上陸しなければならぬが、スエズは港口が遠淺なる爲め約二里ばかりの沖合に投錨した。懸て一行は小蒸汽船に乗じて上陸し、波止場より左手の海岸に臨んだ英國の客舎に投じて午餐を喫し、發車の時刻を待ち合せたが、港口には絶えず沙漠の土砂が流出し、淺瀬を造る憂ひがあるので、始終蒸汽船を以て淺瀬してゐる。此の土地は一帶に砂礫であつて草木なく、樹木を栽ゑるには他所より土を運んで培養してゐる状態で、従つて飲料水の如きも頗る乏しい。土民は頭に白布を巻き、軍人は皆赤いトルコ帽を冠つてゐるが、何分地中海への通路が開けてから新たに設けられた港であるから、其の當時は人家も至つて尠なく、設備等も殆んど皆無に近い程で、市街といふよりは寧ろ一寒村といふ實狀であつた。休憩した客舎で、パン、乾肉、果物、葡萄酒などの食料品を整へて夕刻汽車に乗り、夜の十二時頃、埃及の首都カイ

ロを通過して、翌朝十時頃アレキサンドリアに到着した。

埃及は其の當時トルコの勢力下にあつた時代で、カイロには亞王（亞王といふのは王に亞ぐ位權のあるものをいふ）があつて國內の政事を司り、其の風俗も政治の様式もトルコと同様であるといふ話であつた。何分カイロの通過は夜中だったので停車の時間はあつたけれども視察せず、且つ有名なるピラミッドやスフィンクスの奇觀を遠望する事さへ出来なかつたのは遺憾であつた。アレキサンドリアは地中海の要港で、貿易も繁昌し、土地も殷盛であつて、人家稠密し、在留の歐洲人も頗る多い。土人は驢馬に乗つて通行して居るが、土俗の婦人は黒衣を以て首から上を包み、顔は眼を出してゐる計りであるのは奇風俗である。尙ほ貴族は常に他人に面會するを恥とし、勉めて奥深く家居してゐるさうであるが、此の退嬰的な習慣に加ふるに一夫多妻の因習があつて、多きは數十人の妻妾を蓄へ、女子よりも男子が嫉妬深く、甚だしきに至つては若し妻妾が密かに他の男と面會するやうな事があれば、直ちに害する者も尠くないといふ噂であつた。此の當時、トルコ帝は四百八十餘人の妻妾を有してゐるといふ噂であつたが、文明の進んだ歐洲の近くにありながら、遂に開化の遅れてゐるのは、斯くの如き陋風を改めない事も重要な原因をなしてゐると想つた。

此港では博物館に行つて古器物其他數々の奇品を一覽し、佛國の領事館に一泊して、翌朝汽船サ

イド號に便乗してマルセイユに向つた。が、途中シシリー島のメツシナ港に寄港し、更にサルヂニア、コルシカ二島間(ボニファチオ海峡)を通過した。サルヂニア附近には群小島が点在し、又海峡は蜿蜒として曲折し、恰かも大なる庭園の如く、天然の風致の勝れたるは我が瀬戸内海と似通うてゐる點があつたが、此の景趣絶佳の一小島中に一箇の白壁を遠望した。此の白壁の矮屋こそ、イタリーの英傑ガルバルデーが退隱して、悠々自適の餘生を送つてゐる處であるといふ説明であつた。ガルバルデーは今日のイタリーを建設した一英傑である事は世人熟知の如くであるが、彈丸黒子の地より崛起して奮然兵を起し、自ら手兵を携へて故國の爲めに立ち、四方に威を張つてイタリー統一の大業に獻身的奮闘をなし、雄圖略々成るや、盛名尙ほ赫々たるにも拘らず、一切の名利を棄てて故山に隱棲したさうで、當時尙ほ健在で悠々餘生を樂しみつゝ晩節を清くして居る事を聞いて、其の英風に欽慕の情を禁ずるを得なかつた。又コルシカ島は彼の蓋世の英雄大ナポレオン出生の地であり、コルカシアンの血の流れを汲んで全歐洲の地に威をふるうたことを思ひ、萬感交々到り、追憶の情が滾々として湧いたのであつた。斯くて二月二十九日(陽曆四月三日)午前九時半、船は目指すマルセイユに入港し、生まれて初めて歐洲の地を踏む事となつた。日本を出帆してから丁度五十九日目である。

航海中に於ける船中の待遇振りは、子爵の「航西日記」中に收めてある。初めて外國船の客となつた維新前の日本人としての印象が如實に顯はれて居るから、左に其の一節を抄録する。(編者)

—— 郵船中にて諸賄方の取扱ひ極めて鄭重なり。凡毎朝七時頃、乗組の旅客盥漱の濟みしころターブル(餐盤なり)にて茶を呑しむ。茶中必雪糖を和しパン菓子を出す。又豕の鹽漬などを出す。ブールと云ふ牛の乳の凝たるをパンへぬりて食せしむ。味甚美なり。同十時頃にいたり、朝餐を食せしむ。器械すべて陶皿へ、銀匙並銀鉢、庖丁等を添へ菓子蜜柑、葡萄、梨子、枇杷其他數種盤上に羅列し、隨意に裁制し食せしめ、又葡萄酒へ水を和して飲しめ、魚鳥、豚、牛、牝羊等の肉を烹熟し、或は炙熟し、パンは一食に二三片適宜に任す。食後カッフヘーといふ豆を煎じたる湯を出す。砂糖牛乳を和して之を飲む。頗る胸中を爽にす。午後三時頃又茶を呑しめ、菓類、鹽肉、漬物を出す。大抵朝と同様に、又フイヨンといふ獸肉鶏肉などの煮汁を飲しむ。パンはなし。熱帯の地に到れば氷を水に和して呑しむ。夕五時或は六時頃夕餐を出す。朝餐に比すれば頗る鄭重なり。凡肉汁よりして魚肉の炙煮せし各種の料理と山海の菓物及びカステーラの類或は糖もて製せし氷漿グラスクリームを食せしむ。夜八九時頃又茶を點し出す。朝より夜ま

でに食は二度、茶は三度を常とし、其食する極めて寛裕を旨とし、尤も煙草など吸ふを禁ず。總て食事及び茶には鐘を鳴らして其期を報ず。鳴鐘凡二度、初度は旅客を頓整し、再度は食盤に就かしむるを常とす。若くは不食か疾病あれば醫をして診せしめ、其症に隨て藥餌を加ふ。是等の微事を載るは贅語なれども、微密、丁寧、人生を養ふ厚き、感ずるに堪たり。因て其略を茲に記載せり。

五、馬塞上陸を驚異すべき新文明

扱、民部公子の一行を乗せた汽船サイド號が佛國のマルセイユに入港すると、豫て電信を以て「何月何日の何時頃に入港する」旨を當地の官憲まで報じてあつたので、愈々入港するや、祝砲を放つて歓迎の意を表したが、程なく當地の總鎮台から出迎へがあつたので直ちに上陸し、騎兵一小隊に馬車の前後を警衛せられて、グランド・ホテル・ド・マルセイユに案内せられた。ホテルには間もなく鎮台並びに海陸軍總督及び市長などが、何れも禮服用にて代るべく來訪して安着を祝したので、當日の午後三時頃、答禮のためフロリヘラルド及びジュレーの先導にて、鎮台、陸軍總督を訪問し、市街を視察して夕刻歸宿したが、此夜、一行は鎮台の招待にて芝居を見物した。

マルセイユには四五日滞在したので、翌日から海軍總督其他へ答禮のため訪問したり、ツーロン軍港に赴いて軍艦其他を視察したり、陸軍の訓練を陪觀したり、其他時間の餘裕を見ては各所の視察をなしたが、一行が初めて寫眞を撮影したのも此地であつた。ツーロンに赴いたのは上陸の四日目であつたが、何しろ遠來の國賓が見えられるといふので、多數の官吏が出迎へたのは勿論、特に約半箇大隊計りの軍隊が警衛し、一行が到着すると軍樂隊の奏樂などがあつて、頗る鄭重な歡待振りであつた。聽て軍艦に請ぜられ、大砲、蒸氣機關其他の諸設備を觀覽したが、特に一行の爲めに發砲訓練をなし、又試射をすゝめるので私も大砲を試射して見た。鎮台で午餐の饗應があり、午後には製鐵所、鉛鑛爐、反射爐其他の種々なる機械や、銃砲貯藏所等を視察したが、此日特に潜水夫を作業に従事せしめて、一行の視察に供した。潜水器は初めて見たに、海底に潜つての作業の實狀は全く珍らしく感じられた。今日では海に潜水艇があり、空に飛行機、飛行船があり、無線電話が一般民衆の娛樂に供せられて居る程であるから、潜水器の装置を見て感服するなど云ふ事は隔世の感があるが、實際六十年前以前の文明は今日の比でなく、殊に三百年來の鎖國によつて海外との交通杜絶して居つた吾々日本人にとつては、潜水器の發明の如きも、確に未知の世界の出來事に相違なかつたのである。

澁澤榮一子は、慶應三年、徳川民部大輔がフランスの首都パリに開かる、世界大博覽會に遣佛大使として派遣さるゝ事となつた際に、其の隨員として渡佛され、引續きパリに留學された一行がマルセイユに上陸した際、公式の遣佛大使といふので、海陸軍總督市長などを始め官民の款待至らざるなく、或は各所を案内し、或は饗宴を張り、劇場に招じたが、見るもの聞くもの一として珍らしからざるは無かつた。殊にツーロン軍港に案内した際、潜水夫に作業をせしめて一行の視察に供したが、潜水器を身に纏うた異様の裝束をした潜水夫が、長時間に亘り海底に於いて作業する實況を目撃しては、全く驚嘆するの外はなかつた。澁澤子爵は『航西日記』に、潜水器に對する所感を左の如く録して居られる。

——每船祝砲あり、午後上岸す。鎮臺へ請じ午餐を供し畢りて、製鐵所、鑄鐵爐、反射爐其外種々の器械を見る。猶銃砲貯所又は人を海底に沈没せしめ、暗礁其外水底に在る物を具に見留る術を見る。

此の術は緻密なる護謨を縫くるみにして、四支六穴への水の徹らぬ様にし、首には頭形に兜やうなるものを冠り、眼の邊りは玻璃を張り、見るを自在にして、天窓より護謨の管を通じ、水

外へ出し、空氣を通ぜしめて幾時にも氣息に堪しむ。此日沈没せしは水底淺しといへども、凡四五十ミニウト程なり。空氣通すれば幾時にも堪ゆるといふ。

何しろ潜水器などいふものは初めて見るのであるから、『術』と稱するの無理がない。鮑取りか、海草取りの名人と云はるゝ者でも、潜水は精々十數分に過ぎぬ當時の常識から推すれば、之れも切支丹羽天連の術と映じたかも知れない。(實業)

三兵の訓練を陪觀したのは其の翌日であつた。三兵訓練といふのは、分り易く言へば歩兵、騎兵砲兵の聯合觀兵式であつて、前年カンボヂヤ(佛領印度支那)にて戰亂のありし時の有功者に對し、佛國皇帝より名譽の勳章を授與するにつき、特に此式が舉行せられたのであつて、偶然にも其の好機會に遭ひ陪觀するの光榮に浴したのである。當日は上官の指揮の下に歩兵、騎兵、砲兵の各隊が整然として行進し、練兵場を旋回して四方に布列するや、其の中央に設けの席があつて、全軍の總督及び軍監其他が馬から下りて設けの席につき、貴顯の來賓も亦設けの席についた。斯くて當日褒賞を授與せらるべき人々を功績の大小により順席を遂うて整列せしめ、軍監が「何某が何々の役に於て此度何々の功勞あるにより、特に何々の勳章を授く」といふ意味の賞詞を高聲に唱へ、總督自か

ら一々其の勳功者の胸間に勳章を掛けて表彰するのである。日本の勳章も佛獨等に其範を取つたのであるが、維新前の事であるからよく其の事柄を諒解して居らぬので、詳しく説明を聞いたところ出陣の際戦功ありし者に對して、軍監より司令官に具陳し、それより皇帝に奏聞して、其の允許を得て勳章を與へるものであつて、此式は、何某は國家に對して功勞ある人であるといふ事を、國民一般に知らしむる爲めに、特に公衆環視の晴れの場所に於いて行ふのであつて、國民は老幼男女に至るまで、是等の有功者を尊敬して居るといふ事であつた。私は其の實際を見聞して、誠に士を賞すること明かにして、功を勵ますことの公なるを知り、之れでこそ一兵卒に至るまで戰場に赴いて一命を輕んじ、國家の爲めに死を厭はざるに至るであらうと感じた。

マルセイユ滞在數日にして、三月六日(陽曆四月十日)愈々フランスの首都パリに向つて出發したが、途中、リヨンに下車して一泊し、翌早朝再び車中の人となり、其日の夕方四時頃に、目的地であるところの首都パリに到着した。停車場には書記官カシオンを始め多數の出迎へがあり、フロリヘラルドの先導にてパリーの中央カブシンス街なるグラント・ホテルに一と先づ旅装を解いた。横濱を解纜してから恰も六十七日目であつた。

九、巴里大博覽會と狙撃事件

一、ナポレオン三世

扱フランスの首都パリに着するや、此度の大博覽會の禮典に來會したといふ趣旨を以て、第一に佛帝ナポレオン三世陛下に國書の捧呈を終へた。そして滞在中の待遇其他に就いてそれ／＼打ち合せがあつたが、表向きの禮式などに就いては、専ら外國奉行及び其の一行の手にて取扱ひ、私の役目といふのは、主として民部公子の一身に關する事柄を取扱ふ事であつた。其の仕事といふのは恰かも書記と會計とを兼ねたやうなもので、例へば日本に公信を發する場合などには私が筆を執つて其の信書を認め、又御傳役の山高石見守を始め、公子專屬の人々に手當を支給したり、公子の爲めに手廻りの雜品などを買入れる際などには、總て私の手で辨じた。斯う申すと餘程多忙な様であるが、平素は寧ろ閑散な方であつたから、其間に佛蘭西語を勉強する考へで、一行中の兩三人と申合せをして、教師を一人雇ふことにした。尤も公子及び外國奉行などは、一時、パリに於いても有名なグラント・ホテルに止宿せられたが、私共兩三人は、ホテルに居るのは不經濟であるといふ

ので、パリに着すると間もなく貸家を探して其處に移つた。そして毎日教師を招いて親切に教授を受けたから、一箇月ばかりの後には片言ながらも簡単な日用語位は出来るやうになり、買物に行つても半分は手真似で用を辨する程になつた。處で話は聊か前後するが、パリに着いて見ると、日本出發前に大得意で準備した燕尾服などは、全然着用する事が出来ないもので、到着の三四日後に、同行の誰彼と一緒に在留中着用する洋服などを注文して職工に託したが、到着後二週間ばかりして行はれた佛國皇帝謁見式には、一行は何れも純日本式の禮装を着用に及んで參内したのであつた。謁見式は三月二十四日(陽曆四月二十八日)チュイレー宮殿に於いて行はれたが、當日は異國の異装せる我が遣佛公使の行列を見物する爲めに、都下の老若男女は勿論、近郊からも夥しく觀覽者が押しかけて、ホテルから王宮に到る道路の兩側は、是等の群衆のため殆んど人を以て埋めらるるの盛觀を呈したのであつた。何しろ頭には丁髷を結び、衣冠、狩衣などの裝束をした異國人が、パリーの目抜き街路を練り出したのであるから、外國人に取つては定めし奇觀であつたであらうし、又子々孫々に傳ふ可き話の種であると思つたに違ひない。そして謁見式は無事に済んだが、答禮と思しく、其の翌々日佛帝から贈品があつた。

謁見式の模様は、子爵の航西日記に詳しく記載してある。今日とは時勢が違ひ、想像ばかりでは分り兼ねる節が多いだらうから、其の概要を左に抄録する。(編者)

謁見式の當日になると、午後一時頃、日本の領事たるフロリヘラルドが、黒羅紗に金飾の禮服を着用し、華やかな大禮帽を戴き、佩劍殿めしい姿でやつて來た。稍々あつて禮典係のラミエス、シヒエイの兩人が禮典の馬車を整へ、何れも紫羅紗に金飾の禮冠佩劍にて、出迎へのためホテルに來着し、當日通辯の役を受けた書記官カシオンも禮装でやつて來た。我が遣佛公使一行の當日の禮服は徳川民部大輔(公使)は衣冠、向山隼人正(全權)並に山高石見守(傳役)は狩衣で、歩兵頭並に一等書記は布衣、一等翻譯、砲兵指揮、二等書記等は素袍であつた。當時は頗る眞面目で斯ういふ裝束を以て謁見式に臨んだのであるから、隔世の感があるではないか。

聽て一行は嚮導者に導かれて、ホテルの庭から差向けられた禮車に乗つたが、第一車は前乗で、馬が四頭、御者が二人で、騎兵が二人宛馬車の前後を護り、之れには向山全權、山高傳役、歩兵頭及び禮典係三人が同乗した。第二車は即ち民部大輔の馬車で、禮典係一人と通譯のカシオンが陪乗したが、馬が六頭、御者は四人で、前乗と同じく騎兵二人宛が前後を衛つた。第三車は後乗で、一

等書記、歩兵指揮並にコンセル・ゼネラルのフロリヘラルド、ジュレー等が同乗し、第四車は二の後乗で一等翻譯、二等書記が同乗、最後の馬車には民部公子の侍者が乗つたが、何れも二頭立の馬車で、御者二人宛であつた。

民部大輔の一行が王宮の正門に到れば、騎兵二人が兩側に控へて警衛して居り、門内の兩側には歩兵の一隊が整列して敬禮をなしたが、尙ほ軍樂隊が居つて一行が通過の際には奏樂をなして迎へた。玄關車寄で馬車から下りると、華やかに装うた禮典係總頭取(式部長官)が階下まで下り迎へて先導をなし、多數の親兵が整列して警護して居る階上を通つて更に數室を通り抜けたが、一室毎に二人宛の守衛が控へ、行き當れば扉を開き、通過すれば直ちに元の如く扉を鎖した。斯くて第五の室に到れば、茲は即ち謁見の式場に當てられた廣間であつて、正面の三段高い壇上に佛帝並に帝妃が着席し、其の左方には外務大臣其他の顯官が侍立し、右方には高貴の女官が列席して居つた。我が民部大輔が其の座前に進むと、掛官が披露をなし、式禮の後先づ我が公使(民部大輔)が挨拶をされ、通譯が公使の前に進みフランス語に譯して奏上する。之れに對し佛帝ナポレオンは

兩國親睦の交際あるにより、今日相謁するを得たるは、誠に滿悦とする處である。今後も兩國親善の爲めに力を盡さるゝやうに、衷心より希望する。

と答詞を述べられ、カシヨンが日本語に譯して之れを傳へた。次で一等書記が伏紗包の中から國書を取り出して全權向山隼人正に渡し、隼人正より更に民部大輔に捧げ、民部大輔は之れを受け取つて帝座に進むと、皇帝は座を立つて國書を受け取り、一禮して外務大臣に渡された。之れで公式の謁見が済んだので、民部大輔は更に帝妃に默禮をなし、帝妃も亦答禮され、幸ひに少しの手落ちもなく式を了へた。廳て一同は次の間に退出し、向山全權より贈品目録を禮典總頭取に渡し、玄關まで見送られて無事歸館されたが、此夜祝賀の爲め饗宴を催された。

二、平和の夢を驚かした歴山帝狙撃事件

當時、パリには各國の帝王や皇族其他の貴顯が續々入府し、佛帝ナポレオン三世は其の應接に忙殺さるゝ有様であつた。何れもパリに萬國大博覽會が開催されたに就き、之れを機會として、博覽會視察旁々一層國交の親善を期する爲めに來遊された事は言ふまでもない。

外賓の主なるは、ロシア皇帝並に公主、プロシア王(今のドイツ)及び皇太子、英國皇太子及び皇子、ベルギー王、トルコ帝、オランダ皇太子、イタリー皇太子、ポルトガル王妃を始めとし、各國が特に代表者を派遣したので、佛國では何れも國賓の待遇を以て迎へ、殊に露國大帝やプロシア王

の到着の際は、ナポレオン三世陛下が自ら停車場まで出迎へて歡待された。従つて國賓の滯在中は殆んど連日に亙つて種々の催しがあり、昨日は夜會、今日は舞踏、明日は競馬といふ風に、少しも無聊を感じしめぬ様に心を配り、其の都度我が遣佛大使徳川民部大輔も招待され、私も屢々其の陪從の光榮に浴したが、此外に國賓の間に於ける交際があつて、或時は觀劇に招待され、公使館やホテルに饗され、之れに對する返禮の催しもあつた。處が圖らずも此の平和の空氣を震撼すべき一大異變が突發した。それは即ち露國皇帝狙撃事件である。之れが爲め一時パリ上下の人々は色を失ひ、中には國際問題を惹起しはせぬかと杞憂するものさへあつたが、露帝の寛宏なる態度によつて幸ひに無事なるを得た。

事件の真相といふのは斯うである。慶應三年五月四日(陽曆六月六日)パリ城西南の郊外、ボワデブロンギユ・ヂブロートームロンシャンに於いて大觀兵式が行はれた。當日はナポレオン三世が親しく閱兵されるといふので、ロシア大帝及び皇太子、プロシア王並に皇太子を始め各貴族が招待され、我が民部卿も御招きに與つたので、私も陪觀するの光榮に浴したのであつた。此日の觀兵式は晴れの催しだけあつて、稀に見る大規模なものであり、歩、騎、砲、工を合せて凡そ六萬人と註せられた。何れも莊麗なる服裝にて各部隊が列を正して整頓するや、佛帝、露帝を始め諸王子等が

騎馬にて一巡し親しく閱兵される。それより佛國陸軍總督の指揮の下に、分列式があつて無事觀兵式を終り、陪觀の外賓一同は、歸館の途についたが、露帝アレキサンドル陛下は、佛帝ナポレオン三世陛下及び皇子等と同乗して歸還の途につかれ、馬車を驅つてボワデブロンギユの松林の間に差掛かると、行列拜觀の見物人の中から、突如として一壯漢が現はれ、短銃を以て歴山帝を狙撃した。併し彈丸は逸して馬に當つたので、幸ひに兩皇帝とも無事であつたが、拜觀者が堵列してゐる途上の出來事なので、忽ち大騒ぎとなり、一時叫喚の巷と化した。此の突然の椿事に當り、扈從の人々は大に吃驚したが、勇敢なる警護の騎兵は、猶も射撃を續ける兇漢に迫つて遂に之れを逮捕するに至つた。だが、民衆の憤怒は此時極度に達し、捕縛されたる兇漢を奪ひ取つて私刑に處せんとする勢ひなので、漸やく之れをなだめ、僅に事なきを得たのである。

露帝狙撃犯人は、平素露國に對して恨みを懷くポーランド人であつたが、此の狙撃事件があつた爲め歴山帝に隨從せる諸官は頗る憤慨し、兇漢はポーランド人であるとは云へ、佛國の首都に於ける白晝の出來事であつて、十分なる取締りさへすれば未然に防ぐ事が出來たであらうに、取締りが不十分である爲めに、斯くの如き不祥事を見るに至つたのである。此上は一日も安心して滯在する事が出來ぬ故、速かに歸國せらるべきであると主張したさうであるが、宏量なるアレキサンドル大

帝は之れを一笑に附し、『斯かる些事に拘泥して日程を變更する様な事は断じて出来ない』と、侍臣の意見を取り上げられなかつたさうで、引續きパリに滞留されたが、露帝の大きな度量によつて一步間違へば國際問題とまでこぢれる虞れのあつた此の異變も、至極無事に解決がついたのであつた。此の歴山帝の態度は、當時パリで賞讃の的となつたものである。

三、狙撃利那の光景及び兇漢の素性

歴山帝狙撃利那の實況や善後措置等については、其の當時の佛國新聞に詳報されたものを澁澤子爵が翻譯され、『航西日記』中に收めてある故、次に之れを抄録する。(編者)

千八百六十七年三月六日、佛國の首都巴里の郊外に於いて閱兵式が行はれ、其の式後ナポレオン帝(佛)とアレキサンドル帝(露)とが王子等と同乗せられて還啓の途に就かれ、馬車がボワデブロンボワデブロンの松並木の間に差掛かつた折柄、突如一人の怪漢が躍り出でてアレキサンドル帝に對し短銃を發射した。豫て歴山帝が巴里滞在中、警護の爲めに附添を命ぜられてゐた佛國騎兵は、斯くと見るや直ちに馬車の乗降口の傍に進んだが、件の怪漢が見物人の堵列を離れてゐるのを發見したので、其儘

馬首を怪漢の方に立て直し、一氣に怪漢を馬蹄に掛けんとする勢ひを以て乗りかけんとした。怪漢はそれにも屈せず、更に續け様に第二彈、第三彈を放つたが、何れも狙ひを逸し其の一彈は騎兵の馬の鼻に當り、他の一彈は見物中の婦人を傷け、最後の一彈では却つて自身の指を怪我したに過ぎなかつた。だが、實際馬の血が馬車の中に飛び散つたので、之れが爲め佛帝、露帝並に王子の衣服を血に汚し、一見すると恰かも負傷された如く見えたので、供奉の人々は勿論、一般民衆も大いに驚駭したが、何れも微傷だも負はれなかつたのは全く天佑といふ可きであらう。此の突發した騒動に附近は煮練り返るやうな大騒ぎとなつたが、犯人は其場に於いて直ちに捕縛され、嚴重な護送の下に市中取締所に送られた。

此の椿事の際に於ける兩皇帝の態度は、實に立派なものであつた。ナポレオン三世陛下は、斯かる狼籍者が現はれたにも拘らず、神色自若として少しも平素と變る處なく、車中に立つて一般民衆に向ひ、『誰も負傷せぬから安心せよ』と仰せられたので、其の沈着の態度に感服せざる者なく、何れも安堵の胸を撫で下した。するとアレキサンドル帝も亦口を開いて、『我等も同じく敵を見た』と自答せられた。此時に、ナポレオン帝は傍らなる王子フラヂユルの衣服が、甚だしく血に汚れてゐるのに氣付き、顧みて『傷を受けられたのであるか』と問はれたが、王子は莞爾として頭を振り、『陛

下こそ別に御怪我はありませんでしたか？』と答へられた。此の揃ひも揃つて落ちつき拂つた平常に等しい動作は、一佳話として傳ふ可きである。

×

×

×

×

狙撃犯人はポーランド人であつて、ペリヅウスキーといふ二十歳の青年であつた。彼れは機械職工であつて二年前に此地(巴里)に來り、グアンといふ工業家に住み込んでゐたのであるが、其後ゲール方に雇はれ、約一ヶ月計り前に暇を取つたまゝで職につかず、佛國政府が新にポーランド人の爲めに與ふる扶助金(一ヶ月三十五フラン)と僅か計りの貯蓄とによつて生活してゐたのであつた。ペリヅウスキー青年が何故に歴山帝を暗殺せんとしたかに就いては、裁判所に於ける陳述により明かである。此の青年はポーランドのウオリニーに生まれ、物心のつく頃から露西亞政府の壓制に悲憤の涙を流して居つた。それで十六歳の時ポーランド一揆の企でに與し、銃を肩にして奮起したが、龍車に向ふ蟻螂に等しく、何等の効果をも收め得られなかつた事は言ふまでもない。其後故郷を去り、巴里に安住の地を見出したのであつたが、無念骨髄に徹し、露國政府を恨むの情は忘れんとして忘れることが出来なかつた。偶々パリに萬國大博覽會の開催せらるゝに當り、歴山帝が來佛するといふ噂を耳にしたので、彼れの若き血は燃え、一死國の爲めに殉せんとする念が熾烈となつ

た。併しながら累を他に及ぼさんことを懼れて、故郷の父母又は親族知己等にも音信を絶ち、且つ他人より其の隠謀の露顯せんことを慮つて一切同志を語らはず、總てを深く自分一箇の胸に藏して機會の到るを窺つてゐた。

其中に露帝の巴里訪問は愈々事實となつて現はれ、六月一日(土曜)に歴山帝が來着してブルバールの離宮に滞在して居る事が明かとなつた。彼れは機會の到來を喜び、露帝の行動を窺つてゐると、日曜(二日)にボツデブロン(競馬見物)に赴く事を確かめたけれども、時間が遅れて機會を失して仕舞つた。然るに火曜日(四日)の夜、佛帝の招待にて觀劇に赴くことを耳にしたので、此度こそ是非刺殺しようと決心し、通路なるブルバール・ペレチエーの往來の角に赴いて、群衆の中に打ち立つて馬車の到るを今や遅しと待ち受けたが、陪從の士官や警衛の騎兵等も相當にあつて、馬車に近づいたけれども、到底、單身躍り出して刺殺する事は覺束ない。それで無念を忍んで其場は思ひ止まり、切めて其顔をよく見覺えて置かうと思つて、群衆の前に出て歴山帝を凝視した。此時群衆は一齊に萬歳を唱へて歓迎したが、彼れは一言も發せず固く唇を嚙んで目送しつゝ、狙撃によつて目的を達するより外に手段がない事を自問自答したのであつた。

翌五日、彼れは狙撃の手段を實行すべく短銃を購ふ爲め、ブルバール・セバストボルにある銃砲